

令和3年度

第53回 全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)

第57回 東京都小中学校環境教育研究発表会

21世紀「環境の世紀」への提言

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

—環境教育によって育む学力と環境保全意識—



日時 令和3年11月19日(金) 13時30分 ~ 17時00分

会場 オンライン開催(録画配信・期間限定録画配信)

主催 全国小中学校環境教育研究会 東京都小中学校環境教育研究会

後援 文部科学省 環境省 東京都教育委員会
全国連合小学校長会 全日本中学校長会 東京都公立小学校長会
東京都中学校長会 日本ESD学会 日本環境教育学会
ESD活動支援センター 関東地方ESD活動支援センター

表紙・裏表紙の絵画ポスター

令和3年度 第24回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール受賞作品

表表紙の絵画

◆会長賞

小学校の部 大阪府河内長野市立長野小学校 6年 森 悠仁

裏表紙の絵画

■会長賞

中学校の部 長野県飯田養護学校 中学部3年 浦野 駿平

主 催：全国小中学校環境教育研究会
後 援：文部科学省 / 環境省 / 公益財団法人日本環境協会
協 賛：株式会社みずほフィナンシャルグループ
明治安田生命保険相互会社
丸紅株式会社
積水化学工業株式会社

応募総数：小学校 3,131作品 中学校 2,948作品 計 6,079作品

目 次

目次	1
大会次第	2
挨拶 全国小中学校環境教育研究会 会長	藤森 克彦 4
挨拶 文部科学省 初等中等教育局 視学官	藤枝 秀樹 様 5
挨拶 環境省大臣官房 総合政策課 環境教育推進室長	岡崎 雄太 様 6

口頭発表の部

1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進 ～環境教育によって育む学力と環境保全意識・つなげる環境教育の輪～ 東京都小中学校環境教育研究会 会長 関口 寿也 研究部長 鈴木 元.....	8
2 学校と地域が協働する ESD for SDGs ～山あいの“小さな学校”の世界につながる“大きな挑戦”～ 長野県飯田市立上村小学校 校長 北原 文雄.....	14
3 知床らうすの環境教育 ～自然遺産の環境下で持続可能な教育への挑戦～ 北海道羅臼町立羅臼小学校 校長 西田 威嗣 教 頭 佐藤 英雄.....	22
4 ふるさとの川 山科川を見つめて 京都府京都市立池田小学校 校長 青山 剛 教 頭 溝脇 孝.....	36

誌上発表の部

1 郷土に愛着をもち、よりよく課題を解決する子供の育成 ～地域を「知る」・「調べる」・「守る」・「考える」活動を通して～ 青森県上北郡東北町立甲地小学校 校長 内海 浩幸.....	44	
2 より広い視野で問題を捉え、よりよい行動を創り出す児童の育成 ～4校が協働した海洋教育プログラムを通して～ 福岡県大牟田市立みなと小学校 校長 馬籠 秀典 主幹教諭 下地 徹.....	54	
3 持続可能な社会を創造する力の育成を目指した環境教育の実践 ～豊かな体験を通して社会性や協調性を育む～ 石川県白山市立北星中学校 校長 東海林 幸男.....	60	
4 「深一学で身につける生きる力の育成」 ～異年齢集団活動による探求力・問題解決力の育成～ 東京都江東区立深川第一中学校 校長 佐川 明夫 E S D担当 謝敷 治彦.....	66	
全国小中学校環境教育研究会 沿革史	75
大会宣言	89

大会次第

日時 令和3年11月19日(金) 13時30分～17時00分

会場 オンライン開催(録画配信・期間限定録画配信)

会次第

- 司会・進行 副会長 伊勢 明子
- 1 開会挨拶 全国小中学校環境教育研究会 会長 藤森 克彦
 - 2 来賓祝辞 文部科学省 初等中等教育局 視学官 藤枝 秀樹 様
 - 3 研究発表 口頭発表
 - 4 誌上発表校紹介
 - 5 講演 「SDGsを自分事に 私たちと世界・地球をつなげる思考を」
国連広報センター 所長 根本かおる 様
「地球環境の今 ～生物多様性と私たち～」
国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS) 研究員 Evonne Yiu 様
 - 6 ディスカッション 「環境問題の今、環境教育の今」
国連広報センター 所長 根本かおる 様
国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS) 研究員 Evonne Yiu 様
東京都小中学校環境教育研究会研究員
 - 7 大会宣言 副会長 伊勢 明子
 - 8 閉会の辞 副会長 關口 寿也

はじめに

全国小中学校環境教育研究会
会長 藤森克彦

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、昨年度の大会は初めてオンラインで開催しました。従来の大会では当たり前のように、公開授業をはじめ直接皆様と近況を報告し合ったりご意見を頂戴したりしました。それができなくなり、今までの大会が大変意義深く価値あるものであったと改めて思いました。一方、前回は北海道から沖縄、離島の方からもご参加いただき、全国の皆さんと成果や課題を共有することができました。これはまさにオンラインの利点であり、本研究会としても大会開催の手応えを得ることができました。

本来ならば、新型コロナの感染状況が改善し、以前のように学校を会場に盛大に大会を開催したかったところですが致し方ありません。今年度もオンラインでの大会開催となりますが、今回は四つの学校・団体から動画によるご発表もいただきます。関係の皆様方のご支援ご高配に感謝申し上げる次第です。

さて、本会は昭和42年に公害教育研究会として誕生し、その後全国小中学校環境教育研究会と改名して今年度で53年目を迎えました。発足当時は地域の公害から子供たちの健康を守ることが急務であったことから、教育環境や公害に対する意識・健康の状況調査をはじめ、環境週間の行事や環境教育推進事業への協力を通じて、様々な啓発活動を進めてきました。それから半世紀、地球規模での気候変動や温暖化による影響など様々な環境問題が深刻化している現代では、地球の未来を担う子供たちに「環境を保全する意欲や態度と環境問題を解決するための問題解決能力」を育成することが喫緊の課題となってきました。さらに、コロナ危機を受けた誰も予測できない社会を生き抜くためには、世界の環境・貧困・人権・平和・開発といった様々な問題を自らの課題として捉え、主体的に学び、身近なところから協力して取り組むことを通して、課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことが重要となります。その継続によって社会全体のパラダイムシフトを図り、持続可能な社会を創り出していくことがESDの目標であり、私たちが取り組んできた環境教育のめざすところでもあります。

学習指導要領の前文に、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手となることができるようにする」ことが明記され、ESDを踏まえた環境教育の展開が示されました。小中学校においてSDGsを視野に入れた教育活動の充実を図ることが、これまで以上に重要になってきます。さらに、ICT環境の充実が進めば、学校間はもとより学校と社会・世界との距離はぐんと縮まり、これからの学校の在り方そのものを常に問い直すことも求められます。今こそ環境教育ESDで育む能力・態度を明確にし、カリキュラム・マネジメントを推進することが極めて重要です。本大会が各地域の実践交流の場となり、一層輪を広げ連携していくためのきっかけとなること。そして、さらなる進展を図る機会となることを願ってやみません。

結びとなりますが、本大会を開催するにあたり、文部科学省、環境省、東京都教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、東京都公立小学校長会、東京都中学校長会、日本教育公務員弘済会東京支部、日本ESD学会、日本環境教育学会、ESD活動支援センター、関東地方ESD活動支援センターの皆様をはじめ関係各位の皆様にご多大なるご指導、ご助言、ご後援を賜り、心より感謝申し上げます。

学習指導要領における環境教育を考える

文部科学省初等中等教育局
視学官 藤枝 秀樹

貴研究会の皆様方には、コロナ禍の中で、日頃から児童生徒の学びの保障のためにご尽力いただいておりますこと、また、学校における環境教育の充実と発展にご尽力いただいておりますことに心から感謝申し上げます。

地球温暖化や自然環境の破壊、資源エネルギー問題など、地球規模の様々な課題が増大し複雑化する中、エネルギーの効率的な利用など環境に対する負荷を軽減し持続可能な社会を構築するため、国民一人一人が様々な機会を通じて環境問題について学習し、自主的・積極的に環境保全活動に取り組んでいくことが求められています。

文部科学省では、国民がその発達段階に応じて、あらゆる機会に環境の保全についての理解と関心を深めることができるよう、学校教育や社会教育における環境教育の推進のために必要な施策に取り組んでいるところです。

学校における環境教育については、これまでも、小・中・高等学校を通じ、児童生徒の発達の段階に応じて、教科等横断的な学習が行われてきており、全国の学校において特色ある取組が実践されています。また、昨年度から順次実施されている新学習指導要領においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられており、総則をはじめ、社会科や理科、技術・家庭科など関連の深い教科を中心に環境教育に関する内容の充実が図られています。各学校においては、各教科や総合的な学習の時間など、それぞれの教科等の特質に応じて環境に関する内容を扱ったり、地域や学校等の特質を生かしつつ、カリキュラム・マネジメントの視点も踏まえながら各教科等の学びを関連付けて扱ったりすることが考えられます。その際、子供の姿や地域の実状を適切に捉え、育成すべき資質・能力を明確にし、学校としてのまとまりの中で、環境教育をどのように位置付け、展開していくかを考えていただきたいと思います。

文部科学省としましては、新学習指導要領の内容を円滑に実施し、環境教育の充実がより一層図られるよう、その趣旨の周知や必要な支援等に取り組んでまいりますので、引き続き皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、本大会は昨年に引き続きオンライン開催となりますが、多大な成果が得られることをご期待申し上げるとともに、本大会を主催されます全国小中学校環境教育研究会の更なるご発展と、関係の皆様方の益々のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げます。

環境教育及び持続可能な開発のための教育(ESD)を取り巻く情勢について

環境省 大臣官房総合政策課
環境教育推進室長 岡崎 雄太

第53回全国小中学校環境教育研究大会及び第57回東京都小中学校環境教育研究発表会の開催に当たり御挨拶申し上げます。

貴研究会の「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」を研究主題とした諸活動に敬意を表するとともに、我が国における環境教育の推進への御貢献に感謝申し上げます。

さて、同様の御認識をお持ちの方も多いと存じますが、昨年度から環境教育及びESDを取り巻く情勢には、大きな変化が生じています。

まず、第2期ESD国内実施計画の策定です。本年5月に策定された本計画では、「ESD for 2030」の理念を踏まえ、ESDが全てのSDGs達成への貢献に資することや、2050年カーボンニュートラル、ジェンダー平等、AI・DXの推進等現下の課題を踏まえつつ持続可能な社会の創り手を育成することが明確化されました。また、2030年に向け、本計画に掲げる5つの優先行動分野に基づき、我が国のESDを推進していくこととされています。

次に、2050年カーボンニュートラルの実現に向けた取組です。昨年10月、我が国は2050年までにカーボンニュートラル、脱炭素社会（人の活動によって発生する温室効果ガスの排出量と温室効果ガスの吸収量との間に均衡が保たれている社会）の実現を目指すことを表明しました。

脱炭素社会の実現に向けては、国民・国・地方公共団体・企業など、あらゆる主体が主体的に取組を進めることや、国民一人ひとりのライフスタイルの転換が不可欠となるため、持続可能な社会の創り手となることが期待される子供たちが、地球環境問題について理解を深め、環境を守るための行動をとることができるよう、環境教育を今後ますます充実していくことが求められています。

そのため、本年6月2日に環境省と文部科学省の連名で全国の教育委員会宛てに環境教育の充実に向けた通知を発出し、また、本年8月26日には文部科学省において環境教育の一層の充実を図るため中学校及び高等学校学習指導要領解説の改訂が行われたところです。

このように、環境教育及びESDを取り巻く情勢に大きな変化が生じている中において、貴研究会の活動である研究や実践はますます重要となり、貴研究会に期待される役割は大きくなるものと認識しております。引き続き、環境省として必要な連携・協力を行っていく所存です。

むすびに、第53回全国小中学校環境教育研究大会及び第57回東京都小中学校環境教育研究発表会の御盛会と関係各位の御健勝を祈念し、御挨拶といたします。

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

～つなげる環境教育の輪～



東京都小中学校環境教育研究会
 会長 関口 寿也
 研究部長 鈴木 元

I 研究主題設定の理由

ー環境問題と私たちの生活ー

新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延は、私たちの市民生活、経済活動、衛生概念を根底から覆す事態を引き起こしている。ワクチンの普及や治療薬の開発により、第5波を乗り越えはしたが、世界的蔓延は、まだまだ収束の見通しは立っていない。

また、気候変動の影響により世界各地で発生している異常気象や、エネルギー問題、貧困や飢餓など、人類がかつて経験したことのない環境問題が地球規模的に生じている。日本においても、昨年5月に北海道の佐呂間で最高気温 39.5℃に達したことは記憶に新しい。全国的に見ても5、6月に真夏日となる日が多くなっている。さらに今年10月には、九州で連続真夏日の記録を更新した。現在、小中学校では、新型コロナウイルス (Covid-19) 感染症対策のマスク着用に併せて、熱中症対策を講じなければならない、体育的行事だけでなく、日常の校庭利用や水泳指導の中止を余儀なくされることも増加している状況である。

今年4月、米国で開催された気候変動サミットにおいて、日本政府は温暖化ガスの排出量を2030年までに、2013年度比で46%削減すると表明した。この46%という数値は、これまでの削減目標である26%から大きな積み増しである。また、その他の国も相次いで新たな削減目標を表明した。これらの目標は本当に実現可能な目標なのであろうか。国内では、地域における2050年脱炭素社会の実現に向けた施策を検討する国・地方脱炭素実現会議が6月9日に首相官邸で開催され、2030年までに少なくとも100カ所の脱炭素を実現する先行地域を創出することなどを盛り込んだ「地域脱炭素ロードマップ」を取りまとめた。このロードマップの地域と暮らしに関わる個別分野別の対策・促進施策には、循環経済への移行として「プラスチック資源循環の促進」や「食品廃棄ゼロを目指す先行エリアの創出」、「循環型ファッションの促進」などが掲げられている。

また、各国政府のみならず、民間企業や経済界はSDGsに対して大変真摯で積極的な取り組みを進めている。ダイベストメントや石炭火力発電所の運用停止、RE100、喫煙対策、フードロス対策等、マスコミが話題を提供しない日はない。その根底にあるのは、SDGsが世界共通言語であるということ、「ひとごと」から「自分ごと」へとといった意識の転換と、「企業経営」としての戦略の転換である。

ー美しいものを美しいと感じる心ー

これまで東京都小中学校環境教育研究会は、人類の行き過ぎた社会活動が引き起こしてきた環境問題に警笛を鳴らし、持続可能な社会への改善を試みる教材化を進め、授業実践を重ねてきた。授業実践に取り組む中で、私たちの実生活はどう変化したであつたらうか。給食の残菜、コンビニや飲食店の食料廃棄、化学繊維を大量に利用した衣料品廃棄など、様々な場面で今なお環境への負荷をかける生活を続けている。子供たちは、様々な環境問題について学ぶ機会が増え、問題意識をもつようになってきているが、実生活では、ペットボトル飲料やファストファッションを無意識に手にしている状況にある。特に東京都の子供たちは、自然環境に触れる機会が減り、化学的な染料の色やモニターを通した色など人工的に作られた色に触れる機会が増している。自然のもつ本来の美しさを知らずに大人になってしまう。例えば昆虫の羽の輝き、天然素材の風合いや香り、自然の染料の繊細な色などである。本物のもつ自然な美しさを美しいと感じ、それらを無意識に守りたいと思う心を培っていききたいと考えた。

— 私たちには ESD がある —

学校教育において、多くの教員は、「持続可能な社会の作り手」の育成に対するビジョンがまだまだ明確にすることができていない。持続可能な社会の実現には、指導する教員自身の意識の変容も不可欠となっている。これまで本研究会が取り組んできた ESD は、その実現を可能にすると信じる。それは、教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。

これまで本研究会が取り組んできた ESD の授業概念を盛り込み、持続可能な地球に向けての小さな一歩を積み重ねてゆくべく、教師一人一人が児童・生徒の実態に応じ、自らすすんで環境教育の実践を構築することができるためのヒントとして「学びの地図」を作成した。環境教育とは何か、ESD とは何か、学校現場が来るべき私たちの明日に向けて迷うことなく前進するために、本研究を生かして欲しい。

II 研究の方法

- 1 役員定例会で理論構成を行う。
- 2 全国小中学校環境教育研究会で作成した「新しい環境教育」で示す児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、本会研究部で指導計画・授業プラン・学びの地図を作成する。

【児童・生徒に身に付けさせたい3つの能力・態度】

地球とそこに生きるすべての生命にとって

- (1) よりよい環境を求め持続させる意欲や態度
- (2) よりよい環境のあり方を考える力
- (3) よりよい環境の創造を目指す社会にすすんで参画し、貢献する実践力

- 5 全国小中学校環境教育研究会、外部機関と連携をし、研究員各校において指導実践を深める。
- 6 全国小中学校環境教育研究会の発表会（令和3年11月19日 オンライン開催）において、研究発表を行う。

III 研究経過

- 1 学校現場での ESD 推進状況の確認
- 2 取り組み可能な課題の検討
- 3 これまで取り組んだ「2100年の未来天気」「替えて代えて変える未来」の検証
- 4 5・6年家庭科・総合「自分たちの育てた綿 × 自分の思いが加わったエコなモノづくり」、5年総合「世界を見直して環境を考えよう」、学びの地図作成
- 5 研究会員の学校における授業実践（一部）
- 6 ポートフォリオによる授業検証

IV 学びの地図 作成事例

1 第5・6学年 家庭科・総合的な学習の時間

「自分たちの育てた綿 × 自分の思いが加わったエコなモノづくり」

<学びの地図 作成の視点>

(1) 児童・生徒の実態

経験、体験が乏しい。そのため、ものが作られる過程を知る機会に乏しく、本物の価値に気付いていない。第3学年で養蚕に触れ、繭に触れた経験のある児童・生徒もいるが、天然素材と化学繊維、不織布の違いを知らず、デザイン性や機能性だけでもものを選んでしまう傾向にある。また、より鮮やかな色を好む傾向にあり、自然由来の色や形などにあまり興味・関心がない。

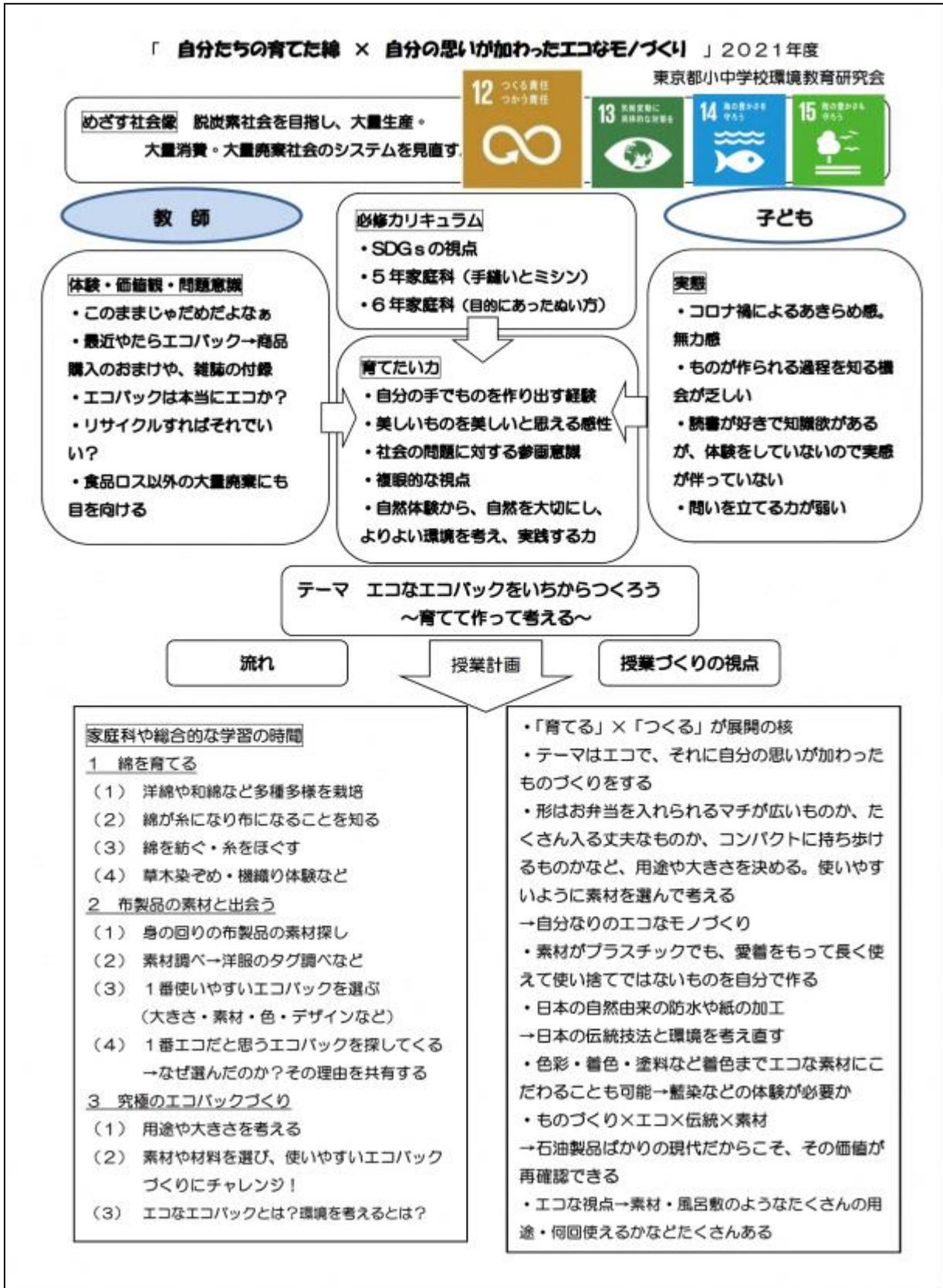
(2) 教師の思い

美しいものを美しいと感じ、その色や風合いなどのよさに気付いてほしい。また、これまで学習した環境学習においても、「エクバッグは本当にエコなのか？」など常に問題意識を感じながら学習に望ませたい。

(3) めざす社会像及び育てたい力の明確化

めざす社会像及び育てたい力を明確にし、教員で共有することで、児童・生徒の目標設定を具体化させることができる。

(4) カリキュラム・マネジメントの視点からこれまでの活動をつなぐ
 例) 総合的な学習の時間「環境問題」×家庭科「手縫いとミシン、目的にあった縫い方」
 日本の伝統的なものづくりと環境学習をつなぐことで、より効果的に児童・生徒の意識を変えていくことができる。



2 第5学年 総合的な学習の時間 「世界を見直して環境を考えよう」

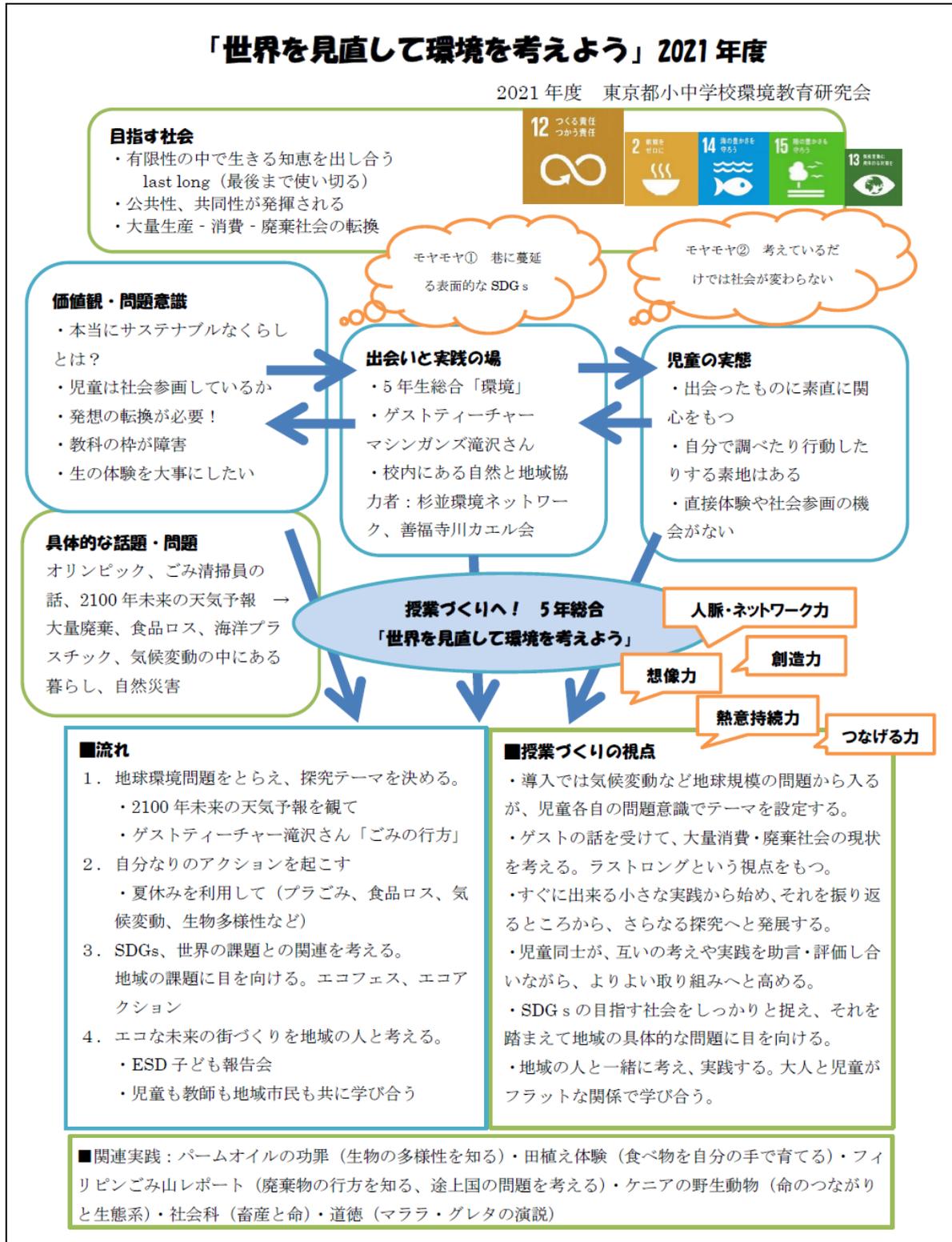
<学びの地図 作成の視点>

(1) 児童・生徒の実態

興味・関心をもったことに対しては、自らすすんで調べたり行動したりすることはできるが、直接的な体験や社会参画の機会が少ない。

(2) 教師の願い

「本当の意味でのサステナブルとは何か？」を児童・生徒に「自分ごと」として環境問題を捉えさせたい。また、地域のことを考え、自ら社会参画する姿勢を身に付けさせたい。



- (3) めざす社会像、育てたい力の明確化
- ・有限性の中で生きる知恵を出し合う last long (最後まで使い切る)
 - ・公共性、共同性が発揮される
 - ・大量生産 - 消費 - 廃棄社会の転換
- これらの社会像をもとに、

last long という視点をもたせる。
 児童同士が、互いの考えや実践を助言・評価しあえる。
 地域の具体的な問題に目を向ける。

という育てたい力を明確にした。

- (4) カリキュラム・マネジメントの視点からこれまでの活動をつなぐ
- 総合的な学習の時間「環境」と各教科等のつながりを明確にした。その上で、年間指導計画を作成し、学校の教育活動全体を通して、上記の育てたい力の育成を図った。

第5 学年		世界を見直して環境を考えよう (単元計画/全70時間)		外部人材・地域資源等 ・マシンガンズ滝沢さん ・エコプロ ・すぎなみ環境ネットワーク他				
課題設定		ステージ1	ステージ2	ステージ3				
環境問題に対する行動	2100年未来の天気予報をもとに、環境問題についての課題を設定しよう ○2100年未来の天気予報の動画をもとに、地球温暖化と世界規模の環境問題について知る。(課題設定) ・地球環境問題に対して、抱いた疑問や感想から、問いを立てる。 ・解決策を考える。本活動のゴールイメージをもつ。 ○ゲストティーチャー(滝沢さん)の話から、身近な環境問題に対しても問題意識をもつ。(情報収集) ・ごみ清掃員による、大量廃棄物の現状から、自分たちの生活とごみの関係を知る。 ・食品ロスやプラスチックごみの問題について知る。		環境について、自分が問題意識を持ったテーマについて知ろう。 ○個々に問題意識をもった環境問題について調べる。 ・必要な情報を収集する。(本、図鑑、インターネット、インタビュー等) ・情報を関連付けたり、吟味したりする。友達同士で調べたことや考えたことを交流し、意見を伝え合う。 ○調べたことをもとに、自分ができることを考えて実践する。 ・自分でもできることを考えて夏休みを利用し、実践する。 ・実践したことをレポートにまとめる。 ・新たな価値を創造する：「環境問題は、小さなことでも自分ができることから始めることが大事」「環境問題は、自分たちだけでは変わらないので多くの人で取り組むことが大事」 ○学習と活動を振り返り、次のステップにつなげる。		よりよいエコな地域や学校づくりのために、私たちにできることに取り組もう。 ○これまでの取り組みを振り返り、よりよいエコな地域や学校づくりのために、どう取り組むか計画を立てる。 ・これまでの取り組みを振り返る。 ・自分たちにできることを考え、アクションチームを結成する。 ・図書館・ネット等で情報を集めたり、専門団体等から話を聞いたりする。 ○設定したアクションに対して自分たちにできることについて、調べた情報を整理・吟味し、できることを実行する。 ・チーム別の活動 ・学年で各学級それぞれの取り組み発表・交流 ・他学年や学校全体への働きかけ ・地域への働きかけや、地域とのコラボ ・エコフェスやエコサミットなどのイベント ○学習と活動を振り返り、子ども報告会につなげる。		よりよい地域の環境のため考えたり取り組んだことをもとに、思いや願いを発信しよう ○報告会に向けて情報を収集する。 ・発表したい内容・方法について不足した情報などを収集する。 ・仲間と情報交換しながら調べた結果を整理する。 ・目的に合った内容・方法になっているか、吟味する。 ・発表の内容・方法について考える。 ○発表することをまとめ・表現する。 ・取り組んできたことから『わたしが考える「エコな地域・学校」のために必要なこと』をまとめる。 ・ESD子供報告会で発信する。 ○1年間の学びと気付きを振り返り、まとめる。6年生での活動につなげる。	
	理科 「天気の変化」「台風」 ・気候変動と環境問題を関連づけてとらえることができる。 【A】 【B】 地域 マシンガンズ滝沢さん		社会 「食糧生産と私たちの暮らし」(米作り、農業) 【A】 【B】 ・私たちの暮らしに欠かせない食糧生産の在り方が、自然環境や生物資源、食品ロスなど多様な環境問題と関連していることを理解する。 道徳 「一ふみ十年」(自然愛護) 【B】		国語 「固有種が教えてくれること」「表やグラフを用いて書こう」 【C】 ・統計資料などのデータの読み取り方を知り、環境にかかわるデータを分析し、これからの未来を志向することができる。 社会 「食糧生産と私たちの暮らし」(水産業、食料生産)「工業と私たちの暮らし」 【A】 【B】 道徳 「流行おくれ」(ものを大切に使う節度) 【B】 地域 すぎなみ環境ネットワーク 専門家・研究者 JA 地域の農家の方 農業公園		社会 「環境と私たちの暮らし」 【A】 【B】 (水、森林、自然災害) 交流 ユネスコスクールネットワーク 【B】 道徳 「イルカの海を守ろう」(自然愛護) 【B】 地域 すぎなみ環境ネットワーク	

問題解決の質を高める=A よりよく価値観を広げる=B 各教科等の学びの質を高める=C

(5) 実践

ア 環境問題への意識づけと課題設定

「2100年未来の天気予報」をもとに抱いた疑問から問を立て、解決策を考え、本活動のゴールイメージをもつ。

イ 情報収集とさらなる問題意識の醸成

ゲストティーチャーの講話から身近な環境問題に問題意識をもつ。(情報収集)

ウ テーマについての調べ学習

エ エコな地域や学校づくりのための実践

自分たちにできることを考え、アクションチームを結成し、様々な取組を行う。

<児童のテーマと考察> (夏休みの取組「世界を見直して環境を考えよう」より)

テーマ	考察
拾って分かるゴミ拾い	いったいどうすればゴミが減るかを考えた結果、公園近くにそのままゴミを捨てることのできる箱を何個か用意すればゴミ捨ては減るんじゃないかなと思いました。
自分の家のエネルギー使用量を調べる	電気はエアコンを使う夏に、ガスは床暖房やお風呂に入る冬に使用量が多いことがわかりました。地球温暖化を防ぐために、家で省エネを進めるためには、エアコンや床暖房の使い方を工夫したらいいと思いました。特にエアコンは、カーテンを閉め、冷やしすぎず28℃に設定する。扇風機を同時に使うなど工夫をするとういと思いました。
環境に対する取組をする企業 (調べて、できる限り実際に行ってみた)	・余った食材を持ち帰ることができるよう無料でお持ち帰りパックを提供し食品ロスに取り組んでいる企業があった。企業以外の自分たちや大人たち、一人一人が行動して、協力したら環境はすぐに変わると思った。活動をしてそれを「ずっと続けることが大切」だと思った。
食品ロス 食品ロス「0(ゼロ)」応援店について聞いてみた。	食品ロス「0(ゼロ)」応援店は、本当にいい取組を行っているんだと思う。また区内だけでもたくさん食品ロス「0(ゼロ)」応援店があったので、区は、少しは食品ロスに向けて取り組んでいると思う。買い物では、一つの行動で食品ロスが出るか出ないかが変わるんだなとすごく思う。これからいろいろな工夫を考え取り組んでいきたい。

取り組んだこと

・食品ロス「0(ゼロ)」応援店について調べて、実際に訪ねてみた。

・食品ロス「0(ゼロ)」応援店では、余った食材を持ち帰ることができるように無料のお持ち帰りパックを提供している。

・家でもできる限り省エネをするために、エアコンの設定温度を28℃に設定し、扇風機を同時に使うなど工夫をした。

・ゴミ拾いをするために、公園近くにゴミ箱を増やしてほしいと思った。

・食品ロス「0(ゼロ)」応援店では、余った食材を持ち帰ることができるように無料のお持ち帰りパックを提供している。

・家でもできる限り省エネをするために、エアコンの設定温度を28℃に設定し、扇風機を同時に使うなど工夫をした。

・ゴミ拾いをするために、公園近くにゴミ箱を増やしてほしいと思った。



食品ロス
ペットボトル、缶、ジュースの
容器など

取り組んだこと

・食品ロス「0(ゼロ)」応援店に行き、どのような取組をしているか聞いた。

・食品ロス「0(ゼロ)」応援店の売場内には、余った食材を安く売るコーナーがあり、どのような取組をしているか聞いてみると、2つ取り組んでいるそう。

①「サイズが小さく分けられている、大もり、中もり、小もり」などがある。たくさん食べたときや少しでいいときなど自分の自分にあったサイズを選べる。

②「スープの量やめんを量を増やせる、スープの量やめんを量を増やせるだけ、めんを増やせるか変わるのだから取り組みだ」と思う。

・買い物をするときの工夫

家で買っても食品ロスの原因の一つ「買い物」、それを食品ロスがでなく買い物をした。

おれが買うものをよく見て、買う物だけをメモする。

おれが買うものとほかのものがあれば、ほかのものを買って、必要なものだけを買う。おやつを買ったときは、大ぶりのものはなく小ぶりのものを買って、食べきれないようにした。

考察

食品ロス「0(ゼロ)」応援店は、本当にいい取組を行っているんだと思う。また、区内だけでもたくさん食品ロス「0(ゼロ)」応援店があったので、区は、少しは食品ロスに向けて取り組んでいると思う。買い物では、一つの行動で食品ロスが出るか出ないかが変わるんだなとすごく思う。これからいろいろな工夫を考え取り組んでいきたい。

考察

食品ロス「0(ゼロ)」応援店は、本当にいい取組を行っているんだと思う。また、区内だけでもたくさん食品ロス「0(ゼロ)」応援店があったので、区は、少しは食品ロスに向けて取り組んでいると思う。買い物では、一つの行動で食品ロスが出るか出ないかが変わるんだなとすごく思う。これからいろいろな工夫を考え取り組んでいきたい。

児童の夏休みの取組

V 終わりに

今年度の研究は、効果的に環境意識の向上を図るために、本研究会がどのように授業をデザインしているかを再考し、これまでの取組をまとめ、つなぐこととした。実践はまだ途中経過ではあるが、学びの地図により、授業のデザインを示すことができた。答えがなく難しいと捉えられ敬遠されてきた環境教育は、明確な答えがないからこそ子供たちとともに考え、様々な問題をつながりと捉え、解決むけて行動していく必要がある。まさにESDそのものである。今回作成した学びの地図は、あくまでもその一部分にほかならない。

私たち東京都小中学校環境教育研究会は、これからも、澄み切った天高い青い空を東京に、そして世界に広げるため、ESDの手法を用いた環境教育を進めていく所存である。手を取り合い、それがたとえ小さな教育活動であったとしても、持続可能な社会の創造を信じて取り組んでいきたい。

～山あいの“小さな学校”の世界につながる“大きな挑戦”～

長野県飯田市立上村小学校

校長 北原 文雄

1 はじめに

上村小学校は、南アルプスのふもと、遠山郷と呼ばれる谷あいにある。この南アルプス一体は、平成 20 年に日本ジオパークに認定され、平成 26 年にはユネスコエコパークにも登録された。南アルプスは、3000m 級の山々が連なり、今でも年間 4mm ほど隆起していると言われる。高い山や深い谷には多様な

生き物が生息し、豊かな自然が残っている。また、日本列島を貫く巨大な断層「中央構造線」が走り、地質学的にも貴重な地域である。

有名なものとして「霜月まつり」があげられる。国の重要無形民俗文化財に指定され、旧暦の霜月、12 月に祭りが行われる。湯立て神楽の古い形式を残し、国中の神々をお招きして煮えたぎらせた湯を神々に捧げる。「千と千尋の神隠し」のモデルになった祭りでもある。煮えたぎる湯を素手ではねかけて1年の邪悪を払い、新しい魂をもらって新年を迎えるという祭りである。



平成 29 年度から、飯田市と立

教大学 ESD 研究所とが連携協定を締結し、遠山郷プロジェクトが推進されている。このプロジェクトでは、

- ① 過疎化・少子高齢化が進む中山間地域の学校を中心とした地域づくり
- ② 小規模校における ESD/SDGs 教育を中心とした特色あるカリキュラムづくり
- ③ 地域自治区における学校、公民館、自治振興センターの協働モデルづくり
- ④ ESD の視点から多様な形で進められてきた地域創生の成果と戦略の共有

が行われてきている。

そんな中、上村小学校では、平成 30 年飯田市小規模特認校制度の実施により 2 名の転入学児童があり全校生徒 9 名となった。令和 2 年度は、総合的な学習の時間を中心とした ESD を推進していく教育課程を編成してきている。

2 令和 2 年度 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間では、しらびそ高原や「日本のチロル」と呼ばれる下栗の里で、自然体験学習を行っている。地域の方から教えても



らいながら、そばや下栗いもの栽培、茶摘み体験を行っている。また、地域に伝わる伝統行事「霜月まつり」



について調べたり体験したりする活動を行い、実際の祭りで、横笛を吹き、子どもの舞を舞って参加している。

毎年行っている地域の川づくり事業とタイアップしたアマゴ放流では、令和元年度の児童会長は「みなさんは、海で大量のプラスチックごみが問題になっているのを知っていますか。川をきれいにすることが海をきれいにすることにつながります。上村の川はとてもきれいです。これからもきれいな川を守っていきたく、そういう願いをもって稚魚を放流しましょう」と話をした。

本校 ESD 活動の母体はみどりの少年団「KGC かみっこグリーンクラブ」であり全校児童が団員になっている。主な活動の一つとして栽培活動がある。学校を花で飾ろうとプランターでの花作り、菊づくりを行っている。地域の特産物である「しいたけ」「そば」の栽培に加え、令和 2 年からこの地域の伝統野菜に指定されて

いる「下栗いも」の栽培にも挑戦した。下栗いもはジャガイモの一種で、でんぷんの割合が高く、小ぶりで実がしまっていてにくずれしにくく味が濃厚となっている。

学校の前には上村川が流れている。夏には、そこで川遊びを行う。色とりどりの石の上を流れる清流に流される心地よさを児童は実感している。この清流を守るためにごみ拾い活動をしたり、アマゴの稚魚を放流したりして、魚が安心して棲める川、川の生き物に親しめる川づくりの活動を行っている。

令和 2 年度より目玉となる活動として「かみっこグリーンクラブ 自然体験」を行っている。構想では 1泊 2日のキャンプとして、しらびそ高原、下栗の里でのジオパーク学習や体験活動を通して地域の魅力を知る活動を考えていた。コロナの影響で 1日だけにはなったが、学校、保護者、地域が一緒になって、山郷の自然や環境、人々の生活について、学んだり体験したりして、理解を深めることをねらいに実施した。



実施にあたり、子どもたちと一緒にこの活動の目的や SDGs との関連について考え合った。子どもたちは、自

分たちの目標を考え、やりたい活動についての案を出した。子どもたちの提案をもとに、学校、地域の皆さんと話し合いながら活動内容を決めてきた。

令和2年度は夏休み中の8月8日(土)に、この自然体験を行った。その一つはジオパーク学習「中央構造線露頭見学」。上村地区に断層の露頭が見える場所がある。地域講師山口さんから中央構造線についての説明を聞き、露頭の観察を行った。山口さんは、子どもたちが利用しているスクールバスの運転手でもあり、子どもたちにとってはとても身近な人で、まだ若く、子どもたちはとても親しみを持っている。その方からの説明を聞くということで、子どもたちは真剣に聞いていた。実際に露頭を触ってみて土の感触を確かめたり、中央構造線の上に立ったりして「右半分は太平洋から来た堆積岩、左半分は花崗岩」と確認する子どももいた。次に下栗の里に上がり、地元の下栗の里案内人の方に下栗の地形の特色や歴史、霜月まつりのお話を聞きました。いずれは、子どもたち自ら下栗のガイドができるようになればと考えている。午後は、地域の「しぜんと遊ぼうプロジェクト」の皆さんと一緒に、下栗の自然を生かした活動「本当の下栗いもほり体験」「自然散策」「自然のものを使った工作」を行った。子どもたちのリクエストで木の枝にロープを下げてのブランコも出来上がった。後日、子どもたちと振り返りを行った。子どもたちが決めた目標

(1) 自然と触れ合いながら、知識を深めていこう

(2) 楽しみながら自然を学ぼう

が達成できた。

3 令和3年度 総合的な学習の時間

授業者は、子どもたちが単に「〇〇を体験してみる」「〇〇を調べてみる」といったことにとどまらず、そこからどのような気づきをしてどのような願いをもったのかを見取ってつなげ、主体的に課題を探究できるような授業を目指していきたくて考えていた。“子どもたちが教師から与えられたことに、単に従って活動するだけでなく、子どもたちが願いをもって自分たちで進めていく”ことを願い、次のように自己課題を設定した。

自己課題

子どもが主体的に課題を探究できるようにするために、教師はどのように寄り添い、子どもの学びをどのようにつなげていったらいいのか考えたい。

(1) 単元名 「上村のために自分たちができることを考え、行動しよう」

(2) 単元目標

令和2年度に様々な自然体験活動を通して上村の良さに触れた子どもたちが、上村の人口減少等について課題をもち、上村のために自分たちができることを主体的に考え、活動することを通して、持続可能な地域づくりへ参画しようとする態度や、地域を大切にしようとする心情を育てる。

(3) 単元の評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
①上村の良さに気づいている。 ②上村の人口減少等の課題について気づいている。 ③これまでの学習をまとめ、振り返りを通して、上村のために活動することの意義を理解している。	①上村のためにできることについて自分事として課題を見つけ、学習課題を設定している。 ②課題解決に必要な方法を明確にしながら、計画を立てている。 ③上村の良さを発信するためのより良い方法、内容について考えている。 ④活動を通して明らかになったことや	①課題解決に向けて友達や地域の人々と関わりながら、より良い方法で取り組もうとしている。 ②自分も地域の一員であることを自覚し、上村のためにできることを考えて積極的に課題解決に向けて取り組もうとしている。

	考えをまとめ、分かりやすく表現している。	
--	----------------------	--

(4) 単元の指導と評価の計画

次 (時間)	☆主な学習活動 ・子どもの姿	授業者の自己課題解決に向けての手立て (教師の寄り添い方)	評価
1 (3) 6月	<p>☆写真を見ながら昨年度の自然体験活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上村は自然に囲まれていて、いろんな体験ができて、良い所だね。 ・私たちの活動には、こんなにたくさんの地域の人が協力してくれていたんだね。 <p>☆上村の課題について知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開山祭に行った時に、観光スポットなのにゴミが落ちていて悲しかったな。 ・上村はこんなに良い所なのにどんどん人口が減っていつているよ。 <p>☆どんな上村になってほしいか自分なりの願いをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上村にもっとたくさんの人が来てほしい。 ・これからもずっとずっと自然が美しい上村。 ・お世話になっている上村の人に感謝の気持ちを伝えたい。これからもずっと元気でいてほしい。 		A① A② B①
2 (20) 7月	<p>☆上村のためにどんなことができるか 具体的な願いをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上村の自然をもっと残していきたいから、ゴミ拾いをしたいね。 ・上村小で作った椎茸や下栗芋を観光スポットで販売して、その時に「上村は良い所だよ」って宣伝もできそうだね。 ・観光客や地域の人に上村小の歌を聞かせてあげたいな。 ・川に魚(アマゴ)を放流して、自然の豊かさを残していきたい。 ・ウェブサイトなどで上村の宣伝をして、「上村に行きたい！」ってたくさんの人に思ってもらいたいな。 <p>☆活動のための計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野菜を販売するときに必要なものって何だろう？ ・椎茸や下栗芋を販売するとき「上村で採れた」「おいしい」ってキーワードは入れたいね。 ・販売するとき「上村は良い所だよ」「また来てね」って言いたいな。 <p>☆計画したことを夏休みの自然塾キャンプで やってみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴミ拾い…上村の自然をこれからも守っていききたいな。 ・野菜の販売…みんなで作った野菜はおいしく食べてもらえたかな？ ・歌の発表…私たちの歌を聞いてくれた人が笑顔になってくれたね。 <p>☆活動を振り返り、新たな願いをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・椎茸も下栗いももたくさん買ってもらって良かった。 ・県外のお客さんと話せて良かった。 ・あんまりしつこく宣伝するのは良くないと思ったよ。 ・マイクよりも自分の声で宣伝するのが良かったな。 <p>☆上村をもっと元気にするために自分たちにできることを考え、やってみる。</p>	<p>子どもが話す言葉に耳を傾け、話し合いを見守る寄り添い ⇒子どもの思いや願いをたくさん語らせたという願いから、教師は極力出ず、見守っていた。</p> <p>子どもの活動を見守る寄り添い ⇒子どもたちが思考を巡らせ、活発に活動を行っていた。また、いろいろな気づきや課題を見つけてほしいという願いから極力口を出さず見守っていた。</p> <p>子どもの思いや願いを友達同士でつなげる寄り添い ⇒ここでの話し合いが後の活動に大きく関わってくると思い、一つの話題に対して「〇〇さんはどう思う？」など、子ども同士の考えをつなげるようにかかわった。</p>	B① C① B② B③ C② A③ B①
8月			

9月	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽会で、地域の人やキャンプを手伝ってくれた人、バスの運転手さんに感謝の気持ちを込めて歌を発表しよう。 ・音楽会に向けて練習の時から気持ちを込めて、頑張らないとだね。 ・ごみ拾いは週に一回ぐらいやろうよ。 ・あれ？ごみ拾いをしてみたけど思ったよりゴミが少なかったね。 ・地域の人が日頃からごみ拾い活動をしているんだね。 ・上村の良さをもっとたくさんの人に知ってほしいね。 	
3 (22) 10月	<p>★上村の良さをもっとたくさんの人に知ってほしいという願いをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上村をPRして上村にもっと人が来てほしい。 ・飯田の人には全員に知ってほしいな。 ・上村小学校にも友達が増えてほしいな。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>・今後の主な活動内容 ・予想される子どもの反応</p> </div> <p>★発信する内容を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上村の観光スポットや自然の豊かさについてPRしたいな。 ・地域の人が協力的ってことや優しさも宣伝したいね。 ・ゴミ拾いをした時に感じた上村はゴミが少なくきれいってことも宣伝できそうだね。 ・霜月祭りについて発信したい。 ・上村小の活動についても紹介したいな。 ・KGC自然塾キャンプの時にインタビューした、観光客の方々の声も伝えたいな。 <p>★宣伝する素材を収集する。まとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上村に移住してきた人に、上村の好きなところについて聞いてみたよ。 ・後継者がどんどん少なくなっている霜月祭りだけど、どうして800年も続けているのかな。その理由や思いについてインタビューしてみたよ。 ・私はKGC自然塾キャンプについてまとめるよ。 <p>★宣伝する方法を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウェブサイトで発信したいね。 ・ケーブルテレビで宣伝できないかな。 ・自分たちの声で直接宣伝したいな。駅や市役所で歌を歌ったり広告を配ったりしようよ。 ・飯田市の小学校と交流して宣伝したいな。上村小学校に来たいって思ってくれるかもしれないよ。 <p>★宣伝の計画・準備をする。 (ウェブサイトの作成 or 宣伝のシナリオを考える or 広告作り or 交流会の準備等)</p> <p>★宣伝活動を行う。 (ウェブサイトの更新 or ケーブルテレビでの宣伝 or 駅、市役所等での宣伝活動 or 飯田市の小学校との交流会等)</p>	<p>A① C②</p> <p>B③ C①</p> <p>B③ C①</p> <p>B② B③</p>
4 (10) 1月	<p>★これまでの活動を振り返り、次年度さらに自分たちがができることを考え、課題を再設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来年度は、町に野菜を売りに行くとか、別の方法でも宣伝していきたいな。 ・ウェブサイトを更新していきたいな。 ・もっと上村に住んでいるいろんな人にインタビューしてみたいな。 ・上村の自然を守る活動についてもやっていきたいな。 <p>★これまでの学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上村の良さをたくさんの人に伝えられてよかった。 ・人口がどんどん減ってきているけど上村のために、どんなことができるか自分たちで考えて 	<p>A③ B①</p> <p>A③ B④</p>

	<p>行動できて良かった。 ・これからも上村を大切にしていきたい。 ・上村のためにできることをこれからも考え続けていきたい。</p>	
--	--	--

(5) 授業の様子 9月 KGC 自然塾キャンプの活動を振り返り、新たな願いをもつ

令和3年度は、7月31日、8月1日に行った。その後の、総合的な学習の時間の振り返りについて、授業者の自己課題解決の視点にそって紹介する。

○授業者は、次のように自己課題の解決に向けての視点をもって授業に臨んだ

これまで、授業を参観していただいていた同僚の先生や、研究チームの先生方のアドバイスから、総合的な学習の時間における教師の寄り添い方が少しずつ明確化してきた。

①子どもの活動を見守る寄り添い

②子ども同士の考えをつなげ、考えをより広げたり深めたりするための寄り添い

もちろん、この他にも子どもが何を見て何を感じているのか知るため、一緒にやってみる寄り添いや、その時々で活動でヒントとなる言葉掛けをしたり子どもの活動や発言に対して賞賛や励ましの声を掛けたり、事前に子どもの反応や動きを予想して場や道具、環境を整えておいたりする間接的なかわりなどもあると考える。また、子どもの思考は常に変化し、状況も変わっていく。その時々の子どもの思いや願いに触れ、教師自身の寄り添い方も変化させていく必要があるのは確かである。

しかし、これまでの話し合い場面や活動場面での子どもの様子や、参観していただいた先生方からのアドバイスから、この二つの寄り添い方に焦点を当てて、子どもとかわっていききたい。そしてそれらが、子どもたちが主体的に課題を探究するための手立てとなっているのか、これらの寄り添い方を糸口に考察していきたい。

キャンプの販売活動でのかかわり～子どもの活動を見守るという寄り添い方～

キャンプの二日目には、南アルプスの絶景が見渡せる上村の観光地の一つでもある下栗で、歌の披露やごみ拾い活動、地域の人と一緒に栽培した下栗いもと椎茸の販売活動を行った。このキャンプには地域の方や保護者も参加していたが、販売活動は準備から片付けまで、極力大人の力は借りず自分たちで考えながらやってみようという計画段階から話していた。私自身も、困ったことや危ないことがない限り、子どもの活発な活動を見守るという形で寄り添っていた。

販売の準備場面では、「野菜はきれいに並べたほうがいいよ」「このポスターは机じゃなくてテントにも貼った方がお客さんからよく見えるんじゃないかな」など、子どもたちなりに思考を凝らしながら作業する姿が見られた。また、販売活動は全校児童18名で行った。高学年が低学年に「ここに立って『いらっしやいませ』って、大きな声で言ってね」など、子ども同士でどうやったらお客さんに興味をもってもらえるのか、考えながら声を掛け合っていた。その中で、お客さんと積極的にかかわろうとする姿も見られた。「いらっしやいませ」という言葉の他にも、「また上村にきてください」「アンケートにもご協力お願いします」さらには「どこから来たんですか?」「上村に来てみてどうですか?」などと、観光客の方と会話をする子どももいた。A児は、埼玉からの観光客の方が「ここはとても涼しい所だね」と言っていたことに驚いていた。なぜなら「いつも上村の夏はすごく暑いと思っていたけど、県外の人からしてみ



れば涼しいということが分かってびっくりした」と言うように、観光客の方と緊張しながらもかかわることでA児の新たな発見にも繋がっていた。観光客の方と触れ合う中で、「自然が美しい場所だね」「空気が澄んでいて気持ちが良いね」などと言われたことで上村の良さを再認識していた子どもも多くいた。



また、販売活動が終わり振り返りの場面では、「お客さんにあんまりしつこく『いらっしやいませ』とか『買って下さい』って言うのはお客さんが絶対買わなさいいけないみたいに困ってしまうから気をつけたほうがいい」といった意見もあった。これは、子どもたちなりにどうや



ったら野菜を買ってもらえるのか、どうやったら上村をPRできるのか、様々な思考を凝らしながら販売活動にチャレンジしたからこそ出てきた課題でもあると思う。

お客さんにしつこく言うのはよくない。

最初から最後まで教師や周りの大人によって準備された場所で活動をするよりも、自分たちで考えながら準備をして販売活動にもチャレンジ、そこから課題が生まれることが子どもたちの主体性にも繋がると感じた。

販売活動の振り返りでのかかわり～子ども同士の考えをつなげる寄り添い方～

販売活動の振り返り場面では、県外の観光客の方から届いたアンケートを子どもたちに紹介すると「喜んでもらえてうれしい！」「来年もまた絶対やりたい！」「やって良かった！」と、うれしそうにしていた。さらに子どもたちに「じゃあ来年も野菜を育てたい？」と聞くと、「はい！」と力強く答えたのが印象的だった。実際に、子どもたちが育てた野菜を購入して食べてくださった方々の声を聞くことは、子どもたちにとって今後の活動のエネルギーにもなると感じた。

1. どちらからお越しになりましたか。○印をお願いします。

県内

県外

2. 下栗にお越しいただいた感想をお願いします。

山の上から見下ろす景色はすばらしかったです。でも、それ以上に子ども達の元気な声。何だかこちらまで楽しくなっていました。子ども達がみんなに生き生きしている。下栗は本当に素敵な所だと思います。

3. 下栗芋を食べた感想をお願いします。

下栗で、田舎を思い出したので、子ども達からもらったしじもに載っていた煮ころかきとみそあえを作ってみました。じゃがいもとまた少し違う食感で、とてもおいしかったです。

4. 椎茸を食べた感想をお願いします。

椎茸の戻し汁を使って、かきもどきとコンジンを一緒に煮てみました。おどろきも、しっかりあり、おいしかったです。大きい椎茸と小さい椎茸、大きさはそろっていい所が、子ども達も一生懸命作って

5. その他 必に入水してくれただけ思う。何だかうれしくなりました。
※差し支えない方は連絡先（お名前・住所・メールアドレス等）をお願いします。
来年もまた、元気が子ども達に会いに行きたいと思えます。頑張ってください。お返事も折り返しお返させていただきます。



また、「下栗いもや椎茸をたくさん買ってもらってうれしい」や「大きな声で宣伝できて良かった」と自分たちの販売活動に手応えを感じていたようだった。その中でも、前述したように「あんまり



り大きな声で宣伝したり何度もお客さんに言ったりするのは良くない」という意見もあった。さらに、それに対して、「マイクで宣伝するのもいいけど、やっぱり自分の声で宣伝した方がいいと思う」といった意見もあった。夏休み明け直後のこの授業では、一人一人が丁寧に書き留めていた振り返りを全体で共有したいという思いがあったため、これらのことに対して深く扱うことはなかった。しかし、自分たちの活動を

振り返る中で出てきた課題について全体でじっくり話し合いたいという思いがあったことと、なぜ「自分の声で宣伝したい」と思ったのか、またそれに対して他の子どもたちはどう考えているのかを話し合うことで、今後の活動にもつながるポイントとなるのではないかと考えた。このことから、次時ではこの2つのことについて、深く話し合う時間とした。

自分の声で宣伝したい。

まず、「前の時間の振り返りで一番心に残っているのはお客さんに対してしつこく言わないという意見です」と書いたY児の振り返りを紹介させた。全体的に、販売活動に対して肯定的な意見が多かったため、実際の所、子どもたちがどう考えているのか知れたかった。そこで、全体に「Y児の振り返りを聞いてどう思った？」と問いかけた。すると、「お客さんが責められているように思っちゃって逆に買わなくなっちゃうかもしれないね」という意見があった。さらにこれに対して「どう思う？」と全体に投げかけると「優しく言わなきゃ」という意見があり、これに対しても「優しくってどんな感じ？」と、どんどん深く考えさせるよう問いかけを行っていった。こうして一つの課題に対して教師が意図的に子ども同士をつなげる発問をすることで、今まで発言することが少なかった子が意見を言ったり、意見を言っていないくてもうなずきながら話し合いに参加したりする姿が見られた。

また、K児の「自分の声で宣伝したい」という意見に対しても、「マイクを使ったほうが遠くの人にも聞こえると思うけどどうして自分の声で伝えたいんだろう？」とK児の考えを全体で考えるよう投げかけてみた。すると「自分の声はぬくもりのある声だからいいと思う」といった意見があった。それに対して「ぬくもりのある声ってどんな声？」と全体に問いかけてみた。また、改めて「どうして自分の声がいいんだろう？」と聞いてみると「自分の声の方がちゃんと聞いてくれそう」や「自分たちのことをどんな人かマイクを使うよりもわかってくれそう」、「自分たちの声の方が元気っぽくて自然の中の子どもっていうことも宣伝できる」などとどんどん考えを広げていった。これらの「自分の声で宣伝したい」というキーワードに対して、子どもたちの多様な意見を出させるよう、教師が意図的に子ども同士をつなげる問いかけをすることで、話し合いが広がり深まった。さらに、当初は「上村をウェブサイトやユーチューブで発信したい！」と語っていた子が、「飯田の町に直接行って宣伝もしてみたい」と、考えが変わるきっかけにもなっていた。

4 成果

今回の実践で下記の①②について授業者が手応えを得ることができた。

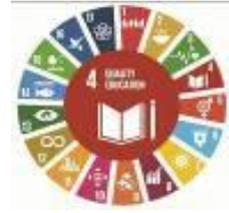
①子どもの活動を見守る寄り添い

②子ども同士の考えをつなげ、考えをより広げたり深めたりするための寄り添い

このことが、4年前から引き続いている、学校と地域が協働するESD for SDGs～山あいの“小さな学校”の世界につながる“大きな挑戦”～を子どもの主体的な活動として継続して発展させていける見通しが持てた。

5 課題

長野県の多くの教職員は3年から4年で異動している。職員のメンバーが変わっても、学校と地域が協働するESD for SDGs～山あいの“小さな学校”の世界につながる“大きな挑戦”～を子どもが主体的に継続していけるように、職員間での成果の共有や地域との連携を大切にしていきたい。



知床らうすの環境教育 ～自然遺産の環境下で持続可能な教育への挑戦～

北海道羅臼町立羅臼小学校

校長 西田 威嗣

教頭 佐藤 英雄

I 研究主題設定の理由

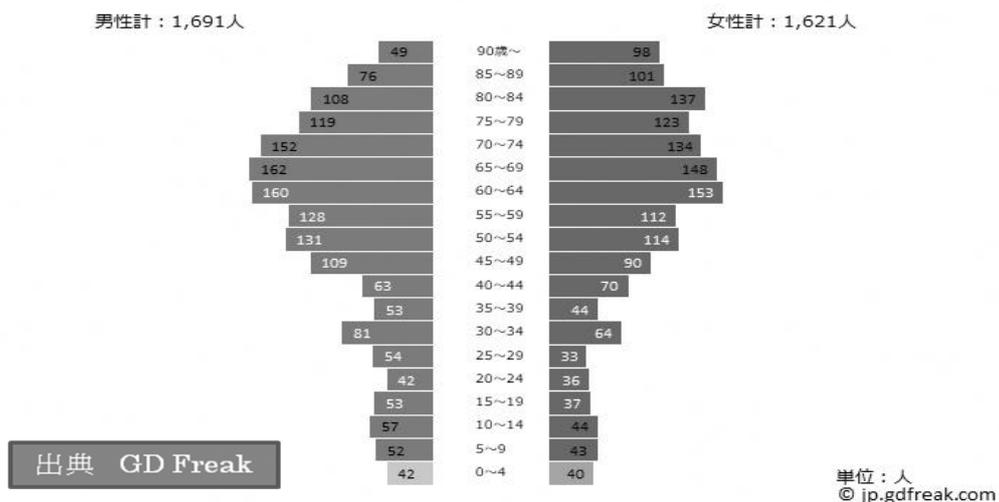
ー知床らうすの現状ー

本校のある羅臼町は、世界自然遺産「知床」の中心に位置し、東西を山と海に囲まれた自然豊かな地域にあり、この豊かな自然を生かした漁業と観光業が主産業である。町の公道には、野生のエゾシカやキタキツネを見かけるのは当たり前の光景で、その他にもヒグマやオジロワシ、シマフクロウなどにも度々遭遇できる町である。また、目前に広がる根室海峡には、ホッケやイカ、サケなどが季節毎に回遊し、近年ではマッコウクジラ・イルカ・シャチなどが回遊するため、観光船に乗船するウォッチング目的で観光客が賑わっている。日本最北東端の国定自然公園の中心部に位置する本校は、目前に北方領土の国後島が望める絶景の場所に位置し、児童数 127 名の小規模な学校である。

人口約 4800 人の羅臼町は、20 年前から比べると約 2000 人の人口減が起こり、日本全国の過疎化に苦しむ市町村と同じく、超高齢化と過疎化の一途をたどっている。人口減の主な原因としては、基幹産業である漁業の不振である。近年の漁業資源の乱獲や地球温暖化による漁路の変化などにより、年々羅臼漁港の漁獲量は減少し、地元住民が一番の働き先であった漁業関係の就職先が減少し、若い世代の人口流出が起きている。（このままの人口推移だと 2035 年には、40 代以下の働き手が羅臼町内で危機的な不足状態に陥ることは、明白な事実である。）【資料 1 参照】

〔資料 1〕

2035年 羅臼町の人口構成(予測)



ー羅臼町の子ども達の現状ー

3年前の児童アンケートで、「羅臼が好きですか？」の項目に「そう思わない」とする回答が過半数を超えていた。又、「将来、羅臼で住みたいですか？」の項目も「そう思わない」とする回答が過半数を超えていた。他地域から知床羅臼を訪れると自然豊かなこの町の魅力にたくさん気付かされるが、生まれた時から目の前にある大自然が当たり前の児童達にとって、知床の自然は心が惹かれないもの

なのである。前述した通り、基幹産業である漁業の不振が、羅臼町の将来に不安を感じる児童の原因となっていることは明白である。この状況を改善するために、羅臼の良さが実感できる本物に触れる体験、羅臼の良さを感じ取る学習を行う必要性を切に感じるようになった。基幹産業である漁業を中心に観光業や育てる漁業など羅臼の未来を創造し、少しでも明るい未来への展望を築いていく学びを模索していく必要がある。そこで、児童が人・物・自然とつながり、知をつなげ、相互で協力する能力を高め、一人ひとりが地域に支えられていることを知ることで、将来地域に貢献できる大人へと成長していける学びの場を提供する必要があると考えた。

一環境教育と知床らうすー

そこで、以前から既存の総合的な学習の時間内で行っていた知床学・海洋教育などのカリキュラムを羅臼町幼小中高一貫教育総合部会で見直し、「知床らうすの環境教育～自然遺産の環境下で持続可能な教育への挑戦～」として、各教科との関連を図りながら、地域の教育資源を活用する計画を練り直した。「ふるさと羅臼」を包括的に捉える「知床学」（海洋教育）の学習を通じ、SDGsの17の目標を重点に総合的な学習の時間に環境教育を位置づけ、教育活動を展開していくことにした。

SDGs17の目標の中では、特に「8 経済発展と働きがいのある仕事」、「9 産業・技術革新・社会基盤」、「11 持続可能なまちづくり」、「14 海洋資源」、「15 陸上資源」を学習対象としたESDを展開した。【資料2】（羅臼町内の幼稚園・小学校・中学校・高校の総合的な学習の時間担当者が集まり、幼少期からの15年間を見通したカリキュラム「知床学」）

【資料2】

資料1 「知床学（海洋教育）」 <令和2年度>													羅臼町立羅臼小学校		
学年	幼稚園	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3		
ESD	ユネスコスクールに認定され、ESD (Education for Sustainable Development)を推進しています												【ESDの意味：持続可能な発展のための教育】		
学びの主体性	→ → → 知識伝達や体験から → → →			→ → → 自ら考え行動する学習活動へ → → →											
学びのスタイルイメージ	In Nature【知床】（自然【知床】の中で体験、感じる）			About Nature【知床】（自然について多くを知る）			For Nature【知床】（自然のために行動する態度を身につけた人間になる）								
学 年 別 実 践 課 題	In 知床	・身近な動植物に関心をもち、 ・身近な自然のすばらしさを感じる ・香を探そう、感じよう ・春から夏まで、 ・夏秋を探そう ・秋から冬に向かって ・冬遊び、知床の冬	・地域の上や自然のすばらしさに気づき、愛着をもち、 ・地域の良さや暮らしに気づく ・まともや発信を通して将来の夢や希望をもち	・羅臼の自然、生活、文化などに興味をもつ、 ・地域の良さや暮らしに気づく ・まともや発信を通して将来の夢や希望をもち	・郷土芸能の体験などを通して、 ・地域に誇りと愛着をもち、 ・地域の文化や暮らしをもち、 ・新しい生活や文化を創造していく、 ・地域の良さや暮らしに気づく ・まともや発信を通して将来の夢や希望をもち	・自然やふるさとの真実・関心をもつ	・関心をもち、知識を習得する	・自然について多くを知る	・自然について多くを知る	・自然について多くを知る	・自然について多くを知る	・自然について多くを知る	・自然について多くを知る		
	For 知床	・安全・管理・基本の自己管理意識の育成	・問題点を発見、理解や改善の方法、より良いものづくりのために出来る事を考え実践しようとする態度の育成	・テーマ設定主体的追求課題解決力の育成	・問題点を発見、理解や改善の方法、より良いものづくりのために出来る事を考え実践しようとする態度の育成	・安全・管理・基本の自己管理意識の育成	・取材や資料の収集、分析能力の育成	・情報処理能力の育成（プレゼンテーション等）	・課題を設定する能力の育成	・行動力、危機管理能力の育成	・企画力、創造力、コミュニケーション能力の育成	・自然に関する知識を体験で活用する	・自然や産業のあり方を考察し、提言する	・自然に関する知識を体験で活用する	
総合的な学習の時間	クマ学習・外来種学習を通じた環境教育 【 知識伝達・体験 → 安全管理 → 調査方法・実習 → 共存環境の優越性 】														
	・クマ学習			・外来種についての学習 セイヨウオオマルハナバチ 環境省協力 ・クマ学習			・クマ学習Ⅱクマ 遭遇時の対応法	・生態系学習Ⅰ水 辺の生物（川） ・外来種駆除学習 カヌーカヌー ガエマ	・クマ学習Ⅱクマ と共存する社会	・生態系学習Ⅱ川 の観察（野 外実習）	・クマ学習Ⅲクマ 学習まとめ	・生態系学習Ⅲ知 床学習まとめ （野外実習）			
実 施 内 容	・身近な動植物に関心をもち、 ・身近な自然のすばらしさを感じる	・身近な自然や動物を知る ・地域の自然を知る	・知床に棲息する動物など自然環境を知る ・自然観学習① ⇒生き物 ・地域学習	・羅臼町の漁業について調べ学習・発表 ・自然観学習② ⇒自然環境 ・地域学習	・伝統芸能しんとこいさき舞を体験し、理解を深める ・こんぶ・サク漁業の理解を深める ・地域学習	・知床（羅臼）について深く知る ・未来の知床（羅臼）について考える ※野生動物 森、川、海 について体験	・知床羅臼の観光名所調査 ・海岸清掃 ・漁業物観察 ・外来種駆除 ・自然クルーズ ・植物観察調査	・知床羅臼の自然調査 ・自然クルーズ ・知床羅臼PR活動 ・知床羅臼のしおり ・北方領土上視察 ・施設見学等	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査		
	・奥べれの野探検（はらみ、山、谷） ・野菜栽培（栽培、収穫、販売） ・園芸あそび ・散歩・遠征 ・育てた野菜でカレー作り ・ピクニックセンター見学 ・市場見学 ・園芸資材館・福樹 ・神社、境内	・探検ごっこ ・ネイチャーセンター ・園芸あそび	・羅臼の自然などの調べ学習 ・紹介ポスター・パンフレット ・ピクニックセンター見学（全校連立と兼ねる）	・羅臼町の漁業について調べ学習・発表 ・自然観学習② ⇒自然環境 ・地域学習	・知床（羅臼）と他町村との類似点や相違点をまとめ ・修学旅行	・知床羅臼の観光名所調査 ・海岸清掃 ・漁業物観察 ・外来種駆除 ・自然クルーズ ・植物観察調査	・知床羅臼の自然調査 ・自然クルーズ ・知床羅臼PR活動 ・知床羅臼のしおり ・北方領土上視察 ・施設見学等	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	・知床羅臼の自然調査・研究 ・知床羅臼の自然調査 ・知床羅臼の自然調査	
理 自 然 環 境 科 目 群	・身近な動植物に関心をもち、 ・ふるさとの自然のすばらしさを知る ・知床の自然の動物観察、 ・雪と水で遊ぶ ・動物の名前を調べる ・サクの物語（解体等）	生活科 ・きせきとともだち（はる、なつ、あき、ふゆ） 38H 【14・15】	生活科 ・まちが大好きたんけん隊（園遊・市場・海探検） 14H 【11】 ・めざせ生きものたんけん隊 【14・15】 ・サクの物語 2H 【11・14】	総合 ・羅臼の生き物を伝えよう（海以外の生き物、海の生き物・ワシ） 5 2H 【11-14-15】	総合 ・羅臼の産業を調べて調べよう（サク・ホッケ・イカ） 31H 【11-14】	総合 ・羅臼の産業を探ろう（羅臼産物学習・漁師学習・宿泊研修） 39H 【11-14】	総合 ・自分の将来を考えよう（羅臼に合う仕事を調べる） 49H 【11-14-15】								
	・身近な動植物に関心をもち、 ・ふるさとの自然のすばらしさを知る ・知床の自然の動物観察、 ・雪と水で遊ぶ ・動物の名前を調べる ・サクの物語（解体等）	生活科 ・はるごとともだちなつともだちあきともだちふゆともだち	生活科 ・まちが大好きたんけん隊（園遊・市場・海探検） 14H 【11】 ・めざせ生きものたんけん隊 【14・15】 ・サクの物語 2H 【11・14】	総合 ・羅臼の生き物を伝えよう（海以外の生き物、海の生き物・ワシ） 5 2H 【11-14-15】	総合 ・羅臼の産業を調べて調べよう（サク・ホッケ・イカ） 31H 【11-14】	総合 ・羅臼の産業を探ろう（羅臼産物学習・漁師学習・宿泊研修） 39H 【11-14】	総合 ・自分の将来を考えよう（羅臼に合う仕事を調べる） 49H 【11-14-15】								
そ の 他	ユネスコスクールの活動												ユネスコスクール研究発表の活動		
	・漁付作り ・ホッケバーガーを食べよう ・落葉アトドア遊び	調べ学習してまとめのために、選抜発表会を行う。											※アトドア体験（希望者、土日長期休業を利用） ・道教育大附属校学生との合同アトドア体験、観光ガイド体験 ・司教実主旅行、知床キッズと合同アトドア体験（研修棟、雪中キャン、海岸線サバイバル）		

海洋教育の「J」内の数字はSDGsの目標項目の番号

II 研究の方法

- 1 羅臼町幼小中高一貫教育総合部会及び各校の部長会議・研修等で理論構成を行う。
(適宜、実践を重ね、毎年カリキュラムの見直しを重ねる。)
- 2 児童及び保護者アンケート等の調査をもとに、羅臼町の良さについての意識を測る。
- 3 全国小中学校環境教育研究会で作成した「新しい環境教育」で示す児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、指導計画・授業プランを創造する。

【児童・生徒に身に付けさせたい3つの能力・態度】

地球とそこに生きるすべての生命にとって

- (1) よりよい環境を求め持続させる意欲や態度
- (2) よりよい環境のあり方を考える力
- (3) よりよい環境の創造を目指す社会にすすんで参画し、貢献する実践力

- 4 全国小中学校環境教育研究会、外部機関（知床財団、海洋教育センター等）と連携をし、指導実践を深める。
- 5 全国小中学校環境教育研究会の発表会（令和3年10月オンライン開催）において、研究発表を行う。

III 研究経過

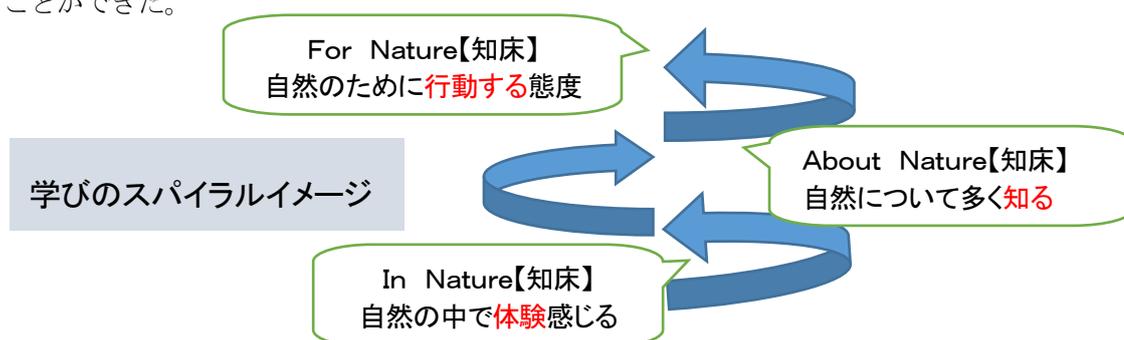
- 1 学校現場でのE S D推進状況及び知床学（海洋教育）の確認
- 2 取り組み可能な課題の再検討
- 3 長期休業中における外部講師を招聘しての研修会・講演会の実施による理論研修
- 4 昨年度取り組んだカリキュラムの検証、及び追加又は削除する教育課程の検討
- 5 児童の生活の中での「環境教育」への意識について調査、資料収集、学習会
- 6 「知床学（海洋教育）及び環境教育」の指導計画例の作成
- 7 各学校・各園における授業実践
- 8 ポートフォリオ、イメージマップ、授業研究による授業検証

IV 各学年の実践内容

(1) 知床の人・物・自然からの6年間を見通した学び

環境教育の視点に立ち、羅臼町では幼稚園から高校までの15年間を見通した「知床学」（海洋教育）を各発達段階に考慮して実践してきた。「学びのスパイラルイメージ」として「知識伝達や体験」（In Nature【知床】・About Nature【知床】）から「自ら考え行動する」（For Nature【知床】）を目指して学習活動の展開をしている。

具体的には、専門的な知見をもつ羅臼漁業協同組合職員、知床財団職員や漁業を生業とする保護者を講師として招き、児童が直接体験を通じて本物を学ぶことができるようにした。地域住民が児童の学びを支え伝えようとする姿は、子どもたちの真剣な学びにつながり、地域のすばらしさを実感することができた。



【第1・2学年の実践】

具体的な学習として、第1・2学年では、幼稚園からの学びをつなぎ地域の自然や仕事について活動を通して学ぶ。

特に第2学年では漁協・地域住民から鮭の生態や稚魚を放流する意味について説明を受け、3年後の回帰を願い稚魚放流を行った。この学習を通じ、児童は鮭の生態について学ぶだけでなく、羅臼の自然の豊かさや地域の方の行動からより「ふるさと羅臼」に対する思いを強くもち、3年後の回帰する鮭の有効活用～鮭フレーク作り～につなげ、海の豊かさと大切さ、すなわち羅臼の環境について興味をもつようになった。漁業資源の回復を願い、町の人が努力していることにも気付くことができた。

羅臼川での稚魚放流



【第3・4学年の実践】

第3・4学年では、低学年での学びをもとにして、地域の自然や産業について自ら課題を設定し、地域の方へのインタビューや本・インターネットを活用した調べ学習・羅臼川探検を行い、課題を解決した。

第3学年が行う生き物調べの学習では、知床財団職員の方の講話やインタビューから羅臼の生き物図鑑を作成した。3年生から始める「クマ学習」では、知床財団から知床半島に生息するクマとの共生の意義やクマの習性、クマと遭遇した時の危機回避の仕方など羅臼町の特性を生かした学習展開を行っている。

この学びでは、自ら課題を設定し解決する力を伸ばすだけでなく、様々な人との対話を通じてコミュニケーション能力の基礎を育むことができた。

第4学年では、近くを流れる羅臼川探検を行い、きれいな海や豊かな海産物資源には、山や川の栄養分が大きく関わっていることを学習した。川探検を通じて、羅臼町には自然豊かな川がたくさん流れており、本当に羅臼の川がきれいなのかを疑問に思った児童は「水質検査」を実行し、大阪や東京の川と比較して、自分達の住んでいる川がいかにかきれいで、栄養分を含んでいる川なのか実感することができた。

また、令和3年度には、ホッケの豊漁を受けコミュニティスクールコーディネーターの協力のもと「ホッケの3枚おろし」と「かまぼこ作り」の体験活動を羅臼漁協組合と共催して行い、柔軟に地域体験授業としてカリキュラムに追加していった。保護者参観日と重ねて行ったこの学習活動は、児童・保護者に好評な活動となった。

漁協の協力のもと行われた鮭フレーク作り



3年生の川探検

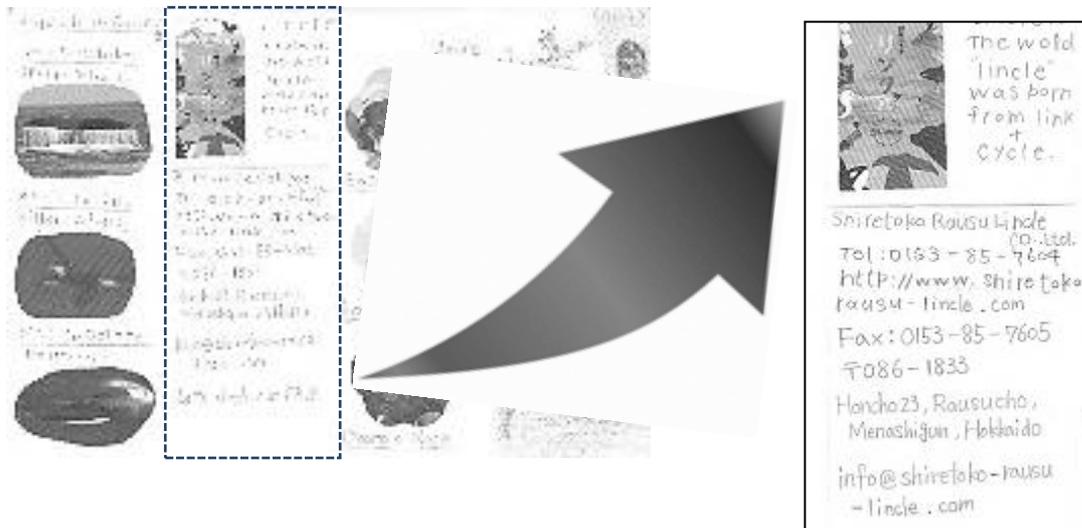


4年生の水質検査

第5学年では、羅臼昆布を題材として地域の産業について総合的に学ぶ学習を行った。この学習を通じ、地域住民の郷土の産業を大切にしている考えに触れて、「羅臼の海がすごいということを感じてくれた。」「地域の人たちが守ってきた海を自分たちもしっかりと守りたい。」などの感想をもつことができた。【第5学年のコンブ学習は別途指導案で詳細に説明する。】

第6学年は、これまでの学習で学んできた羅臼のよさを行動とともに発信する活動を行った。「羅臼に残したいもの」をテーマに学習を進め、ふるさとを多角的に捉えようとする態度を育むことができた。リーフレットやポスターを作成し発信するグループ、ボランティアを募り地域の温泉の清掃活動を行うグループ、地域芸能をインターネットで発信するグループ等をつくり、それぞれが魅力を伝える活動を行った。リーフレットを作成したグループは、町内の各所に作成したリーフレットを配布して、観光客の中には外国の方が多いことに気づき、英語版や中国語版のリーフレットの作成を行った。

【英語版リーフレット】



温泉の清掃ボランティアを行ったグループは、作業後「作業はとても大変だったけど、この温泉をずっと羅臼に残したい。」と話していた。

6年間の活動で、一つの気づきを次の学びにつなげ発展させることができるようになった。また具体的な活動を企画し行動することを通じ、協働する喜びややりがいを実感する学びとすることができた。

最近では、地域で遊んでいる途中や、飼い犬の散歩途中で、ゴミ拾いを当たり前に行う子どもたちの姿が日常的に見られるようになった。

このような地域の人・物・自然から直接体験を通じて本物を学ぶことを、6年間を通じて系統的に構成することで、児童がこれからの社会を生き抜くために必要な力を高め、知床らうすにおける環境問題に対し興味関心を持ち、自分達にできることは何かを考え、実践することができた。



(2) 地域の良さ・協力体制を実感

他にも、全学年の児童を対象に、直接体験を通して学ぶ「羅臼探検隊」を組織した。羅臼川を主な活動場所として、川遊びや魚取り、ゴミ拾いなどを行った。また、川に鮭が遡上する季節には、鮭の定置網の水揚げの様子を見学するなどの活動を行った。

この組織は、地域住民や地元管内の大学生などが子どもたちの活動を支え、一緒に直接体験を行う。児童は、直接体験から様々な学びを行うだけでなく、一緒に参加し活動する中で、よりくわしく地域のすばらしさを知ることができた。

さらに児童は、活動に参加する大人の姿から将来自分が地域住民の一員として、地域のために活動する姿を考える機会になっていた。

漁協職員から漁の説明を受けた市場見学



羅臼川でのゴミ拾い活動



親子での川探検



V 第5学年 総合的な学習の時間(知床学)「羅臼コンブ図鑑を作ろう」指導計画例

1 指導計画テーマ「羅臼の海は今後もきれいなのか」

2 指導計画の目標

- ・ 基幹産業の漁業の名産品である羅臼コンブ学習を通じて、私たちの生活と環境との関係に気付き、人や環境に配慮したより良い生活を創造する資質・能力・態度を身に付け、自分達の生活を見直す。

3 指導計画の視点

- (1) 私たちの住んでいる町の良さと課題について気付くこと
- (2) 私たちの生活と環境との関係に気付き、自分達の生活を見直すこと
- (3) 地域の人・もの・自然とのつながりに興味をもち、環境への配慮は、これからの地球にとって最重要課題の問題として認識すること
- (4) 私たちの住んでいる町の課題(地球の課題)を解決するために、自分達ができることを考え、実践すること

4 他教科との関連

第5学年	
【教科】単元	本指導計画との内容の繋がり
【国語】新聞を読もう 【国語】情報ノートをつくろう 【国語】話し言葉と書き言葉 【国語】町じまんとすいせん 【国語】白神山地からの提言 【国語】提案文を書こう 【国語】ひみつを調べて発表しよう 【社会】国土の気候と地形の特色 【社会】水産業のさかんな地域 【社会】森林とともに生きる 【社会】環境とともに守る 【道徳】いるかの海を守ろう 【道徳】わたしのボランティア体験	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に関わる情報を収集し、時事ネタと町の環境の繋がりを知る。 ・目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係づけたりして、伝えたいことを明確にする。 ・表現方法の違いに気付き、まとめや発表に活用する。 ・自分達の住んでいる町の良さに気付き、良さを勧める方法を学ぶ。 ・羅臼町以外の世界自然遺産での取組に触れる。 ・提案文の書き方を学び、自分の提案したいことに生かす。 ・疑問に思ったことの調査方法を学び、学習活動に繋げる。 ・日本の国土の気候や地形の特色を知り、自分達の住んでいる地域の特色を捉える。 ・羅臼町以外での水産業のさかんな地域を知り、成功例や工夫を知る。 ・水産業と森林との関わりに気付き、視野を広げる。 ・地球環境とどのように関わっていけばよいのかを考える。 ・環境について、事例をもとに考え、自分の行動を振り返る。 ・自らの意志で行動することについて再考する。

5 評価の方法

- (1) 事前のアンケート
- (2) 羅臼昆布の生産の継続に関する是非についての意見とその変容
- (3) 授業毎の振り返り(ポートフォリオ)
- (4) 行動発信への意欲と継続的な活動の態度

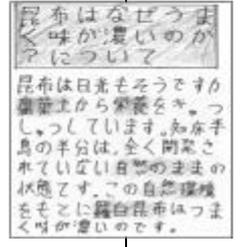
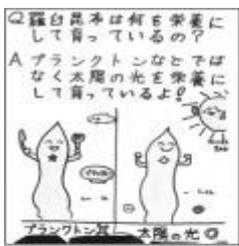
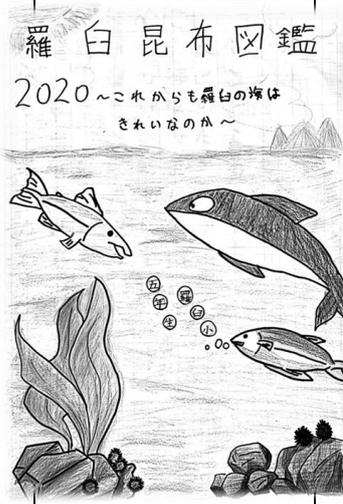
6 指導計画例 「羅臼コンブ図鑑作り～羅臼の海は今後もきれいなのか～」

(全5次・40時間程度)

次	小単元テーマ	指導内容	支援・留意点
1 3 時間	ピクトグラムから考えるSDGsを知り、世界的な課題をつかむ。(つかむ・調べる)	<ul style="list-style-type: none"> ○身の回りのピクトグラムを紹介する。 ○絵文字にどんな意味やメッセージが込められているか想像する。 ○今、地球で起こっていることについて知る。 ○SDGsを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクトくんを紹介。 ・メッセージの書いていない絵文字を紹介し、メッセージを考える。 ・猛暑・台風・森林伐採・ホッキョクグマ・枯れた土地・WFPの給食支援・食品ロス・海ゴミなどの写真資料。

		○気になる目標を1つ選んで調べる。	・『SDG s スタートブック(東京書籍)』。
2 3 時間	羅臼の課題(特に漁業・コンブ漁)について調べ、今後の課題につかむ。(つかむ・調べる)	○2030年の羅臼町人口統計予想のグラフから町の将来について考える。 ○羅臼町の漁獲高の推移グラフから、町が抱える課題について知る。 ○基幹産業である漁業(特にこんぶ漁)について調べるためのテーマを話し合う。 ・ウェビング, PMIなどの思考ツールを使って話し合う。 [児童が考えたテーマ] ・環境「水質や海の実態に迫る」 ・生態「こんぶの生態に迫る」 ・宣伝「こんぶの流通や魅力に迫る」 ・昆布業「仕事や歴史に迫る」	・人口統計グラフを読み取る。人口減の理由について、考え話し合う。 ・漁獲高の推移グラフから基幹産業である漁業の現状を知り、課題を共有する。 ・SDG sの項目や世界的な課題、羅臼町の課題をからめたテーマになるように支援する。 ・自分達で考えたテーマについて追求活動を行う。
3 15 時間	考えたテーマ毎に調べ、昆布図鑑作りの資料を収集する。(つかむ・調べる)	○図書館, インターネット, 羅臼町郷土資料館, 漁業に従事する人々へのインタビューや体験活動を通して、自分達が決めたテーマに沿った資料を収集する。 ○こんぶ漁師を教室に招いての体験授業 ・こんぶの間切り体験の実施 ・おいしい昆布に必要なもの →適度な日光と天日干しへの手間の違い, 冷たい水温, 腐葉土の豊富な栄養などに気付く。 ○羅臼こんぶづくりへの熱い思いを知る。 ○こんぶ倉庫見学体験 ・こんぶに関する情報の収集 ・こんぶ倉庫内見学 ・天然こんぶと養殖こんぶを漁業協同組合から無償提供してもらい、比較観察する。	・羅臼漁業組合に協力要請  ・こんぶ倉庫見学で説明を受ける。 

		<p>○養殖こんぶと天然こんぶの違いを調べ、これからの漁業の未来を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天然こんぶと養殖こんぶの見比べ、味比べ、だし汁比べ実験 ・とる漁業と育てる漁業について知り、これからの漁業について環境的な視点も入れながら漁業の未来を話し合う。 <p>○こんぶフェスティバル参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンブ作りの作業工程体験に参加する。 <p>○役場資料室や町図書館、インターネット等での資料収集</p> <p>○大学との遠隔授業を行い、コンブを使った商品開発のアイデアを考える。</p>	 <p>道東 羅臼町しれとこ羅臼こんぶフェスタ</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・羅臼町有志の地域企画に学級で参加する。 ・図書館司書、郷土資料館などにも協力してもらい資料収集を行う。 ・キッコーマン（株）との商品開発遠隔授業（協力） 静岡大学
4 10 時 間	<p>コンブ図鑑作り (つかむ・調べる・まとめる)</p>	<p>○収集した資料を取捨選択して、テーマ毎にコンブ図鑑作りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ毎に調べたことをまとめ、わかったことや更に調べたいことを書き足す。 ・テーマ別に途中経過を確認し合い、適宜修正を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに合う資料か？効果的なまとめ方になっているか？適宜アドバイスを行う。



<p>5 9 時 間</p>	<p>地域・地球に送るアクション (発信する・調べる・まとめる・行動する)</p>	<p>○地域向け, 保護者向け, 在校生向けに発表会を行う。 ・発表や提言の感想をもらい, 自分達の活動を振り返る。 (プレ発表会→発表会本番) ※日曜参観日で拡大掲示板の活用</p>  <p>○これから自分達ができることはないか? →外部発信をできるだけ広範囲に広げる。 ・道の駅, 役場, ビジターセンターなどの公共施設に図鑑を配布して羅臼コンブの魅力について多くの人に知ってもらおう。(コンブミニ図鑑の増刷)</p> <p>「羅臼のコンブ漁が続いていくには?」をテーマに話し合う。 →自分達で行える実践はないか考え, 行動する。 ・水質検査を再度行い, 羅臼川は本当にきれいなのか確かめる。 ・海をきれいにするための廃油を使った石鹼作り ・羅臼川の清掃やゴミ拾い活動</p> <p>※〔令和3年度〕6年生が学級でインスタグラムを使った情報発信を開始</p>	<p>・図鑑を読んだ・発表を聞いた人の感想を学級で共有する。 ・外部協働者, 保護者, 在校生にも参加してもらい意見を伺う。 ・役場や専門機関, 町内会等で提言に協力できないかを探る。</p> <p>・海洋教育パイオニアスクール発表会での発表 ・全国海洋サミットでの発表 ・ユネスコスクールでの発表 ・福岡県大牟田小学校へ発信</p> <p>羅臼町女性部の皆さんの協力 →6年生の瀬石温泉清掃にも影響を与えた。</p> <p>・世界に向けた情報発信のツールとして活用 (コンブ図鑑や羅臼の魅力についてアウトプットを続けている。)</p>
----------------------------	---	---	--

7 指導細案（第5次5～9時間目）

次	時	単元過程	指導内容	支援・留意点
5 次	5	つかむ 調べる 共有する	<p>○テーマを再確認する</p> <p>羅臼の海はきれいなのか？</p> <p>○SDGsについて再度学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜSDGsがあるのか <p>→世界で課題となっている問題を捉え、振り返る。</p> <p>→日本や羅臼での達成度を確かめる。</p> <p>・SDGs 14番「海の豊かさを守ろう」がある意味について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> →世界的に海の豊かさを守ることは問題になっていることを知る →海の生物がプラスチックなどのごみで被害を受けている現状を知る →スターバックスが紙のストローに変えた、レジ袋が有料になったことを例に自分の生活と照らし合わせる <p>○本時の学習を振り返る。</p> <p>【児童の振り返りから】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海の豊かさを守っていくには、自分達ができることは何だろうか？ ・有名な企業が環境に対して、できることを始めているのはとても大切だと思う。 	<p>○学習してきた振り返り資料の提示</p> <p>○SDGs 14番資料提示</p> <p>○紙ストローとプラスチックストローやレジ袋を提示</p> <p>△世界と日本の漁獲量、養殖業、これからの漁業の在り方について社会で学んだことも想起させる。</p>
	6 7	つかむ 調べる 共有する	<p>○海の豊かさを保つために必要なことに迫る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そもそも羅臼の海はきれいなのだろうか <p>→北海道大学釧路校 境教授に相談「海の水質を調べるよりも川の水質を調べたほうがいい」</p> <p>→羅臼川の水質検査を調べるところからやってみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・羅臼川水質検査 <p>→キットを使って水質を調査（リン酸・アンモニア・CODを測定する。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・羅臼川の上流、中流、下流、排水が流れ出る付近の4か所の水で調査 <p>→結果から排水から汚れが出ていることに気づ</p>	<p>簡易水質検査キットを使用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルに4地点で川の水を採取→教室で検査 ・大阪（道頓堀川）、東京（目黒川）との比較実験後、協力校との交流学习を実施

	<p>8 調べる 共有する 行動する 振り返る</p>	<p>く。(結果は比較的きれいであった)</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活排水が汚れの原因（可能性）と考える →洗剤などの生活排水が河川を汚すと原因とインターネットで調べる。 →その対策として廃油石鹼の存在を知る 廃油石鹼をみんなに使ってもらって、海をきれいにする活動をしよう。 <p>○廃油石鹼を作ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 廃油石鹼を作ってみる →昆布図鑑の環境グループ5名が廃油石鹼の作り方を調べ、 →家庭での廃油を持ってきて石鹼づくりを開始。 →制作過程を記録し、図鑑に掲載するデータを取り、こんぶ図鑑に追加することにした。 石鹼の使用 →完成した石鹼はパッケージして製品のようにした →参観日に親に石鹼と使用の感想アンケートを配布 石鹼を作り終えて →環境のためになるなら今後も続けていきたい。 →商品化して広めることはできないか？ <p>【児童の感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> 作るのは難しかったけど、これをたくさん作れば環境が良くなるから、もっと作った方がいいと思った。 作るのが難しく、時間がかかったけど、廃油石鹼を使えば羅臼の環境が少しでも良くなると思い頑張って作りました。 自分達で石鹼を作るのは初めてだったので、すごく面白かったです。作り方は特に難しいわけではないので、みんなにも作ってみてほしいです。 廃油石鹼作りは初めてだったので、材料や分量などを自分たちで調べて、校長先生にもご協力してもらってやりました。実際に作ってみて少しでも川がきれいになったら嬉しいです。廃油石鹼が広まると良いです。 	 <ul style="list-style-type: none"> 町内で廃油石鹼作りを行い、商品として販売している羅臼町女性部の皆さんに協力要請  <ul style="list-style-type: none"> 町内の廃油石鹼作りのお手伝いを試み希望するがコロナの影響で断念した。
--	---	---	---

	9 まとめる 広げる 行動する	<p>○自分たちにできることは他に何かないか考える。(昆布図鑑と関連させる。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海のごみ拾いを企画できないか？ →6年生が瀬石温泉の清掃活動 ・昆布漁師の井田さんから「昆布の成長には山の環境が大事」と教えてもらったことを振り返る。 →ゴミ拾いが必要なのは海に流れるまでの山や川でやったほうがいいのではない →羅臼川ごみ拾い活動をボランティアで実施 ・啓蒙のポスターを作るのはどうか？ 廃油石鹸を全校児童に配布して、羅臼の海を守るための啓蒙活動を行う。 	<p>△昆布学習とのつながりを意識させ、振り返る。</p> <p>△山の水が海に流れていることを理科で学習</p>
--	-----------------------	---	---

8 考察

一つながる「羅臼昆布図鑑」の学びと環境教育ー

これまでの各教科や総合的な学習の時間の学びで身に付けた力をもとにして、第5学年では羅臼昆布を題材に学習を行った。児童一人ひとりが自らの課題から、自然環境、宣伝・商品開発や昆布業などのグループを作り、実験や調査を通し課題解決を行った。

そしてそれぞれのグループのまとめを1冊の「羅臼昆布図鑑」として刊行し、外部に発信した。地域のユネスコスクール発表会や全国海洋教育サミットに参加し、地域住民の方たちと意見交流をしたり、全国の小中高生と交流したりすることで、地域の素晴らしさを再発見することができた。

また東京での海洋教育サミットでは、東京羅臼会の方々からの温かい応援を受け、地域を離れても羅臼を大切にしたい思いに触れることができた。

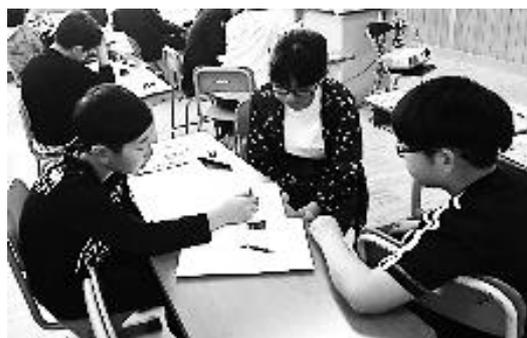
全国海洋教育サミットでの「羅臼昆布図鑑」の発表



羅臼町ユネスコスクール発表会での町内の小中高生や地域の方への発表



どんな昆布図鑑にしたいのかのブレインストーミング



これらの学習を通じ、児童は羅臼昆布についての知識をもつだけでなく、昆布という題材を通し、学びのつながりの中でより地域（自然環境）への愛着を深め、自分が大人になったとき、地域（自然環境）を支えよう・守ろうとする気持ちを育むことができた。

さらには、様々な方との対話・交流からコミュニケーション能力を伸ばし高めることができた。

これらの学びの深まりと共に、課題を自分で見つけ、解決する意識が高まり、合わせて主体的に行動できるようになった。

さらに子どもたちの「羅臼昆布図鑑」での学びが、次の学年の教材として生かされ、受け継がれより深化している。

授業後の子どもたちの振り返りとして、羅臼昆布の素晴らしさを知るだけでなく、「地域の方からたくさんお話を聞けて、みんなが羅臼を大切に思っていることを知ることができた。」、「羅臼

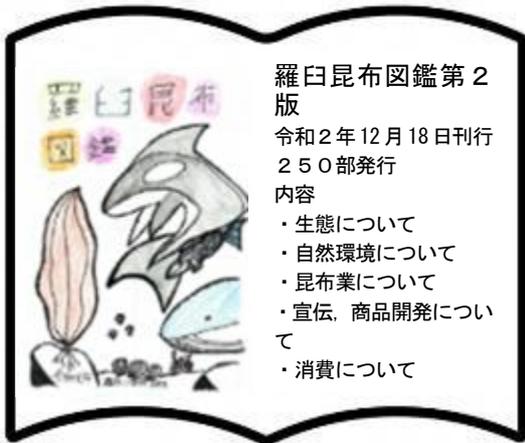
昆布だけでなく、ふるさと羅臼をもっと大切にしたい。」等の意見もみられるようになった。

また、名産品である羅臼昆布のことを調べていくうちに、地球規模で取り組んでいかなければいけない課題のSDGsの考え方がとても大切で、児童が地域社会の一員として、地域を守っていくことの大切さとどのように行動すれば、よりよい方法で地域を持続させていくことができるかを考えることができるようになった。

3年前の児童アンケートで「羅臼が好きですか？」の問いに対し「そう思わない」と回答した児童が半数以上であったが、昨年10月に第6学年

児童に行ったアンケートでは100%の児童が「羅臼が好き」と回答した。その理由として「自然が多く、たくさんの生き物に囲まれ、町民一人ひとりがやさしいから、羅臼は私の自慢のふるさとです。」と書かれた回答があった。これが実践の成果だと言える。多くの地域住民に協力して頂きながら学習を行ってきたことで、より深くふるさとについて知り、郷土に対する誇りや愛着をもつ心、そして自然環境をいかに守り続けていくことが大切なことなのかという認識と行動力を育む機会をつくることができた。人や物との出会いを通して、自らの生き方を考えることができ、将来自分がどのような職業を選択し、どのような学びを将来につなげていけばよいか考えるきっかけとして、羅臼町の環境教育が持続していくよう私たち教員も、授業カリキュラムを深化させていく必要がある。

最後に昨年度、昆布図鑑作りを行った5年生は、6年生になり羅臼の人・もの・環境などを世界中に発信するため、SNSのインスタグラムを使った情報発信をスタートしている。学びの続きとして、羅臼の自然環境の良さやその環境を守るために行動を起こしている人など、限られた人だけでなく、世界中の人々に向けて情報を発信する取組を子ども達の目線から活動することになった。興味がある方は「羅臼小学校インスタグラム」をご覧ください。（右のQRコードを読み取って頂ければ、今年度の取組の広がり伝わると思います。）



京都府京都市立池田小学校

校長 青山 剛

教頭 溝脇 孝

1. はじめに

京都市立池田小学校は京都府の南、京都市は伏見（ふしみ）区に位置している。「ふしみ」は「伏して見る（伏見）」と今は書くが、語源は「伏した水（伏水）」だと言われている。豊富な地下水を使って、たくさんの企業が昔から酒造りを営んでいる。そのため、伏見の街には「酒蔵」が立ち並ぶ地域もある。又、少し南へ行くと宇治市があり、10円玉の「平等院鳳凰堂」や「お茶」が有名である。そんな「酒処・茶処」の傍で生活をしている私たちが「水」に目を向けるようになったのも、自然の流れだったのかもしれない。

下の写真は校区を流れる「山科川」である。それほど「大きな川」という印象ではないが、「宇治川」「淀川」へと繋がり、大阪湾へと流入している。校区内の「山科川」は水量も多過ぎることはないので、子どもたちも夏場は家族で川遊びをしたり、生き物を捕まえたりして親しんでいる。

植生も様々で、季節毎に姿を変える河川敷は見るものの目を楽しませてくれる。春ごろには黄色の絨毯を敷いたように河川敷が黄色に染まる。



2. 5年「ふるさとの川 山科川を見つめて」の実践

○単元目標

- ・課題に対して調べる方法を考え、自分なりの計画に従って、考えをもって追究することができる。【探究】
- ・地域の川「山科川」について環境を専門とする方に話を聞いたり、川の調査や清掃活動をしたり、様々な体験を通して、情報を集め、友だちと考えを交流して自分の見方や考えを深めることができる。【協同】
- ・学習を通して、身に付けた考え方や解決の方法を自分の生活の中に生かし、生活を見直していくことができる。【自己】

○単元の評価規準

視点	つきたい力	評価規準
学習方法に関すること	設定力	<ul style="list-style-type: none"> 体験を通して、自分が考えたことを交流し、自分との関わりを明確にした課題を設定している。 身近な問題から、自分と周囲の関係を考え課題を設定している。
	追究力	<ul style="list-style-type: none"> 課題に対して調べる方法を考え、自分なりの計画に従って、考えをもって追究している。 課題解決に必要な情報を収集し、他の情報と合わせて、効果的に活用しながら学習を進めている。
	表現力	<ul style="list-style-type: none"> 「山科川」に対する自分の考えを、調査に基づく複数の具体的な根拠とともにまとめ、工夫して表現しようとしている。
他者や社会との関わりに関すること	人間関係力	<ul style="list-style-type: none"> 互いの考えを交流し合い、考えを深め自分の中に取り入れようとしている。 学習を通して、身に付けた考え方や解決の方法を自分の生活の中に生かし、生活を見直している。
自分自身に関すること	評価力	<ul style="list-style-type: none"> 体験したことから、自分なりに調べてみたい課題を見つけようとしている。
	実践力	<ul style="list-style-type: none"> 課題追究の中で、新たな課題を見つけ意欲的に学習しようとしている。 学習を通して気付いたこと、分かったことを工夫して表現しようとしている。

○単元について

- ・テーマ「ふるさとの川 山科川をみつめて」

4月頃、「毎年5年生が山科川の学習をしているけれど、今年も学習したいですか。」と学級で尋ねた。すると、「私たちも学習したい」という声がとても強かった。さらに、「なぜ山科川について学習するのか。他の川でも良いし、他のテーマでも良いよ。」と発問すると、「自分たちの地域に流れている川だから、自分たちで学習して、守っていきたい。」という前向きな姿勢が伺えた。そんな子どもたちに、「でも、大人になったらこの地域に住んでいるか分からないし、この地域にこだわらず、環境問題に取り組んでみても良いよ。」と投げ返すと、子どもたちは、「今ここに住んでいるから学習したい。」や、「もしかしたらここにずっと住んでいるわけではないかもしれないけれど、ここは故郷やから。」など、学習に対して積極的な発言が多く聞こえた。私が考えているよりも、子どもたちにとって山科川は身近な川であり、守りたいという意欲が高いことが分かった。

この単元では、山科川の調査を通して、自然を守る活動を経験し、地域に関わっていく。地域の人々の手で山科川が守られていること、池田小学校の先輩たちがこの学習を通して山科川を守ってきたことを知ってほしい。そして、自分たちがそれに参画することを経験し、自分の力を見直し、仲間と協力する楽しさを知り、これからの学習でも自信をもって取り組めるようになることを願っている。

<p>総合「ふるさとの川 山科川をみつめて」40時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発見課題 「山科川について調べよう」 ・追究課題 「山科川が本当にきれいなのか調べよう」 ・提案課題 「『自分たちで守ろう』山科川を提案しよう」 ・熟成課題 「地域の人やお家の人にアドバイスをもらおう」 ・表現課題 「『自分たちの手で守ろう山科川』を提案しよう」 	<p>発見課題 「山科川について調べよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初の学習時間 「なぜ山科川の学習をするの？」 →山科川は自分の地域の川だから。 山科川を守りたいから。 今年度は自分たちの番だから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・橋の上からの観察 「流れが速い」「鳥がいる。」 「想像していたよりもきれい」  <p>↓</p> <p>「山科川は きれい!？」</p>
---	---	--

・体験を生かす

子どもたちは、登下校時や朝のランニング時に山科川をほぼ毎日見ている。授業前に聞くと、児童は山科川に対して「汚い」というイメージをもっているようであった。それは、「ゴミがあるから」、「汚いと聞くから」などの根拠があるようであった。そこで、単元の初めに、橋の上から山科川を観察する。そこで、「川を流れる水が児童の想像よりもきれいであること」を知り、「汚い」というイメージから「思っていたよりも山科川がきれいである。」へ、イメージを転換したいと考えている。次に、山科川に実際に入って調査活動をする。この活動を通して、児童は、水の中に入って水質調査をしたり、ゴミの調査をしたりすると、橋の上からは分からない水の汚れや、上からは見えていないゴミがあることに気付く。



「山科川は汚い」ではなく、「山科川はきれいに見えるけれど、実際には汚れやゴミがある」という考えをもった児童は、次に、「山科川をきれいにしよう」という思いを発信する活動をする。その際には、環境問題に詳しい専門家に来ていただき、児童の話を聞き、意見を述べていただく。また、児童が考えた案に対して、アドバイスをしていただき、自分たちに実現可能な発信方法を考えていく。自分たちの考えだけで動くのではなく、外部の方に話をしてもらう機会を設けることで、客観的な見方が広がり、考えや認識が深まると考えられる。そして、まとめた自分の考えを社会に発信・提案していくことで、児童は自分たちが地域・社会に参加していく経験をするようになる。その経験を自信とし、これからの学習につなげていきたい。



・協同的な学びを生かす

環境を専門とする方に話を聞き、自分たちの提案を修正する際には、友だちと意見を交流する。同じ話を聞いていても、受け取り方や感想は様々であり、提案に対して多様な見方をすることができる。また、自分の意見と同じ意見をもつ人がいると、児童にとって大きな安心となる。そして、自信をもって意見を述べることができる。

提案をする際には、看板やポスター、学校HPなどを活用することになるだろう。その時に、児童は、協力して一つひとつのものに取り組む楽しさを知り、一緒に物事を進めることのよさを実感する

と考えられる。

学級内だけではなく、環境を専門とする方やお家の人に意見をもらう機会をもつ。これまで知らなかったことを知って視野が広がったり、足りない部分に対してアドバイスをもらったりすることで、児童は、第三者の目で客観的に見てもらうことの大切さを知るだろう。また、大人に自分の考えを伝え、反応をもらうことは、とても刺激や意味のあることであり、考えを練り上げるために非常に効果的な体験であると考えている。

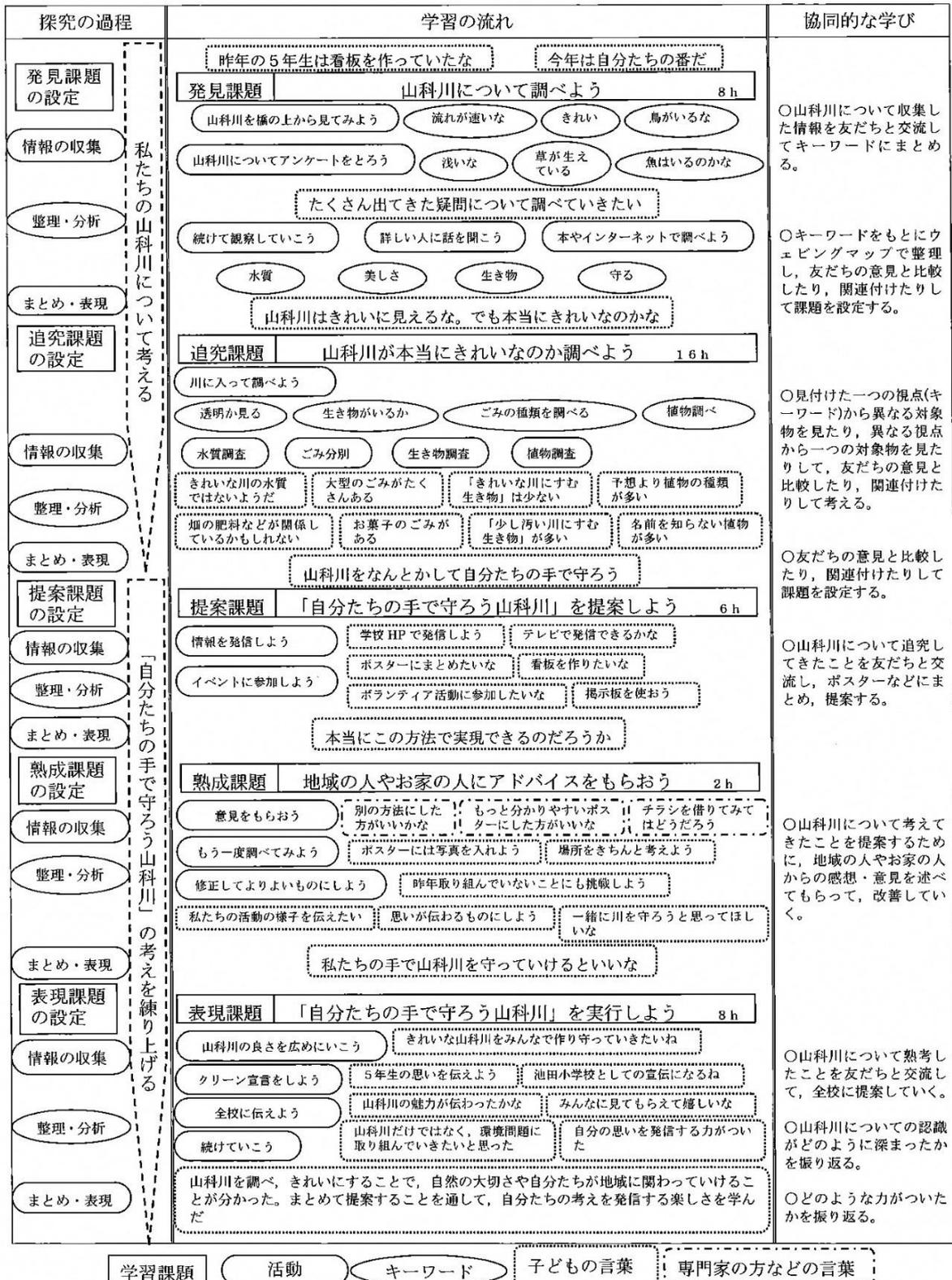


・実践的な学びを生かす

児童は、山科川を調査し、意見をまとめた「自分たちの手で守ろう山科川」を地域の方や全校に提案していく。自分の学びを自分や学級内だけでとどめるのではなく、社会に発信することで、社会に関わる喜びや意義を感じることができると考えられる。

また、自分の中で確かになった学びは、これからの学習や生活につながっていく。「私たちの山科川」から、他の河川、さらに自然や地球環境について考える際にも、大いに役立つと思われる。また、この学習を通して得た「自分で課題を見つけ、解決方法を模索し、修正しながら提案に向かうプロセス」は、今後の児童の自信となるであろう。今後はこれを応用して、自ら問題を解決していくことを願っている。

○単元構想図



3. 実践を通して

本校では「総合的な学習の時間」の学習で子どもたちに環境について学ぶ機会を設定する際に、身近なところに先ず目を向けて、そこから広い視野で環境に対する考えをもてるようにという学習素材の魅力を感じて「山科川」を題材に選んだ。その後も身近に流れている「山科川」を通して環境学習の取組を進めている。

実際、学習の導入場面で子どもたちに「何故、山科川について学習するの？」との問いかけをすると、子どもたちからは「山科川は地域の川だから」「山科川を守りたいから」「今年度は自分たちの順番だから」との答えが返ってきた。長年、この取組を続けてきたことによって、5年生になれば山科川について学習をするのだという意識も芽生え、又、自分たちが親しんでいる「山科川」を守りたいという気持ちが学習の動機づけになっているようである。

普段何気なく見ている川を「学習の対象」として、改めて観察してみるとその流れの速さや、そこに生活をしている生き物、川の水質といった部分にまで目が向いた。

子どもたちが着眼したもののの中から、調査の対象を選択し、最初は「川のきれいさ」を取り上げた。「きれいさ」と一言と言っても様々な側面があるので、どのような尺度で考えるのかを話し合い、「見た目」「ごみの量や種類」「住んでいる生き物」等からアプローチすることとした。「見た目」は川に入った途端に「思っていたより透明やな」と感想を漏らしており、自分たちがイメージとしてもっていた川の印象がより正確なものへと上描きされた。

「ごみの量や種類」については、実際にごみを拾い集め、学校へ持ち帰り分析をした。「生活の中から出てくるものが多い」「誰かがポイ捨てしたのかな」等と、子どもたちならではの着眼点からのコメントが出てきた。又、誰かが川にごみをポイ捨てしているかもしれない現実を目の当たりにして、ショックを受けているようでもあった。

川での調査活動の際にはライフジャケットを着用し、安全に配慮しつつ進めた。子どもたちは「こんな浅い川やのになんで？」といった表情だったが、川は上流の天候等によって一気に増水すること、浅くても水の勢いなどによって足を取られること、水深が10cm程度でも溺れることがあることなどを説明し、ライフジャケットの必要性和自分たちだけで遊びで川に入ってはいけないことを伝えた。

子どもたちが「生活の中から出たごみをポイ捨てしたのかな」と発言するのも頷ける様に、見付かるごみは空き缶やレジ袋・総菜類のプラ容器にPETボトル等が多く、皆が手にし易く、使用後は不要になるものが殆どだった。又、このごみの調査については「全国川ごみネットワーク」が行っている「水辺のごみ見つけ！～全国水辺のごみ調査～」にも報告をし、「レジ袋配布に規制がかかったり、有料になったりしているのに、まだレジ袋のごみが多い」という子どもたちの意見に「よく考えられている」とご意見をいただいた。

「住んでいる生き物」については、網や仕掛を用いて魚類を捕まえたり、亀や小魚類を手掴みしたり、岩の裏に張り付いているものや河原にやってくる鳥などを観察したりして調べた。見つけた生き物については、メモに取って資料として残したり、学校へ連れて帰って飼育したりした。

岩の裏などから見つかる生き物の中には、水質の階級を判断するのに役立つ「指標生物」も多く、それらから子どもたちは山科川の水質について客観的な指標を得ることができた。

水質を客観的に評価することができると知った子どもたちは、もっと科学的な方法で山科川の水質について知ることができないのかと考え、そこで、パックテストを用いて調べられることを伝えると「是非、やってみたい」ということで、パックテストを準備して水質検査を行うことにした。

山科川から水を汲んできて、教室で行なった。子どもたちにとっては見たことも聞いたこともないような、化学式や化学物質の名称ばかりだったが、説明書を読んだり担任に質問したりしながら、

子どもたちなりに解釈したようであった。

このパックテスト調査の中で、各グループの結果を表にまとめて読み取る活動をした。数値が二極化するものや、全て一致するもの、1つ2つ飛び抜けるものなど結果は様々で、どのように判断すればよいのか困っているようであったので、1つ2つ飛び抜けているものについては、調査の方法に不備があったわけではないだろうが、こういうものについては結果から省いて考えることもあるのだということも伝えた。又、余裕があるならば再調査してみるという方法も考えられるということも選択肢として挙げたが、子どもたちにとっては、細かな数値の一つ一つよりも全体的な傾向の方に意識があったようで、一つの推論がたてられたことに満足していた様子であった。

調査活動が半ばから終盤に差し掛かってくる頃に、京都で河川レンジャーとして活躍されている方をゲストティーチャーとして招き、自分たちの調査を中間的に発表して聞いてもらったり、河川レンジャーとしての経験からお話をさせていただいたりした。又、水にかかわる企業の方を学校へお招きして、環境についての学習をしていただけることになった。環境に対する気持ちが高まっているところに、様々な専門家の方からのお話を聞く機会をいただけたことで、子どもたちの学習にもより深みが出てきた。

様々に調査活動を進めてきた子どもたちは、この結果をたくさんの人に知ってもらって、今よりもっときれいな川になるように呼びかけをすることにした。方法として「立て看板を立てる」「ポスターを作る」「学校のHPを使って呼びかける」等等…。子どもたちならではの発想で地域の人や社会に対して呼びかけようと考えた。

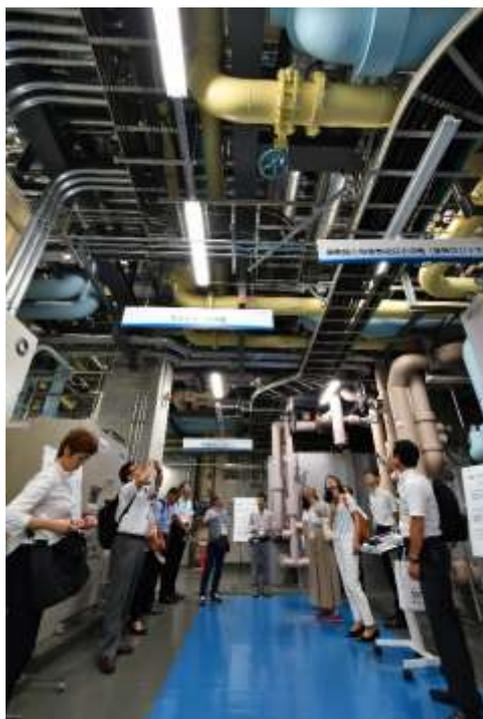
そこで、河川レンジャーの方に再度訪問いただき、自分たちの社会へのアプローチの方法を聞いていただくことにした。「看板を作るなら・・・」「ポスターにするなら・・・」とアドバイスをしていただき、自分たちの提案方法を再考するきっかけとなった。その後、各グループで提案方法をより良いものにするために、話し合いを重ねていった。

毎年11月に行っている「クリーン集会」の場で、5年生の発表の場を設けた。「池田クリーン宣言」として、全校の児童に知っておいてもらいたいこと、この集会の後に行われる清掃活動にどのような気持ちで取り組んでもらいたいかな等を宣言文に込めて、発表した。ポスターや立て看板等も完成し、地域の掲示板等に貼らせてもらったり、看板を設置させてもらったりした。

学習を振り返って子どもたちに感想を聞くと、学習の初めに抱いていた「山科川」に対するおもいから、より具体的なイメージへと変容していた。「ホテルが見られるような川に」「一人一人が意識をもつことが大切」「ごみをもっと減ってほしい」等、実際に川に入って身近なもの、自分たちのものと感じられるようになったから出てきた言葉だと思う。

□ 誌上発表 □ P 4 4 ~ 7 4

- 1 郷土に愛着をもち、よりよく課題を解決する子供の育成
～地域を「知る」・「調べる」・「守る」・「考える」活動を通して～
青森県上北郡東北町立甲地小学校 校長 内海 浩幸……44
- 2 より広い視野で問題を捉え、よりよい行動を創り出す児童の育成
～4校が協働した海洋教育プログラムを通して～
福岡県大牟田市立みなと小学校 校長 馬籠 秀典
主幹教諭 下地 徹 ……54
- 3 持続可能な社会を創造する力の育成を目指した環境教育の実践
～豊かな体験を通して社会性や協調性を育む～
石川県白山市立北星中学校 校長 東海林 幸男…60
- 4 「深一学で身につける生きる力の育成」
～異年齢集団活動による探求力・問題解決力の育成～
東京都江東区立深川第一中学校 校長 佐川 明夫
E S D担当 謝敷 治彦……66



郷土に愛着をもち、よりよく課題を解決する子供の育成

～地域を「知る」・「調べる」・「守る」・「考える」活動を通して～

青森県上北郡東北町立甲地小学校

校長 内海 浩幸

1 はじめに

本校は、青森県上北郡東北町にある全校児童75名の小規模校である。東北町は、青森県の中央からやや東側に位置し、県内でも有数の長いも産地であり、本校の校舎からも広大な畑が見渡せる。また、本校学区の東側には、大和しじみをはじめ、日本一の漁獲量を誇るシラウオやワカサギ、モクズガニ、天然ウナギなど多くの水産資源に恵まれ、「宝湖」とも呼ばれる小川原湖が広がっており、豊かな自然環境に恵まれた教育環境にある。

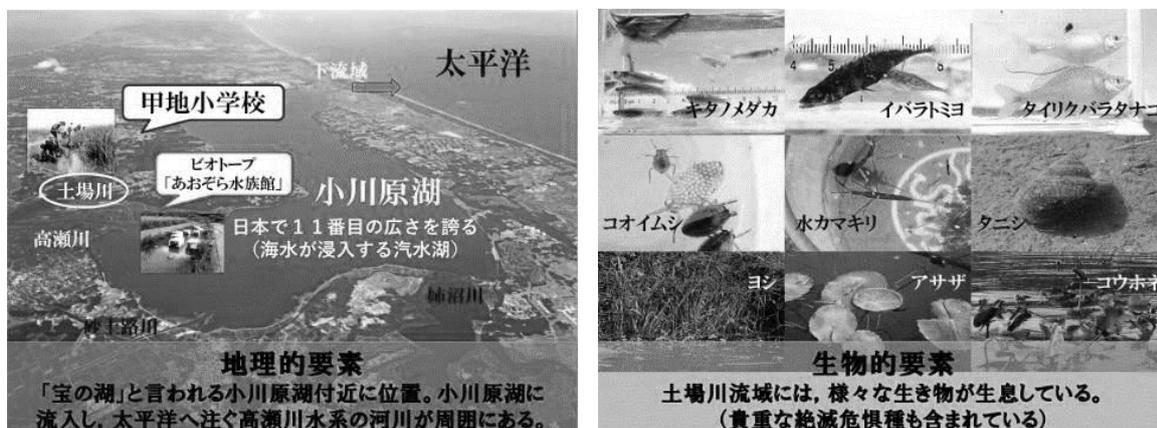
本校では、このような地域の自然環境を生かした特色ある教育活動として、「かっちっこタイム（総合的な学習の時間）」を展開している。これは、「地域の環境資源を有効に活用し、探究的な学習に主体的、協働的に取り組ませることで、郷土に愛着をもち、よりよく課題を解決する力」の育成を目指し、各教科等との関連を図りながら、環境教育の一環として行っている学習である。（※別紙資料1・2参照）各学年で行っている主な単元は次のとおりである。

3 学年	日本一の長いもづくり	地域を「知る」
4 学年	生き物調査隊（高瀬川・土場川）	地域を「調べる」
5 学年	あおぞら水族館Ⅰ（ビオトープ）	地域を「守る」
6 学年	あおぞら水族館Ⅱ（ビオトープ・小川原湖）	地域を「考える」

中でも、4年生以上が行っている学習は、NPO法人小川原湖自然楽校、国土交通省高瀬川河川事務所、土場川土地改良区等の協力をいただきながら、平成28年度より河川基金助成事業として取り組み、各種表彰を受けるなど、一定の評価を得ている。

主な学習の場としているのが、小川原湖に流れ込む土場川流域であり、そこには、多くの貴重な生き物が生息している。魚では、キタノメダカ、イバラトミヨ、タイリクバラタナゴ、ドジョウ、モツゴなどが、水生昆虫では、コオイムシ、水カマキリ、ガムシ、マツモムシなどが生息している。また、貴重な水草も多く、ヨシ、アサザ、コウホネ、マコモ、ガマ、ヒシなどが見られる。

しかし、近年、小川原湖周辺の水田のほ場整備が進められ、用水路等を生息地とする貴重な生物の生育環境に大きな変化がもたらされている。そのため、高瀬川河川事務所との協力の下、ビオトープを作り、貴重な生き物の保護活動にも取り組んでいる。



令和2年度 東北町立甲地小学校
総合的な学習の時間「かっちっこタイム」

<p>3年生 日本一の長いもづくり</p>  <p>長いも植え</p> <p>長いも名人「たまさん」に長いもづくりを学び、実際に育てて収穫します。</p>	<p>地域を知る</p>  <p>発表会</p>	<p>地域を調べる</p>  <p>生態系調査</p>	<p>4年生 生き物調査隊</p>  <p>源流見学</p> <p>小川原湖に流入している高瀬川と生き物について学びます。</p>
<p>5年生 あおぞら水族館Ⅰ</p>  <p>ビオトープ改善</p> <p>ビオトープを改善しながら生き物の生息環境について考えます。</p>	<p>地域を守る</p>  <p>生き物放流</p>	<p>地域を考える</p>  <p>カヌー体験</p>	<p>6年生 あおぞら水族館Ⅱ</p>  <p>保護・飼育</p> <p>生き物の保護・飼育活動をしなが、地域のためにできることを考えます。</p>

かっちっこタイムの子どもたちの声

特産物 生物 共生 未来

長いものことを好きになったよ。たまさん、ありがとう。

長いもには愛情や苦労がたくさんつまっていることが分かった。

山にすみこんだ水がものすごい長い時間をかけて、川の水になって流れてくることが分かって感動した。

源流の水はとても冷たかったけど、きれいだった。

地域に絶滅危惧種がいることがすごい！貴重な生き物を守っていききたい。

タイリクバラタナゴを育てたら、カラス貝から赤ちゃんが生まれて本当にうれしかった。大きく成長したら小川原湖やビオトープに放流したいな。

ビオトープのメダカが増えてきてうれしい。キタノメダカをもっと増やしたいな。

当たり前だと思っていた自然や生き物がこんなにも大切ななんて思っていなかった。未来まで残していきたい。

カヌーから見る小川原湖はとても美しかった。すてきな場所に住んでいると改めて感じた。

生き物たちは工夫して助け合っていると思った。私たちも助け合いながら過ごしていきたい。

※これは、令和2年度の実践を基に作成したものである。

3 具体的な実践

(1) 第3学年「日本一の長いもづくり」

① 単元の目標

【主体的に取り組む態度】

東北町の長いも作りについて、調べたり体験したりする中で、地域の特色に気付いたり、長いも作りに関わる人々と関わったりすることで、地域社会に誇りと愛情をもつことができる。

【知識・技能】

自ら立てた課題を解決していくために、図書やインターネットで調べたり、地域の人のお話を聞いたりしながら必要な情報を集め、活用することができる。また、調べたり体験したりして分かったことや考えたことなどを、資料を使いながら工夫して表現することができる。

【思考・判断・表現】

東北町の長いも作りについて、調べたり体験したりして分かったことを、自分たちの生活と結びつけて考え、自分自身や自分の生活について見つめ直すことができる。

② 学習活動

過程	時期	学 習 活 動	活動の様子
課題をみつける (2)	4月	1 長いもについて、知っていることを発表し合う。(1) 2 長いもが東北町の特産物であることを知り、課題を作る。 (1) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">日本一の長いものひみつを探ろう</div> ※予想される学習課題 ・日本一の長いものゆくえ ・東北町で長いもを作っている理由 ・長いも作る農家の工夫や努力 ・日本一の長いもの歴史	 植え付け
追究する (2)	5月～11月	3 グループごとに学習計画を立て、調べる。 (2 2) ・解決の仕方について話し合う。 ・調べ活動と体験活動 ①畑で長いもを作ろう。 ②農家の植え付けを見学しよう。 ③長いもの世話をしよう。 ④長いもを収穫しよう。 ⑤JA長いも洗果場を見学しよう。	 ネット張り  収穫
地域とのつながり (1 7)	11月～12月	4 調べた内容をまとめる。(1 5) ・発表会のための資料を作り、発表の練習をする。 ・お世話になった方々へ礼状を書く。 5 長いも料理を体験する。(2) ・長いものバター焼き、長いもすいとん など	 長いも料理

吹越たまさんの畑を借用・体験
JA ゆうき青森の活用

ここから発信(2)	1月	6 「かっちっこタイム」発表会(2)	 <p style="text-align: center;">発表会</p>
-----------	----	--------------------	--

※他教科との関連

社会科「はたらく人々とわたしたちの暮らし」

③ 成果と課題

- 東北町は、全国でも有数の長いも産地であることを知るとともに、自分たちの住む甲地地区は、特に長いもづくりが盛んであることを知り、郷土に愛着と誇りをもつことができた。
- 長いもの植え付けや収穫を実際に体験することで、長いもを育てることの苦労や喜びを味わうことができた。
- 自分たちで収穫した長いもを使って料理を体験することで、野菜作りの楽しさを感じるとともに、安全安心な野菜作りなど食に係る環境の大切さについて考えることができた。
- 自分たちの住む地域では、長いも以外にも様々な野菜を作っていることに目を向けるなど、自分たちの住む地域の環境について考える機会にしていきたい。

(2) 第4学年「生き物調査隊」

① 単元の目標

【主体的に取り組む態度】

地域の川にすむ生き物を採集したり調べたりすることを通して、身近な自然に興味をもち、地域の自然を大切にしていこうという気持ちをもつことができる。

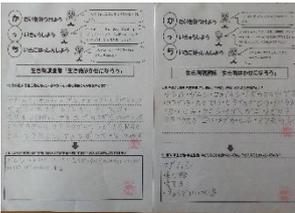
【知識・技能】

地域の川で体験活動して疑問に持ったことを調べたり、分かったことや考えたことについて自分なりにまとめたりすることができる。

【思考・判断・表現】

地域の川について知り、川にすむ生き物を採集したり調べたりすることを通して、地域の自然を大切にしていくために自分たちにできることを考えることができる。

② 学習活動

過程	時期	学 習 活 動	活動の様子
課題をみつける(2)	4月	1 オリエンテーションをし、興味関心を高める。(1) 2 身近な川について知っていることを発表し合い、課題を決める。(1) <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">川にすんでいる生き物について調べよう。</div> ※予想される学習課題 ・川にすんでいる生き物の種類 ・生き物のすんでいる川の様子や周りの様子	 <p style="text-align: center;">オリエンテーション (ワークシート)</p>

<p>追究する・地域とのつながり (16)</p>	<p>5月～9月</p>	<p>3 学習計画を立て、調べる。(1) ○解決の仕方について話し合う。 ・地域の川にすんでいる生き物を採集する。 ・採集した生き物について調べる。 (本・インターネットなど)</p> <p>4 体験活動をする。(6) × 2 = (12) ・川の生き物を採集して観察する。 ・水の様子や周囲の様子を観察する。</p> <p>①高瀬川水系 ・絵に描いたり、写真に撮ったりする。</p> <p>②土場川 ・採集した生き物をビオトープに放流する。</p> <p>5 高瀬川と土場川で採集した生き物について観察する。(3) ・観察して気付いたことをもとに生き物についてまとめる。</p>	 <p>高瀬川水系調査</p>  <p>土場川流域調査</p>  <p>ビオトープ放流</p>
<p>ここから発信 (12)</p>	<p>9月下旬</p>	<p>6 調べた内容をまとめる。(10) ・発表会のための資料を作り、発表の練習をする。</p> <p>7 発表会をする。(2)</p>	 <p>発表会</p>

※他教科との関連

社会科「水はどこから」(東京書籍)

理科「あたたかくなって」「暑い季節」「すずしくなると…」「寒さの中でも」(学校図書)

③ 成果と課題

○身近な地域と生活との関わりを知ることで、児童の環境保全・水質保全に対する思いが高まった。

○他教科との関連を図ることによって、学習につながりをもって意欲的に取り組む児童の姿が見られるようになった。

●生き物の名前を知るだけでなく、生き物が生息する環境について調べていこうという気持ちを次学年につなげていく必要がある。

(3) 第5学年「あおぞら水族館Ⅰ」

① 単元の目標

【主体的に取り組む態度】

環境と生き物の生態系を関連付けて考え、身近な自然の環境に関わろうとすることができる。

【知識・技能】

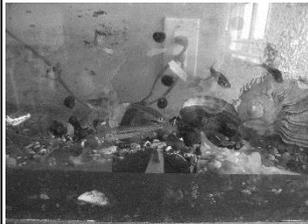
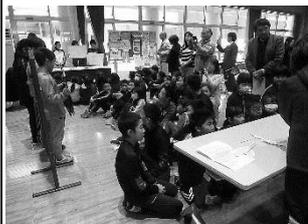
採取した生き物を飼育・保護するために必要なことをいろいろな方法で調べ、分かりやすくまと

めることができる。

【思考・判断・表現】

これまでの環境への関わりを見直し、地域の環境保護のために自分にできることを考えることができる。

② 学習活動

過程	時期	学 習 活 動	活動の様子
課題をみつける (5)	5月下旬	1 オリエンテーション【5・6年合同】(1) 2 ビオトープで水質・生態系調査を行う。(3) 「放流した生き物とビオトープの様子を調べよう」 【5・6年合同】 3 ビオトープの現状から、課題をもつ。(1) 生き物を守るための環境をつくろう ※予想される学習内容 ・ビオトープの生き物の観察・飼育 ・ビオトープの水質の変化 ・ビオトープの水草の役割 ・ビオトープの形・深さなどの工夫	 オリエンテーション 
追究する・地域とのつながり (28)	6月上旬・7月中旬・9月上旬・10月上旬	4 主な学習計画を立てる。(1) ・活動内容について話し合う。 ・学習課題の観点からビオトープの改善を考える。 ・定期的に観察する計画を立てる。 5 課題を追究する。(27) ・水槽をビオトープとして考え、実践する。 ⇕ ・ビオトープで実践する。 ビオトープでの活動4回(4)×3=(12) 校内で調べたり、記録をまとめたりする活動(15) 例) 必要な情報を得る→ビオトープでの活動内容を決める →ビオトープでの活動→記録のまとめ このようなサイクルを組むと効率的	 ビオトープ生物調査  水槽での観察・繁殖
ここから発信 (7)	12月上旬 1月中旬	6 調べた内容をまとめる。(5) ・発表会のための資料を作り、発表の練習をする。 7 発表会(2) ※写真は一昨年度のもの	 発表会

※他教科との関連

国語科「明日をつくるわたしたち」(光村図書), 社会科「環境とわたしたち」(東京書籍)
理科「魚のたんじょう」(学校図書)

③ 成果と課題

- 児童にとって興味・関心の高い生物調査をメインに学習を展開することによって, 児童の地域の環境保全に対する意識が高まり, 「養育・繁殖」にも興味をもつようになった。
- 生物が生息していた場所とビオトープを比較し, より生息していた環境に近づけるための改善策を児童が主体的に考えることができた。
- 専門家がいて, ネットには頼らずに, 聞きたいことや分からないことなどを積極的に聞き, 課題探求に役立てる姿がたくさん見られた。
- ビオトープが学校から離れた場所にあるため, 改善していくためには, 意図をもって計画的に活動を展開していく必要がある。

(4) 第6学年「あおぞら水族館Ⅱ」

① 単元の目標

【主体的に取り組む態度】

地域の生物や自然について調べたり体験したりする中で, 地域の特色に気付き, 地域社会に誇りと愛情をもつことができる。

【知識・技能】

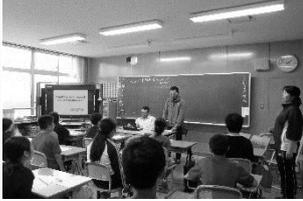
自ら立てた課題を解決していくために, 必要な情報を集め, 分かったことや考えたことなどを, 資料を使いながら工夫して表現することができる。

【思考・判断・表現】

人間と自然との共存や環境保護について考えたり, 自分たちの生活と結びつけて考えたりすることで自分自身の生活や環境について考えることができる。

② 学習活動

過程	時期	学 習 活 動	活動の様子
課題をみつける (4)	5月下旬	1 オリエンテーション【5・6年合同】(1)	
		2 ビオトープで水質・生態系調査を行う。(3) 「放流した生き物とビオトープの様子を調べよう」 【5・6年合同】	
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 未来に残そう！地域の生物 </div>	
		※予想される学習課題 <ul style="list-style-type: none"> ・ビオトープの観察・変化 ・地域の生物の観察繁殖と放流 (水槽での飼育の継続) ・アメリカザリガニの駆除と活用方法 	

<p>追究する・地域とのつながり (29)</p>	<p>6 ・ 7 ・ 8 ・ 9 ・ 10月 ・ 11月</p>	<p>3 学習計画を立て、調べる。 ・解決の仕方について話し合う。(1) ※必要に応じて水産教室やカヌー体験を行う。 水産教室：養殖や放流、環境への取組の視点から話を聞く (2) 6月中旬～下旬 時期変更可 カヌー体験：水草の採取や地域の良さを体験させることを (4) 目的とする。7月</p> <p>4 課題を追究する。(22) ・水槽の観察、実験等  ・ビオトープでの放流活動を行う。9月(放流または採集) 野外での活動3回(4)×3=(12) 校内で調べたり、記録をまとめたりする活動(10)</p> <p>例) 必要な情報を得る→ビオトープでの活動内容を決める →ビオトープでの活動→記録のまとめ このようなサイクルを組むと効率的</p>	 <p>水産学習</p>  <p>カヌー体験</p>  <p>水槽での観察・繁殖</p>
<p>ここから発信 (7)</p>	<p>12月上旬 1月中旬</p>	<p>5 調べた内容をまとめる。 ・発表会のための資料を作り、発表の練習をする。(5)</p> <p>6 発表会(2) ※写真は一昨年度のもの</p>	 <p>発表会</p>

※他教科のとの関連

国語科「ようこそ、わたしたちの町へ」「自然に学ぶ暮らし」(光村図書)
 理科「人と環境」(学校図書)

③ 成果と課題

- カヌーに乗り、水面から地域を見ることにより、児童の地域の環境保全、水質の向上に対する意識が高まった。
- 5年生で生き物について調べた知識を生かし、ビオトープの改善策を児童が主体的に考えたり、教室内の水槽の飼育に意欲的に取り組んだりした。
- 専門家がいることで、ネットの情報に頼らずに、聞きたいことや分からないことなどを積極的に聞き、課題探求に役立てる姿がたくさん見られた。
- 4年生・5年生の活動を生かしながら、小川原湖の保全、地域の産業・観光などにつながる学習展開になるよう学習計画の改善・見直しが必要である。

4 おわりに

このように、本校は、豊富な農産物や貴重な水生生物等、環境教育を実践する上で大変恵まれた環境にある。小学校時代に、地域の自然の豊かさや素晴らしさを実感させることは、環境問題を自ら考え、主体的に行動する子供を育てることにつながると考える。これからも、地域の環境資源を生かした特色ある教育活動を推進し、子供一人一人の環境保全意識を高めていきたいと考えている。

環境教育全体計画

東北町立甲地小学校

<p style="text-align: center;">青森県の教育施策から</p> <p>一人一人の子どもが、環境と人間とのかかわりについて関心と理解を深め、環境に対する豊かな感受性を養うことができるよう、環境保全に主体的に取り組む態度の育成に努める。</p> <p>ア 教科等間の関連を踏まえた指導の工夫 イ 地域の環境の実態に即した指導の工夫 ウ 環境にかかわる体験活動の充実</p> <p>※令和2年度学校教育指導の方針と重点より</p>	<p style="text-align: center;">学校教育目標</p> <p style="text-align: center;">～ふるさとを愛し、自ら明日を切り拓く子供の育成を目指して～</p> <p style="text-align: center;">○かんがえる子 ○おもいやる子 ○きたえる子</p> <hr/> <p style="text-align: center;">努力目標</p> <p>○学び方を身に付け、自分考えを表現する子 ○良さを認め合い、相手を思いやって行動する子 ○健康な生活を心がけ、体力づくりに励む子</p>	<p style="text-align: center;">児童の実態</p> <p>○課題に意欲的に取り組む児童が多い。 ○思いやりある言動が増えてきた。 ○異学年とも仲良く遊ぶ児童が多い。 ○係や委員会の仕事に進んで取り組む児童が多い。 △基本的な生活習慣の定着に課題がある。 △メディアとの付き合い方に課題がある。 △体力面でのバランスに偏りが見られる。 △返事の声が小さい</p>
---	--	--

環境教育のねらい
<p>①環境に対する豊かな感受性の育成 自分自身を取り巻くすべての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心をもち 意欲的に関わり、環境に対する豊かな感受性をもつことができるようにする。</p> <p>②環境に関する見方や考え方の育成 身近な環境や様々な自然、社会の事物・現象の中から自ら問題を見付けて解決していく問題解決の能力と、その過程を通して獲得することができる知識や技能を身に付けることによって、環境に関する見方や考え方を育むようにする。</p> <p>③環境に働き掛ける実践力の育成 持続可能な社会の構築に向けて、自ら責任ある行動を取り、協力して問題を解決していく実践力を培うようにする。</p>

環境教育の重点目標とめざす子どもの姿		
低学年 〈環境に対する感受性の育成〉	中学年 〈環境に関する見方や考え方の育成〉	高学年 〈環境に働き掛ける実践力の育成〉
<ul style="list-style-type: none"> ○身近な自然と親しむ子 ○身近な動植物に関わる子 ○動植物が生命をもっていることに気付く子 	<ul style="list-style-type: none"> ○自然に親しみ、身近な環境に関心をもつ子 ○身近な環境と自分たちの生活との関わりが分かる子 ○身近な環境美化・環境保全に協力する子 	<ul style="list-style-type: none"> ○我が国の自然環境及び生活環境、地球環境に関心をもつ子 ○環境問題について自分の考えをもつ子 ○自分でできる環境美化・環境保全に進んで取り組む子

<p style="text-align: center;">各教科 (主なもの)</p> <p>○社会 ・川・水・ごみ・森林などを扱う単元学習で、環境保全に取り組む態度を育てる。</p> <p>○理科 ・身近な自然環境を教材として活用し、自然を愛する心情を育てる。</p> <p>○生活 ・身近な自然環境と親しむ体験的学習を通じて、自然に関わる態度を育てる。</p> <p>○家庭 ・日常生活と環境との関わり方を理解し、快適な生活環境づくりを実践しようとする態度を育てる。</p>	<p style="text-align: center;">特別の教科 道徳</p> <p>○環境教育に関連した項目の学習による道徳的価値の深化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命尊重 ・自然愛、動植物愛 ・公徳心、規則の尊重 ・節度・節制 ・郷土愛 ・勤労と社会奉仕 	<p style="text-align: center;">特別活動</p> <p>○身近な自然環境を見つめ、環境保全の実践的な態度の育成</p> <p>〈学級活動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの整理整頓 ・観察園の有効活用 <p>〈児童会活動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緑の羽根等の募金活動 <p>〈委員会活動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員会活動 <p>〈学校行事〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会 ・学習発表会 	<p style="text-align: center;">総合的学習の時間</p> <p>○身近な地域や地球の自然環境に関心を持ち、環境保全と自分との関わりについて考え、自分にできることを実践しようとする態度の育成</p> <p>【3年】 「日本一の長いもづくり」</p> <p>【4年】 「生き物調査隊」</p> <p>【5年】 「甲地あおぞら水族館Ⅰ」</p> <p>【6年】 「甲地あおぞら水族館Ⅱ」</p>
<p style="text-align: center;">家庭・地域との連携</p> <p>○PTA活動 ○甲地水土保全会 ○小川原湖自然楽校 ○小川原湖漁協組合 ○環境出前講座 ○学校だより ○学級通信 など</p>			

より広い視野で問題を捉え、よりよい行動を創り出す児童の育成 ～ 4校が協働した海洋教育プログラムを通して ～

福岡県大牟田市立みなと小学校
校 長 馬籠 秀典
主幹教諭 下地 徹

1 はじめに

大牟田市は福岡県の最南端に位置する、人口約 11 万人の都市である。大牟田市は石炭産業で栄えた都市であり、明治時代初期の日本の近代化や太平洋戦争後の日本の復興をエネルギーの供給源として支え、大きな貢献を果たしている。最盛期、人口は 20 万を超え福岡県第二の都市であった。その後、高度経済成長期におけるエネルギー転換によって徐々に石炭産業が衰退したことにより、大牟田市の人口は減少に転じている。

そのような人口減少の課題、また高齢化という課題の解決に対して ESD の理念が一致したことから、大牟田市では平成 24 年に全ての公立小・中、特別支援学校がユネスコスクールに加盟し、以降『ユネスコスクール・ESD のまち おおむた』としてホールシティアプローチで ESD の推進に取り組んでいる。また、前述した石炭産業の関連施設は、平成 27 年に『明治日本の産業革命遺産』として世界文化遺産に登録され、文化遺産としての価値を再認識されているところである。

2 本校の ESD の特色

みなと小学校は大牟田市の中でも最南端にあり、福岡県内最南端に位置する学校である。校区には世界文化遺産の一つである三池港（現在も港として使用されている、世界的にも珍しい稼働遺産）があり、石炭産業最盛期の頃には児童数 1000 名を超える学校であった。令和 3 年度現在は、児童数 256 名となっている。本校の ESD の特色は、東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターのご指導の基、近隣の学校と連携しながら進めている『海洋教育』である。海洋教育は「海に親しむ」「海を知る」「海を守る」「海を活用する」を主テーマとして進められ、大牟田市では有明海を教材として、生物多様性や海洋ごみ、海洋温暖化に起因する自然災害の問題などを系統的に学習し、これからの社会における自然との共生や持続可能性について考えるカリキュラムを進めている。これは、SDGs のターゲット 14「海の豊かさを守ろう」を主テーマとした教育活動である。

その中で、第 4 学年では「海を守る」をテーマに、有明海の海洋ごみ問題を教材とした環境教育に取り組んでいる。そこで、本実践報告では、第 4 学年に焦点を当てて実践を報告する。

3 4校協働プログラム

2 で述べたとおり、本校の海洋教育は近隣の学校と連携しながら進めている。具体的には、海洋教育のテーマに基づきながら各校の地理的特色を生かして地域の事象を教材化し、課題設定や中間、成果報告において学習交流を行っている。

第 4 学年では、有明海や有明海に流れ込む諏訪川の環境について 4 校が共通の課題を設定し、それぞれの学校が役割分担して調べたことを情報共有し、課題解決のために取り組んだことを成果共有するという流れで実践に取り組んだ。

第 4 学年におけるプログラムの概要は、表 1 の通りである。表 1 第 4 学年における 4 校協働環境学習

成果報告 それぞれの学校の取組を報告、共有				
	行動 発信	行動 発信	行動 発信	行動 発信
中間報告 ごみの量や種類を報告、課題づくり				
	調査 整理	調査 整理	調査 整理	調査 整理
課題設定 有明海や諏訪川のごみの調査				
第 4 学年 『海を守る』	みなと 沿岸域	A 校 河口域	B 校 中流域	C 校 上流域

4 第4学年における実践の実際

(1) 単元計画（4校協働プログラムにおける、みなと小学校としての計画）

段階	主な学習活動（●は4校によるオンライン合同授業）
つ か む	<p>1 海洋のごみ問題に着目し、有明海や諏訪川のごみを調べるという課題をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 第3学年での学習内容を想起し、海洋のごみ問題に着目する。 ・いろいろな生き物が住んでいる海にごみ捨てられているのかな。  <ul style="list-style-type: none"> ● 有明海や諏訪川のごみを調べるという課題をつかみ、調べる場所を役割分担する。 ・3年生のときと同じように、四つの学校で役割分担して調べよう。 <p>みなと：元三池海水浴場 A校：諏訪川河口 B校：諏訪川中流 C校：諏訪川上流</p> <p>【課題Ⅰ】 有明海や諏訪川のごみの量や種類を調べよう。</p>
つ く る	<p>2 有明海や諏訪川のごみの量や種類を調べ、有明海に浮遊ごみが流れて溜まっていることを明らかにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 有明海（元三池海水浴場）のごみを調べ、回収する。 ・やっぱり、有明海にも他の地域と同じようにごみがある。 ・ペットボトルやレジ袋などのごみが多い。  <ul style="list-style-type: none"> ○ 回収したごみを分別し、ごみの種類ごとの量を記録する。 ● 4校が調べたごみの量や種類を情報共有し、「河口や沿岸ほどごみの量が多いこと」「水に浮かぶごみが沿岸域に見られること」を明らかにする。 ・水に沈むごみはそれぞれの地域で見られた。 ・水に浮くごみは上流や中流では見られない。 ・水に浮くごみは、川を流れて、元海水浴場に流れて溜まっているのではないか。  <p>【課題Ⅱ】 有明海のごみの問題を解決するために自分たちにできることを考えよう。</p>
深 め る	<p>3 有明海のごみ問題を啓発するためのポスターを作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「有明海にごみ溜まっている（他地域にまで影響する）」という問題を啓発するために相応しいポスターの図案やキャッチコピーを話し合う。 ・ポスターを見た人が思わず目を留めるようなキャッチコピーにしよう。 ・川と海のつながりが分かるような絵にしよう。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 話し合ったことをもとに、ポスターを作成する。
生 か す	<p>4 ポスターを地域等に発信し、これまでの活動について振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ポスターを掲示すべき場所について話し合う。 ・人がたくさん集まる場所がいい。 ・お店など、物を買う場所がいい。  <ul style="list-style-type: none"> ○ 作成したポスターを配布し、発信する。 ● 4校の取組を交流し、学習活動を振り返ったり、これからの生活を考えたりする。 ・自分たちにも、学習したことを地域に呼びかけることで、行動することができた。 ・ごみの問題は他の地域にも迷惑をかけるから、これからも気を付けたい。

(2) つかむ段階

【実践の実際】

つかむ段階では、児童が有明海や諏訪川のごみの問題に関心をもち、4校で役割分担してごみの量や種類を調べようと意欲を高めることをねらいとした。

まず、3年生のときに学習した水辺や海の生き物の多様性について振り返らせた。児童は、同じ水の中でも淡水や汽水、海水など、生活に適した環境に違いがあることや、海面や海底、川陰など生息する場所に違いがあること、体の形や食べ物、泳ぎ方といった生態に違いがあることなど、様々な生物がそれぞれに適した環境で生活していたことを想起した(写真1～3 資料1)。

次に、海のごみの問題を提示し、メディア等で見聞きしたことがあるか問いかけた。この問いに対して、全員の児童が「知っている、聞いたことがある」と答えた。中には、マイクロプラスチックの問題について説明する児童もあり、関心の程度に差はあるものの、全員がごみ問題について把握していた。そこで、「有明海にも、同じようにごみがあるのだろうか」と問いかけた。児童はメディア等で見聞きする海洋ごみ問題を自分の身近な地域に当てはめて考えたことがなかったようで、しばらく黙り込んで考える様子が見られ、少しずつ「やはり有明海にもごみがあると思う」と答え始めた。そこで、更に「有明海までごみを持って行って捨てている人がいるのだろうか」「そうであれば、誰がそんなことをしているのだろうか」と揺さぶりの問いを投げかけ、児童の考えを深めていった。

そして、その上で「これからどんな活動をしたいか」と尋ねると、児童は「有明海にごみがあるのかどうかははっきりさせたい」と答えた。また、3年生のときも4校で役割分担して海や川の生物を調べる経験をしていることから、「四つの学校で役割分担すれば、よりたくさん場所を調べることができる」と、活動の見通しを立てる児童も見られた。

そこで、4校でオンライン合同学習を行い、それぞれの地域にある海や川のごみの量や種類を調べ、次の合同学習で報告するという課題を共有した。

【実践の考察】

つかむ段階での活動を通して、本校の児童は校区にある元三池海水浴場のごみを調べる役割となった。この時点では、「自分の身近な人に、海にごみを捨てている人はいないから、有明海にはごみは無いだろう」と考えている児童もあり、児童同士の考えにずれが生じていたことから、「早く有明海にごみを調べに行きたい」と、活動への意欲を高めている姿が見られた。



写真1 生き物観察 (3年生時)



写真2 漁師さんインタビュー (3年生時)

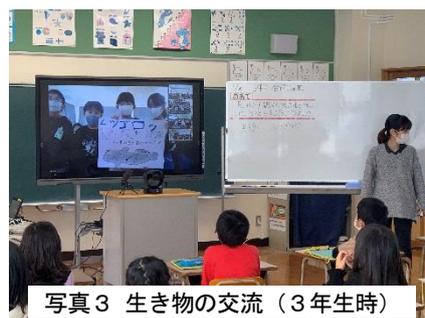
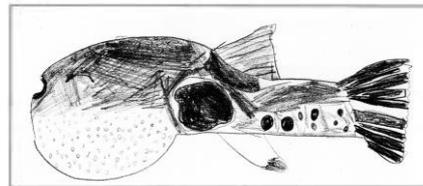


写真3 生き物の交流 (3年生時)

フグ



◦有明海の西よりにフグはいる。
◦有明海ゆりうしさんでもみょうにおすか
く体をきらないと分らないでも白子があ
るほうがフグのおス。
◦有明海のフグは小魚や貝も小さいカニが
やうなものを食べています。
◦有明海のフグの夜の間には体を休めるが
も多く昼の間にうごめくがいます。
◦有明海のフグは小さい魚を食べるとき、口で食
べもフグもいれは、なまで食べるフグもいます。
◦有明海のフグは、まだとどろりかかむ
フグもいます。

資料1 生き物について調べたこと(3年生時)

(3) つくる段階

【実践の実際】

つくる段階では、児童が「海のごみ問題は自分の地域だけの問題ではなく、他地域の影響を受けたり与えたりする」ことを明らかにすることをねらいとした。

まず、元三池海水浴場でのごみの調査を行った。海水浴場には、テトラポットを中心にたくさんのごみが浮かんでおり、また浜辺には、花火のごみや漁具の壊れたものが打ち上げられていた。そこで、全員でゴミ拾いを始めたが、わずか30分でゴミ袋10袋にもなる量が集まったため、「有明海にごみは無いだろう」と考えていた児童のみならず、「ごみがあるだろう」と考えていた児童もとても驚いた様子であった（写真4～5）。

次に、回収したゴミを持ち帰り、燃えるゴミや燃えないゴミ、リサイクルゴミなどに分別した。すると、分別を進めるにつれて、児童はペットボトルなど水に浮かんでいるゴミがとて多いことや、スリッパなど、海で捨てられたとは思えないゴミがあることに気が始めた。その中で、児童から「川や、海の向こう側から流れてきたゴミなのではないか」という仮説が生まれたため、今度は「水に浮かぶゴミ（浮遊ゴミ）」と「水に浮かばないゴミ」で分類して、結果を整理した（写真6～7）。

そして、4校でオンライン合同学習を行い、それぞれの学校が調査したゴミの量や種類を情報共有した。すると、燃えないゴミなど、水に浮かばないゴミについては諏訪川上流から有明海沿岸までどの地域でも見られたものの、ペットボトルや空き缶、発泡スチロールなどの水に浮かぶゴミは、諏訪川河口や海水浴場でたくさん見られることが分かった。このことから、児童は「ゴミが川を伝って海に流れている」という仮説が正しいのではないかと考えを深め、本校の児童は「他地域のごみが自分たちの地域に溜まっている」と考えた。中には、そのことについて怒りを感じている児童も見られた。そこで、「他地域にも影響を与えるゴミの問題を解決するために活動しよう」と、4校で新たな課題を設定した（写真8）。

【実践の考察】

つくる段階での活動を通して、児童はメディア等で聞きする海のごみ問題を、自分の地域の問題として捉え直すことができた。また、ゴミの量や種類を4校で情報共有することによって、浮遊ゴミが海に流れていることが明らかとなったことで、ゴミの問題は地域単位の問題ではなく、他地域にも影響を与えていることを明らかにすることができた。



写真4 海水浴場のごみ調査



写真5 集められたごみ



写真6 ごみの分別作業



写真7 浮遊ごみを確かめる活動



写真8 ごみの量と種類を共有

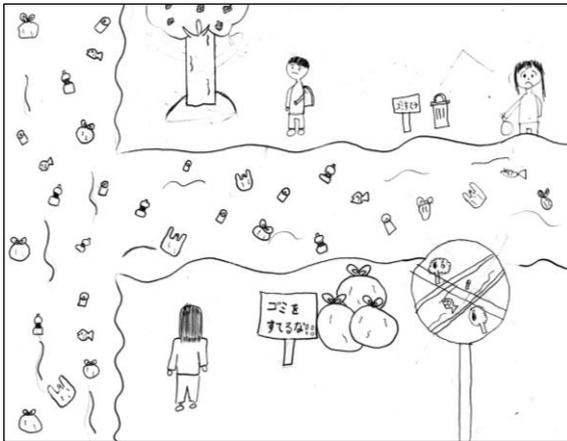
(4) 深める段階

【実践の実際】

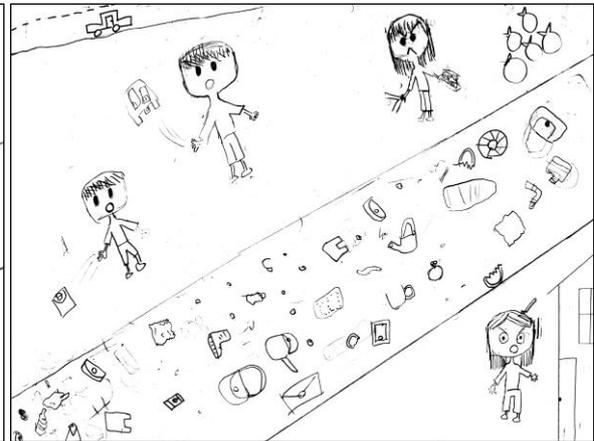
深める段階では、ごみの問題を地域に呼びかけるポスターを作成する活動を通して、他地域にも影響を与える海のごみ問題について理解を深めることをねらいとした。

まず、海のごみ問題を解決するために自分たちにできることを話し合わせた。児童からは、清掃活動やごみ箱の設置、ポスターなどによる啓発などのアイデアが出された。そこで、「継続でき、効果のある活動」「自分たちだけで取り組むことができる活動」という視点を与え、活動内容を吟味させていった。そして、ポスターを作成する活動に一本化することとした。

次に、ポスターの図案やポスターに掲載するキャッチコピーを考えさせた。まず、グループに分かれて図案を検討し、川から海にごみが行っていることが表れる図案にすることを念頭に考えていった。そして、各グループのアイデアを出し合い、図案の意図を共有した上で統合したり取捨選択したりして、三つの図案に整理した（資料2～4）。次に、同じくグループに分かれてキャッチコピーを検討し、ポスターを見た人が思わず目を留めるような言葉とすることを念頭に考えていった。そして、図案の検討と同じ流れで言葉を統合したり取捨選択したりしながら、三つのキャッチコピーに整理した（資料5）。



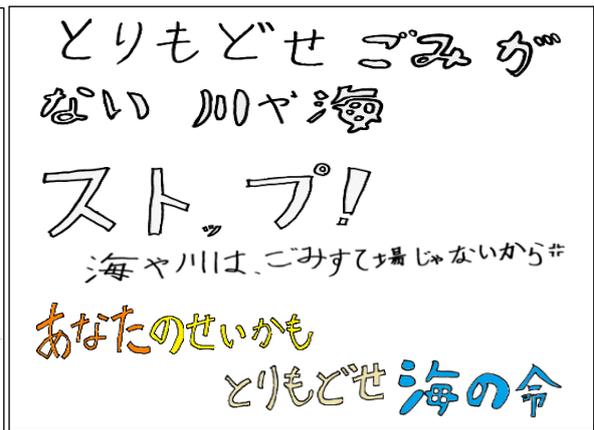
資料2 児童が作成した図案①



資料3 児童が作成した図案②



資料4 児童が作成した図案③



資料5 児童が作成したキャッチコピー①～③

【実践の考察】

深める段階での活動を通して、児童はこれまでの学習を生かしてポスターの図案やキャッチコピーを作成したことで、有明海に関する理解を深めることができた。また、図案やキャッチコピーについて、その意図に基づいて検討を行い、統合したり取捨選択したりする活動を行ったことで、有明海的环境に対する一人ひとりの思いや考えを共有することができた。

(5) 生かす段階

【実践の実際】

生かす段階では、児童が4校で協働して学習活動を行ったり、取組を行ったりしたことに対する満足感や充実感を味わい、これからの自分の生き方を見つめることをねらいとした。

まず、4校でオンライン合同学習を行い、有明海のごみ問題の解決のために各学校で取り組んだことを交流した。同じ課題をもとに各学校で活動を行ったが、例えば学習発表会で地域に呼びかけたり、定期的に清掃活動を行ったりするなど、各学校の取組は様々であった。本校の児童は、自分の学校とは異なる取組について関心をもった様子で説明に聞き入る姿が見られた。また、同じポスター作成については、ポスターの図案やキャッチコピーなどを自分たちのポスターと比較しながら聞き入る姿が見られた。そして、意見交流の際には、活動の意図を質問するなど、自分たちの考えと照らし合わせながら考えることができた(写真9～11)。

次に、これまでの学習活動を振り返り、これからの自分の生活の仕方について考えさせた。児童は、これまでの学習活動については「有明海にもごみ問題があることが分かった」「ごみ問題は自分たちの地域だけの問題ではないことが分かった」など、環境問題を自分事として捉えたり、これまで地域単位で捉えていた問題を、視野を広げて捉え直したりする姿が見られた。また、これからの生活については「ごみになることを考えて買う物を考えたい」「自分の周りの人にも呼びかけたい」など、SDGs(持続可能な開発目標)のターゲット12(つくる責任つかう責任)や17(パートナーシップで目標を達成しよう)にかかわる考えをつくる姿が見られた。

【実践の考察】

生かす段階での活動を通して、児童は同じ課題に基づいて行動した他校の児童と積極的に意見交換し、充実感や協働した取組の良さを味わうことができた。また、自分も地域の一員として取り組むことができることや、今後の自分の生き方について考えを広げることができた。



写真9 合同学習における他校の発表



写真10 作成したポスターの説明①



写真11 作成したポスターの説明②

5 成果と課題

(1) 成果

- 環境学習のプログラムに4校の協働性をもたせたことで、ごみに関する各地域の情報を共有することができ、「他地域に影響を与える」という新たな気づきを得させることができた。
- 4校が役割分担してごみの量や種類を調査したり行動したりしたことで、活動への意欲を高めさせたり責任をもたせたりすることができた。
- 共通の課題をもとに4校が取り組んだことで、各学校の児童同士の仲間意識を高めたり、それに伴った児童一人ひとりの自己存在感を高めたりすることができた。

(2) 課題

- 4校の職員の事前打合せなど、共通理解するための場を計画的に確保する必要がある。

持続可能な社会を創造する力の育成を目指した環境教育の実践

～豊かな体験を通して社会性や協調性を育む～

石川県白山市立北星中学校
校長 東海林 幸男

I はじめに

白山市では、「確かな学力の形成と豊かな心の育成（感性のびのび教育の推進）」を教育の基本目標の一つに掲げ、確かな学力、豊かな心、健やかな体を育み、変化の激しい社会を生き抜くことができるよう「生きる力」を、子供一人一人に確実に身に付けさせることをねらいとし、SDGs の理念に沿った取組を積極的に行うよう推進している。

そのうち、学校教育の目標の中の一つに「集団生活を通して、社会性・協調性を育む」とあり、白山市教育振興基本計画の中に学校の役割として位置づけられてる。

そこで、これまで実践してきた集団指導における教育的意義を意図した本校独自のボランティア活動の取組が、環境教育の実践を通じて社会性や協調性を育むための活動となっているのか、着目してみた。

II 地域特性

白山市は、2005年に1市2町5村が広域合併して誕生し、県内最大の面積を持つ自治体である。県都金沢市に隣接し、日本三名山の一つ白山を有し、白山から日本海までを繋ぐ手取川は、加賀平野の中央部に広大な手取川扇状地をつくり、豊富な自然と美しい景観に恵まれている。山間部は積雪量が多いことから特別豪雪地帯に指定されていて、市内でも自然環境等の違いがあることから、地域ごとに独特の伝統文化や生活様式が色濃く残されている。市内の市立小中学校は、小学校19校、中学校9校で、合計28校が設置されており、うち1校は小中学校併設校となっている。中学校の規模も様々で生徒数が30数名の小規模校から800名を超える大規模校までである。

本校は、創立42年目の日本海の海岸側を校区に含む平野部の田園地域の中に位置し、学級数19学級、全校生徒603名の中規模校である。

III 研究の概要

本校生徒は、全体的には明るく素直で、落ち着いた学校生活を送っている。学校行事や部活動においても積極的に取り組む姿勢が多く見られる。全体として規範意識も高く、学習規律等も整っていて集団の一員としての自覚と責任についてもほとんどの生徒が身につけてきていると思われる。しかしその反面、一部の生徒の中には自分の感情や行動をコントロールできずに他の生徒とトラブルになることもまだまだあり、互いによさを認め、望ましい人間関係を形成していくなど協調性を育成する取組には工夫や改善が必要と思われる。

そこで、これまでの取組における生徒指導の集団指導の部分を振り返り、社会性や協調性を育むための活動となっているのか在り方について研証してみる。

集団指導における教育的意義

- ①社会の一員としての自覚と責任を育成することができる。
- ②一人一人の生徒が所属する集団内で、互いに尊重し、よさを認め合えるような、望ましい人間関係を形成し、共に生きていく態度を育むなど、他者との協調性を育成することができる。
- ③集団における共通の目標を設定し、その目標を達成するために一人一人の生徒がそれぞれの役

割や分担を通して、自分たちの力で日々起こる様々な問題や課題解決に向けた取組を行うことで集団の目標達成に貢献する態度を育成することができる。 生徒指導提要より

IV 具体的な取組

1 『徒歩通学時クリーン作戦』

- (1) 〈活動のねらい・めあて〉登校時に通学路を清掃することで、地域を大切にする心を育む。
- (2) 〈活動日時〉4月9日（金）登校時 ～8:05
- (3) 〈活動内容〉①家にあるレジ袋を使い、登校中に落ちているゴミを拾う。②生徒玄関前に分別用のゴミ箱に、分類して捨てる。③分類は、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミ（ペットボトル）、資源ゴミ（びん）、資源ゴミ（缶）の5種類。④ゴミを拾うときは、無理して汚れたものや大きなものなどは拾わず、取れるゴミだけを集める。⑤4/9（金）の朝読書の時間に感想を書き振り返りを行う。



2 『あいさつ+α運動』

- (1)今年度生徒会目標である『伝統+α ～今の自分より一歩前進～』に基づき、北星中の伝統である「さわやかなあいさつ」を3つの視点（自分から、目線を上げる、会釈する）から向上させる。
- (2)5月10日（月）に執行部で実施後、各学年H代表、委員長などで割り振り、5月の月・金で実施。
- (3)執行部が挨拶を向上させるための3つの視点を盛り込んだ曲を作成し、全校生徒に聞いてもらう。その視点を意識してこれまでの自分のあいさつから一歩向上させる。あいさつ運動当日に執行部は玄関に立ちあいさつを行う。28日の朝読書の時間に振り返りを行い、放送で生徒会より講評を行う。



3 『徳光海岸ボランティア清掃』

- (1) 地域の海岸清掃をすることで、郷土愛を高める。
- (2) 6月24日(木) 少雨決行
- (3) ①5～6人で1班となり、ゴミ拾いを行う。ゴミ袋は学校で準備して、現地で配布する。②軍手をし、けがのないように注意させる。ゴミは可燃物と不燃物に大別すること③清掃担当区域は現地で指示を出す。③集めたゴミは徳光海岸の入口横トイレ付近で回収する。



・海岸ボランティア清掃後の学校便り（令和三年七月・平成二六年七月）

北星の風

白山市立北星中学校
 学校だより
 7月号
 令和3年7月1日

<7月 校長より>

先日行われた徳光海岸ボランティア清掃、今年で13年目を迎える本校のこの良き伝統行事を、生徒会を中心に今年度も継続ができてたいへんうれしく思います。短い時間の清掃活動ではありましたが、多くのゴミを回収することができ海岸がとてきれいなことにも感動しました。是非、来年度以降もこの伝統を引き継いで地元の海岸をいつまでもきれいで、**鳥たちにとっても住みよい状態**で守り続けてほしいと思います。「みなさん暑い中でしたがお疲れ様でした。」

また、6月に加賀地区大会や各種コンクールが開催されました。3年生においては、県大会に勝ち進んだ人もいれば、この大会で引退する人もいます。引退する人は、部活動で得たものを今後の学校生活に生かして欲しいと思います。

《豆知識》

チドリ目カモメ科 「コアジサシ」
 全長：24cm
 分布：東北地方以南
 季節：夏鳥 渡り鳥の一種
 生態：砂浜、埋立地、中州などの砂地に浅くほみをくり産卵しコロニーで繁殖する。秋には越冬地のニューギニアやオーストラリアに渡る。
 (引用「GAKKEN 日本の野鳥」より)

北星の風

白山市立北星中学校
 学校便り7月号
 平成26年7月7日

<学校長より>

「ボランティアの心」

“輝いた”ひと時でした。

これまでの積み上げを冠する「やり切る月」6月。その最終日。6限までの授業を終えた生徒たちは生徒会役員の誘導の下、徳光・相川海岸に集合しました。海岸一帯は、白山手取川ジオパークに指定されています。新聞紙上でも紹介されたように、テスト前の自主参加行事にもかかわらず423名の参加を得て、北星中学校「ボランティア海岸清掃」が実施されました。

5年前、この行事が始まりました。参加者は年を追って100人、300人、300人、350人そして今年の423人と増えていきました。北星中の良いところ、「行事が盛り上がる」という伝統のひとつになっています。

午後4時50分。梅雨にもかかわらず絶好の晴天の下、北西の日本海に傾いた陽を受けて、ゴミのなくなった海岸も生徒たちも“輝いた”ひと時でした。

学校正面の石碑にある「香雲の志」とは、一般には「立身出世して高い地位につこうとする志」をさしますが、「行いを清くしようとする心」もさすそうです。北星中学校で育ったボランティアの心はその両者にとって大切な礎となるでしょう。

【初代校長 窪田長一先生書】

4 『ヒラメの稚魚放流』

- (1) 稚魚放流を行うことで自然愛護の精神を培う。
- (2) 7月24日(土)
- (3) 県漁協松任出張所のご指導の下、スロープを使用し稚魚放流を行う。



5 『フードバンク北星』

(1)R3 スローガン「食のバトン～明日のだれかの命のために～」。ボランティア活動を通して生徒たちの社会福祉、社会参画についての関心を高める。また、「食品ロス」や「貧困」等の社会問題に目を向け、消費者としての態度を育成する。そして、幅広い視点で社会の構図を捉え、共助の精神を培う。

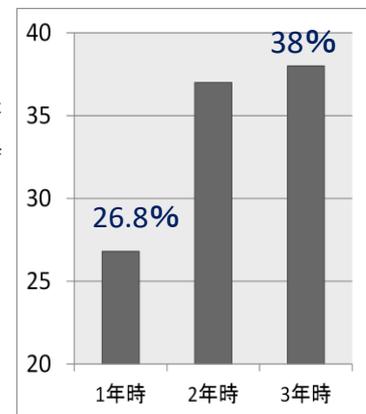
(2)7月7日(水)～7月13日(火)

(3)常温で保存可能で未開封、賞味期限が1か月以上あるもの今回は8月14日以降の食品を集める。自家製のお米は袋などに入れて持ってくる。その後、食品の集計、ラベル貼りをを行いいしかわフードバンクネットに送る。



V 成果と課題

学校評価での学校教育活動についてのアンケート結果からは令和2年度卒業生の推移を見てみると、評価項目「生徒会・委員会活動に進んで取り組んでいる」について1年時A評価33.6%が3年時には35.3%と1.7ポイントの上昇が見られ、評価項目「学校や学年の行事に関心をもち、進んで取り組んでいる」については1年時44.2%、3年時49.5%と5.3ポイントの上昇が見られた。評価項目「学級や校舎内外の美化に努めている」については1年時26.8%、2年時37.0%、3年時38.0%と3年間で11.2ポイントの上昇が見られた。アンケート結果を見ても、生徒会を中心としたボランティア活動など豊かな体験を通して環境美化に対する意識やボランティア活動への参加意識が確実に伸びてきている。それにともない他の人々や地域のために活動するといった社会性も身につけてきて取組の成果が見られるといえるだろう。



評価項目「学級や校舎内外の美化に努めている」

今後は、ボランティア活動や学校行事などの取組に合わせて各授業においても生徒一人一人が自己の存在を実感できる場を設定したり、互いの身になって考え、相手のよさを見つけようとする態度を養ったり、自己決定の場を多くつくったりするなど生徒指導の三機能を生かし授業の中においても互いに協力し合えるような望ましい人間関係づくりを意図的に行い、協調性も身につけさせるよう授業での生徒指導の充実を図りたいと考える。

VI おわりに

昨年度、これまでの本校の美化活動がたたえられ、環境美化教育優良校等表彰事業において環境大臣より最優秀校の表彰を受けた。以下、受賞に至るまでの経緯を記す。

本校の近くには、白波が寄せる砂浜が続く徳光・相川（そうご）海岸が広がっている。バーベキューや海水浴が楽しめる海浜公園として、市内外から多くの観光客が訪れる人気のスポットだが、広範囲にわたり漂着ごみが見られる。幼少期から親しんできた浜辺が汚染されて

いく光景を目の当たりにした生徒は、美化委員会を中心に海岸清掃を 2004 年に企画。ボランティア参加を呼びかけたところ、約 80 人が集まって清掃を実施した。その翌年からは、生徒会執行部が引き継いで活動を開始。年々参加者は増えていき、ほとんどの生徒が参加するまでに成長したため、2019 年からは全校で実施するようになった。総合的な学習の時間を使って漂着ごみを回収した後、感想や記録を残し、次回の取り組みに生かしている。



- ・今日、初めて今の海岸の現状と向き合ってみて、海岸（海）がどれだけ汚されているかを実感することができました。拾ったゴミの中に日付が書いてある物もあって、その日付が最近の物で少し悲しくなりました。
- ・遊んで拾ったりしている人が全くいなかったの、みんなの「この海をきれいにしたい」という思いが見えてきました。
- ・最近たくさんのプラスチックが海に流れているというニュースをよく聞くので、その現実を実際に見ることができ、「今まで聞き流していた ニュースは重大なことだったのだな」と思うことができました。

生徒の振り返りより

その海岸清掃をしている相川海岸では毎年 7 月下旬、ヒラメの稚魚放流も行っている。「海洋環境の保全」のために県漁業組合が長年活動している取組だが、人手不足などの理由から同校に協力依頼したのがきっかけで、20 年以上にわたり共同で開催している。石川県漁業組合美川松任出張所の方からは、「生徒さんたちがこの海岸清掃をしてくれることで、我々も安心して船を出すことができ非常に助かっています。ヒラメが大きく育つ環境になればうれしい」と感謝を寄せる。

同校では、「挨拶」、「学校行事」とともに、「清掃」に力を入れる 3 つの伝統が受け継がれてきた。校内清掃で培ってきた美化意識は、徐々に校外にも向けられるようになり、ポイ捨てごみを回収しながら通学する「通学路クリーン活動」も始めた。同時に、市が主催する「白山市クリーン作戦」にも進んで参加している。こうした多岐にわたる取り組みを通じ、地域環境をよりよくするために令和 2 年度には、SDGs を見据え、その達成のための提言をまとめ、市へ提出。日本ジオパークに認定された地域に住む一住民としての誇りを胸に、生徒たちのひたむきな挑戦が続けられてきた。

みんなで受け継ごう

北星中学校のいいところ

さわやかな
あいさつ

校舎が
きれい

行事が盛り上がる

「令和2年度 白山市への提言書」

〈環境全般〉

- ・全ての生物が暮らしやすい街をつくろう。人間だけではなく、全ての生物が暮らしやすい環境にするために、路上のゴミを拾ったり、植物を大切にしたり、車の利用を減らして、二酸化炭素の排出を抑えたりして、白山市をきれいにしてほしい。

〈リサイクル〉

- ・今、私たちは食品や衣類などのものを大量に消費し、廃棄して地球にとっても大きな負担をかけたり、自然環境を破壊したりしています。これらの問題を解決するために、ものを買うときには、あらかじめ買うものやその量を決めて買いすぎないこと、リサイクル再利用を徹底すること、作る側は予約制などにして作る量を決めておく、大量生産はしないということを心がけることを提言する。

〈フードロス〉

- ・できるだけ食料を余らせないように工夫する。作る方も使う方も責任があることを自覚すべき。

〈ボランティア〉

- ・地域のクリーン作戦などのボランティア活動に1年に一回は参加しよう。

〈自然環境の保護〉

- ・白山市は、海や山などの自然に恵まれ、自然によって生活が助けられています。しかし、それを使いすぎてしまわず「持続可能な社会」を目指して一人一人が工夫して行動しよう。

〈動植物の保護〉

- ・ツバメなどの動物たちが毎年安心して巣作りに来られるような場所を保護しよりよくしていくべきだと思う。
- ・植物を増やし、二酸化炭素を減らそう。

一部抜粋

「深一学で身につける生きる力の育成」

～異年齢集団活動による探求力・問題解決力の育成～

東京都江東区立深川第一中学校
校 長 佐川 明夫
ESD 担当 謝敷 治彦

1 はじめに

本校は、ユネスコスクールとして ESD 及び SDGs の学習に取り組んでいる。特に「深一学」（総合的な学習の時間）を通して活動が行われており、各教科においても ESD、SDGs に関連する授業に取り組んでいる。

「深一学」については、平成 26・27 年度江東区教育委員会研究協力校として「総合的な学習の時間」を活用して、「生きる力」の育成を目標とした研究発表が行われ、発表後も『総合的な学習の時間』で身につける『生きる力』の育成～異年齢集団活動による探求力・問題解決力の育成～を研究主題として設定し現在も継続した活動が行われている。



本活動では、生徒が現在のグローバル社会（「知識基盤社会」及び「共生社会」）で生きるために役立つように、インクルーシブ教育の考え方を基に、各教科・領域を学ぶための基礎的・基本的な学力・技能・意欲を身につけさせようと取り組んでいる。「生きる力」を「6つの能力・態度」に分類し、またその「6つの能力・態度」を育てるためのスキルを「6つのスキル」とし、それらを習得する時間を設けている。また、各教科・領域で基礎的な知識や技能を身につけて、それらを活用・分析し発表する時間を設けることにより、生徒の学習意欲が高まるのではないかと考え「総合的な学習の時間」の活用と充実を図っている。

本誌上発表では、昨年度の活動結果をもとに「深一学」の紹介、「深一学」における ESD と SDGs の関連、そして「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」という面から環境問題に取り組んだ活動内容を取り上げ、「深一学」全体の成果と課題を紹介し報告とする。

2 「深一学」の実践的な流れについて

「深一学」では、生徒がグループを組み課題（テーマ）を見つけ、グループと個人の計画に従って探究し、自分なりの解決を図っていく問題解決型の学習に取り組んでいる。学習の具体的な流れとしては、(1) グループの決定、(2) テーマ決定と情報収集、(3) 情報の整理・分析、(4) 中間報告 (5) まとめ・発表、の順に学習が行われている。「深一学」は、総合的な学習の時間に行われており年間 20 時間を設け取り組んでいる。昨年度は、新型コロナウイルスの影響のため当初計画されていた授業時数 20 時間から 18 時間に変更となった。

(1) グループの決定〔異年齢集団（縦割り）の学習形態〕

「深一学」を開始する前にグループ編制がある。「深一学」は、全校生徒が対象で異年齢集団（3年生から1年生の混成グループ：縦割り）を作り学習を行うことが特徴の1つである。1グループにつき約4～5名の生徒で構成され、1名の教員が3グループをサポートする体制で取り組んでいる。

年度始めに「深一学」のオリエンテーションを行い、その後、生徒に興味関心のある「5つの領域」①

(4) 中間報告

例年、「深一学」がスタートして8回目を終えたあたりで中間報告を行っている。前年度は、新型コロナの影響により始業式が6月となり「深一学」の予定時間数のカットや調整を余儀なくされ中間報告を実施することができなかった。(本年度は、中間報告を実施することができた。)

中間報告は、各教員が受けもつ3グループ内で行い、各グループの進行状況を報告する時間に設定されている。発表内容の再確認と見直し、今後の計画を立てるための機会として行っており、今の状況を伝えること、そして今後の展開などを報告し、その様子を動画で撮影し記録している。また、中間報告は、本番の発表と同じような流れで行い、発表と質疑応答を含め10分間で行っている。発表は、模造紙やパワーポイントで作成途中の報告を行い、発表後は見学していた他のグループが「中間報告チェックシート」に発表についての評価(コメント)を記入し提出する流れになっている。撮影した動画は、校長先生にも見てもらい、グループごとにアドバイスやコメントをして校長先生の評価と各グループ(1人1人)からの評価、そして撮影した動画を見ながら各グループそれぞれの発表の修正や追加を行い発表へ向けて学習に取り組んだ。

(5) まとめ・発表に係わる学習

まとめ発表に係わる学習では、パワーポイントや模造紙にまとめる活動を行った。情報のまとめ方や見やすさ、レイアウト、発表の役割分担をグループで話し合い、責任と協力する態度をもってまとめに取り組めるよう指導を行った。

発表は、学習発表会として11月の最終週から3週に渡り隔週水曜日の5時間目に、14グループずつ発表する時間を確保して行った。発表場所は、7教室を使用し1教室につき2グループの発表を行った。例年生徒は、それぞれが興味のあるグループの発表を自由に見学していたが、昨年度はコロナ対策のため1教室4グループを固定しての見学となった。見学前には、グループ単位で見学したい発表の希望アンケートを行い、できるかぎり希望に添えるようにグループ配置を行った。

発表へ向けての指導内容は、発表前のリーダー研修、発表の役割ごとの内容確認とアドバイス、発表のリハーサルなどがある。発表の最後には、他のグループとの意見交換や質疑応答が活発になるように補助すること、発表グループを見学しての評価シートの記入方法などである。

3 「6つの能力・態度」と「6つのスキル」の育成について

「深一学」は、「6つの能力・態度」(①コミュニケーションを行う力、②進んで協力する態度、③多面的総合的に考える力、④批判的に考える力、⑤未来を予測し、計画を立てる力、⑥他者と協力し早朝する態度)の育成を目標として活動が行われている。

ユネスコスクールが提唱する「育てたい7つの力」を、本校では「6つの能力・態度」とし、それらを「生きる力」とらえこれらの6つの能力・態度を育成に取り組んでいる。さらに、探究的な学習・協同的な学習の成果を引き出すための「6つのスキル」(①コミュニケーションスキル、②情報収集スキル、③比較スキル、④仮説スキル、⑤類推スキル、⑥分類スキル)を設定し、「深一学」や各教科の授業など様々な場面において、教員が6つのスキルの使用指導を行い、育てたい6つの能力・態度の育成を図っている。また「6つの能力・態度」と「6つのスキル」とはこういったことなのかを表にして、校内の掲示板や各教室に掲示し確認できるようにしてある。さらに、学校便りや学級通信、ホームページ、保幼小中連携教育の日など積極的に公の場へ発信し「深一学」及び「6つの能力・態度」と「6つのスキル」の育成について周知を図っている。

「6つの能力・態度」

「6つのスキル」

<p>コミュニケーションを行く力</p> <p>学習の中で自分の意見をまとめ積極的に発表できる力を身につけよう！また、他者の意見や考えを受け止め尊重し、自分の考えを表現させてください。</p>	<p>進んで参加する態度</p> <p>「嫌だな」「やりたくない」…消極的な姿勢からは、新たなものは生まれません。チャレンジする気持ちを大切に、積極的に学習・課題解決に取り組もう！</p>	<p>多面的・総合的に考える力</p> <p>様々な視点から物事を考えよう。身の回りのこと、各教科で学習したこと…いろいろなことに興味・関心をもって考えと新たな発見が！？頭を柔らかく柔軟に！</p>	<p>コミュニケーションスキル</p> <p>学習の中で自分の意見をまとめ積極的に発表できる力を身につけよう！また、他者の意見や考えを受け止め尊重し、自分の考えを表現させよう。</p>	<p>情報収集スキル</p> <p>学習内容に必要な情報をホームページや図書館、地域の方、関係する機関などから集める力を培いましょう。また友達と情報を共有し、知識を深めよう。</p>	<p>仮説スキル</p> <p>「もし、…だったら、～だろう。」という仮説をたてて探究学習を進めよう。考える習慣を身につけよう！新しい疑問や発見が生まれるかもしれません。</p>
<p>批判的に考える力</p> <p>調べたことや情報、他者の意見などから疑問や問題点をみつめよう。すべての情報が正しい(必要)かどうかは分からない！アよく考えて判断できる力をつけよう。</p>	<p>未来を予測して計画を立てる力</p> <p>学習のつながりを活かして、未来の社会に自分がどう関わればよいか？課題を解決するために計画を立てる力を身につけよう。</p>	<p>他者と協力し尊重する態度</p> <p>先輩・後輩・同級生・先生・家族・地域の方…他者と進んで話し合い、お互いを尊重しながら共同学習・探究を進めていこう！新たな考えや考え方を取り入れよう。</p>	<p>比較スキル</p> <p>学習を進める中で、様々な事柄を比べてみましょう！似ている点と異なる点を比べて、相違点を突き出そう。比較することで探究学習が進みます。</p>	<p>類推スキル</p> <p>収集した情報やもっている知識の中から類似している点を見つけ、他のことに当てはめてみよう。類推したことを予想したり仮説をたてたりすることに役立てよう。</p>	<p>分類スキル</p> <p>調べた内容を種類、性質、系統にグループ分けしてみよう。同類のものをもっと区分けて情報を整理しよう。分類、比較、類推をくり返し課題解決を目指そう。</p>

4 主体的に学習に取り組む態度の育成について

「深一学」は、グループ活動と個人活動、両方の要素が含まれている。個人活動の学習部分で主体的に学習に取り組む態度の育成を目標に取り組んだ。

グループ分けとテーマ決定後は、リーダーを中心にグループで発表に向けて役割分担が行われる。生徒1人1人の毎時間の活動を分けると、大きく①情報共有、②情報収集、③資料作成、④自己評価となる。生徒は、自分のやることを把握するため、グループメンバーに聞いたり確認したりと話し合いをもたなければならない状況となり、責任感をもって自分が調べる内容、資料のまとめ方、発表内容の構成の把握、グループへ進行状況の報告などを自分なりに工夫したり、先輩を見習って学習に参加する様子が見られた。



一方、教師は①から④のサイクルの一つ一つの中でどのように関われば、主体的に学習に取り組む態度が育成できるかを考え、それぞれの場面で表の様なサポート中心に行い学習を進めた。

一方、教師は①から④のサイクルの一つ一つの中でどのように関われば、主体的に学習に取り組む態度が育成できるかを考え、それぞれの場面で表の様なサポート中心に行い学習を進めた。

5 「深一学」とESDおよびSDGsとの関連

本校では、各教科でESDカレンダーを作成し「深一学」に生かせる学習と指導に取り組んでいる。「ユネスコスクール」の4つの基本分野(①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育)に関わる内容について、各学年と教科ごとのESDカレンダーを作成し学習を継続して行っている。平成30年度からは、SDGsに関する学習を開始し「深一学」のテーマ選択の素材として「17の目標と169ターゲット」の活用を試みている。各グループのテーマがSDGsのどの項目にあ

教科	1年	2年	3年	C組
国語	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
社会	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
理科	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
英語	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
音楽	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
美術	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
体育	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
技術	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
家庭	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組
生徒会	1年 2年 3年 C組	2年 3年 C組	3年 C組	3年 C組

ではまるかを確認して一覧表にしてSDGsの「17の目標と169ターゲット」の意識付けを行っている。
 また、全体のテーマとしては、SDGsの「17の目標と169ターゲット」当てはまる事柄や日常を通して感じている個人的な疑問や興味関心に基づくテーマ、またSDGsの「17の目標と169ターゲット」には当てはまらない問題テーマなど幅広く様々で、当てはまらないテーマ、例えば「宇宙ゴミを減らすためにはどうすれば良いか」などは、「深一学」オリジナルのカテゴリーとして取り扱い18番目の解決目標として学習を進めた。

資料2-1 江東区立深川第一中学校 令和2年度 総合的な学習の時間：「深一学」における領域別年間指導内容（深一学・ESDカレンダー）

項目	実施時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	履修可能な目標17の目標(SDGs)		
国際理解	1	16年中学	16年中学													
	2	16年中学	16年中学													
	3	16年中学	16年中学													
	4	16年中学	16年中学													
	5	16年中学	16年中学													
	6	16年中学	16年中学													
	7	16年中学	16年中学													
	8	16年中学	16年中学													
	9	16年中学	16年中学													
	10	16年中学	16年中学													
	11	16年中学	16年中学													
	12	16年中学	16年中学													
自然・エネルギー	13	16年中学	16年中学													
	14	16年中学	16年中学													
	15	16年中学	16年中学													
	16	16年中学	16年中学													
	17	16年中学	16年中学													
	18	16年中学	16年中学													
	19	16年中学	16年中学													
	20	16年中学	16年中学													
	21	16年中学	16年中学													
	22	16年中学	16年中学													
	23	16年中学	16年中学													
	24	16年中学	16年中学													
文化・生活	25	16年中学	16年中学													
	26	16年中学	16年中学													
	27	16年中学	16年中学													
	28	16年中学	16年中学													
	29	16年中学	16年中学													
	30	16年中学	16年中学													
	31	16年中学	16年中学													
	32	16年中学	16年中学													
	33	16年中学	16年中学													
	34	16年中学	16年中学													
	35	16年中学	16年中学													
	36	16年中学	16年中学													
こころ・健康	37	16年中学	16年中学													
	38	16年中学	16年中学													
	39	16年中学	16年中学													
	40	16年中学	16年中学													
	41	16年中学	16年中学													
	42	16年中学	16年中学													
	社会・地域	43	16年中学	16年中学	16年中学											
		44	16年中学	16年中学	16年中学											
		45	16年中学	16年中学	16年中学											
		46	16年中学	16年中学	16年中学											
		47	16年中学	16年中学	16年中学											
		48	16年中学	16年中学	16年中学											
49		16年中学	16年中学													
50		16年中学	16年中学													
51		16年中学	16年中学													
52		16年中学	16年中学													
53		16年中学	16年中学													
54		16年中学	16年中学													

6 具体的な実践

グループの発表内容事例

社会・地域 / SDGs 12.5	12	自然・エネルギー / SDGs 14.1	14	自然・エネルギー / SDGs 12.4	12
世界のゴミ問題の現状と自分たちができる事		海洋ゴミをなくすためにはどうすればよいか		宇宙ゴミをなくすためにはどうすればよいか	
3年：1名、2年：2名、1年：2名（計5名）		3年：2名、2年：1名、1年：1名（計4名）		3年：2名、2年：1名、1年：1名（計5名）	
1. 各国の一般廃棄物処理状況（ゴミの排出1位：アメリカ） グラフデータ（リサイクル、堆肥化、焼却、埋め立て、その他） 2. 世界の廃棄物量の推移（将来2010～2050） グラフデータ（6大陸別：アジア1位） 3. ゴミ処理の状況について（4段階に分けられている） 4. デンマークとルーマニアのゴミ処理の違いについて。 ・デンマークは排出が多いが、分別の徹底がなされている。 ・ルーマニアは排出は少ないが、分別がされていない。 5. アメリカのゴミ処理事情（罰則やROTについて） 6. スウェーデンのゴミ処理事情 （ゴミ収集のシステム化とバイオガス燃料） 7. 日本のゴミ処理事情（3Rについて、再利用など） 8. まとめ ・世界中でゴミ問題がある。 ・その国で必要な対策が行われている。 ・日本では、3Rが広く知れ渡っている。 ○さらに知ってもらえるためにはできることは？ ・啓発ポスターやCMなどで、いろいろな人に知ってもらえば、考えが広まり1人1人が意識できると思う。 「自分たちができること」 ・家族や身近な人に教えて、そこから少しずつ広めることができるのではない。		仮説：プラスチックに変わる水に溶けやすいものを使えば ゴミ問題は無くなるのではない。 1. 海にあるゴミの量（7千万トン～3万5千トン） ・2050年の海は、800万トンの海洋ゴミがあると推定。 2. プラスチックゴミが多い国 ・1位：中国、2位インドネシア、3位フィリピン ・日本の順位（クイズ）：30位 3. 海洋ゴミについて ・種類：プラ、ビニール、布、缶、植物、ロープ網など ・場所：ゴミの場所の種類（クイズ）：3カ所 ①漂流ゴミ：プラスチック類が多い ②漂着ゴミ：木、草、瓶などが多い ③海底ゴミ：発泡スチロール、プラスチック、ビニール、ガラス、金属などが多い 4. 陸上から海洋に流出したプラスチックゴミ発生量 ・上位4位までアジアの国 5. 日本からの廃プラスチック輸出量の推移 ・中国への輸出に大きく依存している。 6. プラスチックの代わりとなる新素材（動画） ・ソルバックとハイセロンの紹介（マイクロチップ問題） 7. まとめ 脱ゴミ袋。エコバックや水筒の使用を推進する。		宇宙についてのクイズ （宇宙の匂い、ブラックホールについて、天の川について） 1. 宇宙ゴミについて ・宇宙ゴミとは（ロケットや衛星の一部が残ってしまったもの） 仮説：宇宙ゴミは、除去するための装置を開発しないと減らすことはできない。 2. 地球周囲軌道で確認されている衛星や宇宙ゴミ（デブリ） ・20000個(ロケットや破片、工具、衛星、衛星の破片) 3. 宇宙ゴミの元①人工衛星 ・8,000基打ち上げ、現在機能している衛星1,400基ほど 4. 宇宙ゴミの元②ロケット ・2段、3段、4段が宇宙ゴミとして残ってしまう。 5. ゴミのでき方 宇宙ゴミ同士が衝突してできた破片が宇宙を回っている。 6. 処理方法（導電ベアテザー）と（レーザー搭載衛星） ・デブリの軌道を変え、安全に体験に再突入させる。 落ちてくるのを待っているだけではなく、積極的に動かなくなった衛星やロケットを地球に落とす必要がある。 7. まとめ ・宇宙ゴミに関するみんなの興味や理解を深める必要がある。 ・宇宙ゴミを除去するための衛星などの開発を試みている機関をもっと増やすことが必要。	
PowerPoint		PowerPoint		PowerPoint、画用紙（クイズ用パネル）	

7 学習の評価について

(1) 「振り返りシート」(自己評価)

振り返りシートは、毎回学習の最後に記入し自己評価を行うシートで、「6つの能力・態度」、「6つのスキル」の使用の意識付けのために行っている。取り組んだ時間で生徒は、毎時間の学習の進み具合をパーセントでグラフに書いて状況把握を行い、教師は取り組んだことや話し合いの内容、今後の課題をシートに記入するよう指導し、次の活動がスムーズに取り組めるようアドバイスやコメントを添えて指導を行った。

(2) 「中間報告チェックシート」(評価用紙・生徒間)

中間報告では、発表グループの報告を見た後、その発表を見た2グループの生徒が、報告の感想や評価を「中間報告チェックシート」(評価用紙)を使って生徒間で評価を行った。

評価用紙の項目は、「6つの能力・態度」のうち、どの能力が身に付いているか、「6つのスキル」のうち、どのスキルを使っていたか、また発表の内容〔①発表の流れ(起承転結)②声の大きさ(全員に伝わるか)③話すスピード④内容(分かりやすいか、難しくないか)④発表態度(伝えようとする意欲はあるか)〕、そして感想となっている。

中間報告後は、グループ内で他のグループの生徒が記入したチェックシートを確認して、それぞれの発表の修正や追加を行い発表へ向けて学習に取り組んだ。

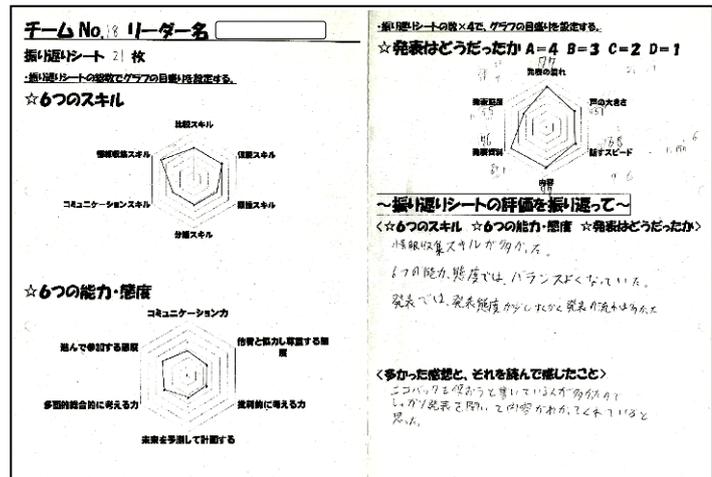
教師は、生徒が記入したチェックシートを評価の参考とし、発表に対する興味関心の把握や今後の取り組み方の指導等を行った。

(3) 「学習発表会振り返りシート」(評価用紙・生徒間)

学習発表会の振り返りシートは、発表を見たグループの生徒が発表グループの評価を行うシートとなっている。記入後は、発表グループにシートが渡り、その評価を元にグループ内で確認しさらにグループ内評価を行った。シートの内容は、中間報告の内容と同様で追加項目として、質疑応答用メモと感想を加えた内容となっている。質疑応答用メモと感想を追加することにより、発表後の質疑応答に活気が出る、また発表の良い点、改善点など具体的に知ることができグループ、そして個人に対して成長につながる評価を得られることができた。

(4) グループ内評価

グループ内評価では、発表後に集まった18枚から22枚の「学習発表会振り返りシート」を集計しレーダーチャートにして視覚的に分かりやすくまとめる活動を行った。集計は、シート枚数にもよるが、「6つのスキル」、「6つの能力態度」の各項目に付けられたそれぞれの○の数、そして「発表内容」の各項目についているAからDの数の集計を行った。その集計結果を基に、類推スキルが低かった、批判的に考える力を上げるためにはどうすれば良いかなど、グループ内でいくつか議論が起こり解決を図る話し合いが見られた。その話し合いの結果を「振り返りシートの評価を振り返って」の項目に書き、グループごとに発表し共有することができた。



(5) 「一年間の学習を終えて」(自己評価)

「深一学」の最終日には、自己評価のアンケートを実施した。アンケート内容は、「6つのスキル」をどれだけ活用できたか、「6つの能力・態度」がどの程度身についたと思うか、また特にどの能力・態度が身に付いたかなどである。また「深一学」の感想、1年生2年生に向けて来年度どのような探求学習をしたいか、などもアンケートに含まれている。

この自己評価は、最終的に全生徒のアンケートを各項目に分けて集計しグラフにして、どの部分で成果があったのか、どの部分で課題があるのか、今後の学習に生かせる様に取り組んだ。

「1年生2年生に向けて来年度どのような探求学習をしたいか」という項目には、主に「5つの領域」を書く生徒が多かった。多く見られた領域は、自然・エネルギーの領域と文化・生活だった。実際本年度、5領域の中で最もグループ数が多い領域は、この2領域で42グループ中15グループが自然・エネルギー領域で、文化・生活領域は12グループとなっている。

アンケートの中には、いじめ問題、自殺、音楽、スポーツ、宇宙など幅広いテーマが上がっておりSDGs以外にも取り組んで見たいといったことが分かった。

また、自己評価のアンケートの感想には、学年の立場で感想を書く生徒が多く1年生では、初めての「深一学」だったけど先輩がサポートしてくれたことや良かった点や改善点を書く生徒が多かった。2年生では、サブリーダーとして3年生のリーダーをサポートできるように頑張ったことやパワーポイントのまとめ方、発表の工夫について感想を書く生徒が多く見られた。3年生は、リーダーとしてグループをまとめる、指示を出す大変さや発表内容のまとめ方、スケジュール調整、原稿の執筆など多くの悩みがあり大変だったといった意見が多く、また最後に発表できて良かったといった達成感を感じ

想として書く生徒がほとんどだった。その他には、自分が作ったパワーポイントが褒められて嬉しかった、先輩に褒められて嬉しかったなど具体的な点で喜びを実感できた生徒も見られた。

8 「生きる力」(6つの能力・態度と6つの活用スキル) 習得に関するアンケート結果

①今年度の「深一学」で、6つのスキルを活用できましたか。

①の項目では、活用できたとの答えが多く、十分に活用できたと答えた生徒と合わせると、全体の91%となりスキルの活用ができたと感じる生徒が多かった。

②特にどのスキルをよく使いましたか。

使用したスキルの項目で一番多かったのは、情報収集スキルで、次にコミュニケーションスキルだった。最も少なかったのは、類推スキルで生徒にとって「類推」の意味がよく理解できておらずさらに類推し、検証してみるといった一連の流れが身に付いていないこと、また限られた時間の中で検証することが困難、あるいはテーマによって類推することが難しいといった点が上げられることから、数字が低かったと思われる。

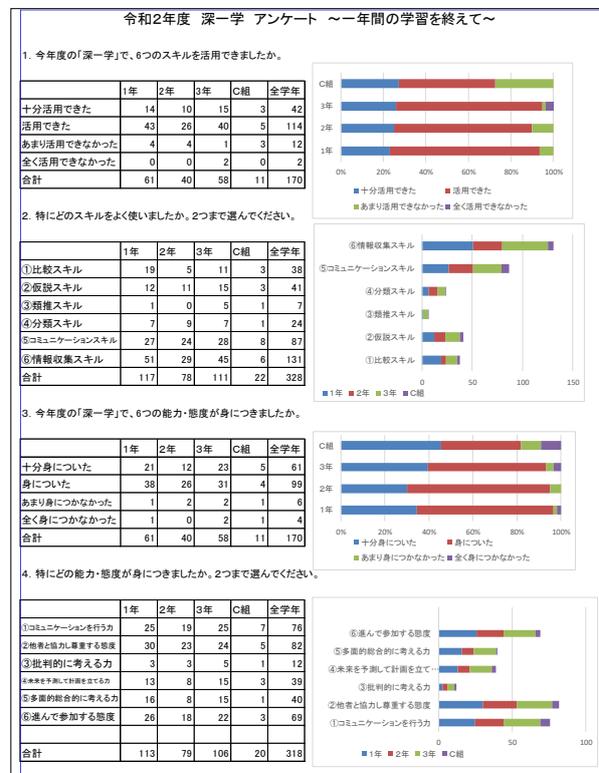
③今年度の「深一学」で、6つの能力・態度が身に付きましたか。

身に付いたと答えた生徒が最も多く、十分に身についたと答えた生徒と合わせると全体の94%となり6つの能力・態度が身についたと感じる生徒が多かった。

④特にどの能力・態度が身に付きましたか。

身についたと感じる能力・態度で1番多かったのが、他者と協力し尊重する態度、2番目にコミュニケーションを行う力、3番目に進んで参加する態度となった。その結果から、割り振られたメンバーでグループを組み、役割分担をして共同制作を進め責任をもって発表を行うといった学習形態において、この3点の能力と態度は必要不可欠であり、学習活動を通して生徒はその重要性を感じた結果だと考えられる。

一方最も少なかったのは、批判的に考える力だった。極端に少ない数字となっており考察としては、批判的に考える力とは、どういった力なのかが生徒にしっかりと伝わっていないことだと考えられる。また、批判的に考える力を使っているが実感していないといった点があるので、数字が低い結果が出たのではないだろうか考える。「6つの能力・態度」の表では、批判的に考える力は「調べたことや情報、他者の意見などから疑問や問題点をみつける。すべての情報が正しい(必要)かどうかは分からない、よく考えて判断できる力をつけよう。」と説明されている。「6つの能力・態度」の表の説明が、生徒に伝わっていないので教員の説明がさらに必要であると考えられる。



9 まとめと今後の取り組み

年々積み重ねて行われている「深一学」の研究を通じ、研究の目標である異年齢集団による探究力・問題解決力を育成する学習を行うことで、教員の支援のもと生徒たちは各教科の枠を超えた教科横断的な学習対象に取り組み、また異年齢集団によって年齢や価値観が違う様々な人間と出会い学習を重ねてきた。何かを探究し、現実と理想のギャップを感じ、仮説を立て、様々な情報を収集し、分析することで生徒たちは、それぞれに変容を遂げていると感じる。



何かを探究し、現実と理想のギャップを感じ、仮説を立て、様々な情報を収集し、分析することで生徒たちは、それぞれに変容を遂げていると感じる。

「深一学」の学習活動全体を通して、「6つのスキル」を意識的に使用するよう指導を行い、生徒がスキルの使用を意識し取り組んだ結果、スキルの認知と使用に対する手応えが見られた。また、6つの「能力・態度」については、他者と協力し尊重する態度やコミュニケーションを行う力は、協同学習において自然と必要となり、「深一学」を通してそれらの能力・態度が身についたという結果が見られた。しかし、スキルの使用と能力の習得については、課題も下記のとおり明らかになった。

① 6つのスキルについての課題

「類推スキル」の意味がよく理解できていない。類推し検証してみるといった一連の流れが身に付いていない。また、限られた時間の中で検証することが困難。あるいはテーマによって類推することが難しいといった点があげられる。

② 6つの能力・態度の課題

「批判的に考える力」という力は、どのような力なのかが生徒のしっかりと伝わっていない。「6つの能力・態度」の表に書かれている説明書きや生徒たちへの伝え方を見直す必要がある。

また、研究研修委員会や校内研修を通して下記の事について課題が挙げられた。

- ①分類・類推の定義が難しい。
- ②スキル・能力の文言の改善。
- ③「提言」「仮説・検証」について、教員の共通認識を徹底し生徒の指導にあたる。
- ④持続可能な社会を目指し、将来へ解決を目指す提言を最終目標として意識しテーマを設定する。
- ⑤発表（中間発表を含む）における、司会進行、聴き方（評価のしかた、質問等）指導をグループで行う。

今後の取り組みとしては、継続して「深一学」にESDを取り入れ活動していく。特に持続可能な開発17の目標(SDGs)を推進し、各教科ではSDGsの浸透を目標に取り組み、「深一学」では、領域(①国際問題、②自然・エネルギー、③文化・生活、④心・健康、⑤社会・地域)とSDGsと結びつけ169のターゲットを多く取り入れられるよう指導する。さらに169のターゲットのどの部分に当てはまるかを確認して学習活動が行えるよう取り組んでいきたい。ESDカレンダーについては、「各教科のESDカレンダー」と「深一学(総合的な学習の時間)のSDGsの項目を取り入れた表」2種類作成していく。来年度は、169のターゲットの内容に記されているグローバルな問題解決に取り組むことは、内容的に難しいため、できる限りチャレンジしていくが、まずはthink globally, act locallyを目指し生徒の身近な問題、興味関心のある問題から取り組みSDGsが生徒に浸透するよう活動を行ってきたい。

研究会沿革史

全国小中学校環境教育研究会
東京都小中学校環境教育研究会

- 昭和39. 9. 10 東京都小中学校公害対策研究会が錦華小学校にて発足
初代会長に 小野 孝雄 就任
11. 13 会報「碧い空」創刊号を発行
12. 11 講演会「公害と児童生徒の健康について」を開催（都PTAと共催）
- 昭和40. 1. 20 会長・副会長で四日市・尼崎方面の公害状況を観察
- 昭和40. 10. 5 公害講演会を開催（都PTAと共催）、空気清浄器を都内50校へ配布
12. 1 都内児童生徒の公害に関する作文・詩募集
- 昭和41. 10. 1 全国主要都市の中学1年生を対象に公害意識調査実施
- 昭和42. 1. 20 都内小学校・中学校を対象に教育環境調査を実施、2月に結果を発表
2. 13 全国小中学校公害対策研究会を発足（東京都港区立桜田小学校）
東京・大阪・四日市・北九州・神奈川・千葉・釜石

-
- 昭和42. 6. 1 第二代会長 伊藤 和 就任
11. 1 東京都学校公害対策連絡協議会に協力
- 昭和43. 11. 7 第1回 学校公害研究大会を開催（代々木ゼミナール）
- 昭和44. 4. 10 都の学校に及ぼす公害対策研究会へ協力
10. 10 第2回 学校公害研究大会を開催（東京都港区立桜田小学校）
- 昭和45. 2. 6 第3回 学校公害研究大会を開催（勤労福祉会館）
2. 10 単行本「碧い空を子どもらに」を発行

-
- 昭和45. 4. 1 第三代会長 中島 定吉 就任
4. 15 東京都公害副読本・スライド製作委員会を出し、その製作に協力
- 昭和46. 1. 10 第2回 全国調査実施「東京都及び七大都市の教育環境意識調査」
中学1年・小学校5年生、都内4万名、七大都市8万名
全国小中学校養護教諭対象「公害に関する意識と実態調査」35,000校
1. 28 第4回「親と教師の公害研究大会」開催（勤労福祉会館）
- 昭和46. 10. 14 第5回 学校公害教育研究大会開催（東京都江戸川区立平井南小学校）
11. 10 公害講座開講（朝日新聞社講堂）
- 昭和47. 6. 1 都内の児童生徒対象「公害意識と実態調査」実施
- 昭和48. 2. 20 第6回公害研究大会（東京都品川区立鈴ヶ森中学校）

-
- 昭和48. 4. 1 第四代会長 立石 書信 就任 (中央公害審議会委員兼務)
6. 5 都内の児童生徒の公害意識実態調査「教育環境調査」実施
- 昭和49. 5. 15 環境週間記念、都内の児童生徒の公害に関するポスター、作品募集
7. 20 都内の児童生徒の夏季20日間健康調査実施
- 昭和50. 2. 10 第7回環境教育研究全国大会開催 (日本青年館)
- 昭和50. 5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集
12. 5 第8回環境教育研究会全国大会開催 (東京都台東区立下谷小学校)
- 昭和51. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和51. 4. 20 東京都教育委員会副読本及びスライド編集に協力
5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集
9. 7 東京湾人工渚見学会を実施
- 昭和52. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣
2. 21 第9回環境教育研究会全国大会開催 (東京文化会館)
- 昭和52. 5. 10 東京都環境週間行事に協九一都内児童生徒の図画・作文募集
6. 10 東京都内児童・生徒20,000人に環境意識調査実施
9. 19 「これからの環境教育はどうあるべきか」研究会開催
(日本環境協会と共催)
12. 6 江東清掃工場・東京湾埋立地見学会
- 昭和53. 1. 12 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和53. 5. 10 東京都環境週間行事に協力
10. 31 人工渚・廃棄物埋立地等の東京湾及び宇宙博見学
- 昭和54. 1月～7月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
4月～6月 同上の行事の図画・作文募集に協力
6. 5 環境教育講演会 (東商ホール)
7. 17 公害副読本代表者会議
9. 3 日本環境協会の映画企画の協力
11. 30 都水道施設見学 (利根川水口)
- 昭和55. 2. 13 常任理事会 (朝霞浄水)
2. 19 環境教育の講演と映画会 (労音会館)
2. 21 第11回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
- 昭和55. 8. 21 第12回 全国環境教育研究大会 (滋賀県大津市)
11. 20 人工渚・廃棄物埋立地等東京湾見学会

-
- 昭和56. 4. 1 第五代会長 谷本 寛 就任 (中央公害審議会委員兼務)
4月～6月 東京都環境週間行事に協力
6. 29 環境庁長官室にて本研究会役員と鯨岡長官、環境教育について懇談
11. 20 隅田川・東京湾見学会 (隅田川クラブ後援)
- 昭和57. 1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
2. 5 第13回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
- 昭和57. 4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力
10. 29 全体研究会 (於東京都教育会館 講師 愛知教育大学教授 榊原康男先生)
11. 18 環境教育授業協議会 (東京都杉並区立方南小学校)
- 昭和58. 1. 25 同 上 (東京都江戸川区立上小岩小学校)
2. 18 第14回 全国環境教育研究大会 (東京・関東百貨店健保会館)
会報「碧い空」20号発刊
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
-

- 昭和58. 4. 1 第六代会長 藤田 繁雄 就任 (中央公害審議会委員兼務)
4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力
11. 4 全体研究会 (東京都台東区立下谷小学校)
講師 文部省初等中教育局 教科調査官 奥井智久先生
11. 10 自本科学協会等主催、リモートセンシング研修会に協力
- 昭和59. 1. 20 第15回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
-

- 昭和59. 4. 1 第七代会長 平野 輝和 就任 (中央公害審議会委員兼務)
6. 9 第五代会長 谷本 寛 第2回朝日森林文化賞を受賞
11. 29 環境教育研究授業及び協議会 (東京都渋谷区神宮前小学校)
- 昭和60. 1. 24 第16回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京都江戸川区総合文化センター)
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
-

- 昭和60. 4. 1 第八代会長 遠藤 尚 就任 (中央公害審議会委員兼務)
6. 5 東京都台東区立下谷小学校にて総会
11. 18 千葉県船橋市立船橋小学校環境教育研究大会見学
12. 5 東京都公害監視委員会と意見交換
- 昭和61. 1. 31 第17回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京文化会館)

昭和61. 6. 6 昭和61年度 定期総会（東京都練馬区立光和小学校）
10. 31 現地研修会（東京都八王子市立由木西小学校）
昭和62. 1. 23 第18回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）

昭和62. 4. 1 第九代会長 塩沢 勇 就任（中央公害審議会委員兼務）
6. 4 東京都台東区立大正小学校にて総会
11. 9 現地研修会（東京都文京区立昭和小学校）
昭和63. 1. 29 第19回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）

昭和63. 4. 1 第十代会長 小尾 辰昌 就任（中央公害審議会委員兼務）
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
6. 6 昭和63年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）
9. 17 都内児童の環境意識調査を実施
11. 6 環境教育研究大会第11回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）
11. 22 環境教育研究会 見学会（厚木市・七沢自然教室）
平成元. 1. 27 第20回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
1. 27 会報「碧い空」26号発刊

平成元. 4. 1 第十一代会長 松澤 秀俊 就任（中央公害審議会委員兼務）
6. 6 平成元年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）
9. 5 環境教育研究会 見学会（つくば市公害研究所）
環境教育研究会第12回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）
平成2. 1. 26 第21回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
1. 27 会報「碧い空」27号発刊

平成2. 6. 6 平成2年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）
9. 10 松澤秀俊会長 環境教育推進指導資料作成委員
9. 20 環境教育研究会 見学会（台風のため中止）
11. 30 第15回 全国教育研究大会に参加（国立教育会館 江頭 基子会計）
12. 6 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中央区立銀座中学校）
平成3. 1. 25 第22回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
1. 25 会報「碧い空」28号発刊
環境週間都行事の図画・作文募集審査への参加協力

平成3. 4. 1 第十二代会長 高木 恒治 就任（中央公害審議会委員兼務）
5. 31 平成3年度 定期総会（江東区立東陽小学校）
9. 19 環境教育研究会 見学会（神奈川環境センター）

11. 22 都小中学校環境教育研究発表会（江戸川区立松江小学校）
 平成4. 1. 31 第23回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
 会報「碧い空」29号発刊
 東京都環境実行委員会への参加
 環境教育シンポジウムへの参加
 全国ネットワークの強化活動
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力

-
- 平成4. 5. 29 平成4年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会（東京都渋谷区立本町東小学校）
 第十三代会長 岩本 光雄 就任（中央公害審議会委員兼務）
 7. 29 平成4年度 全国小中学校環境教育研究会定期総会（ホテルマリナーズコート東京）
 7. 29～31 教育総合展参加協力（研究発表・展示・実演）
 12. 8 東京都小中学校環境教育研究発表会（北区立豊島中学校）
 平成5. 1. 11 事務局 江頭基子 文部省環境教育指導資料作成協力（平成6. 3. 31迄）
 1. 29 全国小中学校環境教育研究大会（中央区立教育センター）
 会報「碧い空」30号、研究紀要24号発刊
 3. 31 環境教育研究集録 第3集発刊
 東京都環境週間行事実行委員会への参加協力
 文部省環境教育シンポジウムへの参加
 都教委グループ研究助成費受給
 全国ネットワークの強化活動
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間行事運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
- 平成5. 5. 23 平成5年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会
 （東京都渋谷区立神宮前小学校）
- 平成6. 1. 18 第25回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都庁 第二庁舎・ホール）
 会報「碧い空」31号、研究紀要25号発刊
 全国小中学校環境教育研究会支部長会・総会（東京都庁 第二庁舎・ホール）
 2. 24 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都大田区立西六郷小学校）
 3. 31 環境教育研究集録 第4集発刊
 文部省環境教育シンポジウムへの参加、協力
 全国ネットワークづくりの活動強化（支部結成）
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
- 平成6. 6. 21 平成6年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会
 （東京都渋谷区立神宮前小学校）
- 平成6. 11. 25 第30回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立南葛西第三小学校）
 平成7. 1. 20 第26回 全国小中学校環境教育研究大会
 全国支部長会（東京都江戸東京博物館ホール）

会報「碧い空」32号、研究紀要26号発刊
文部省、第1回全国環境フェアへの参加協力（埼玉県）
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

3. 31 環境教育研究集録 第5集発刊

平成7. 6. 9 平成7年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会
全国小中学校環境教育研究会 定期総会
全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）
第十四代会長 江頭 基子 就任（中央公害審議会委員兼務）
8. 7 環境教育研究会 一日研修（港区立芝小学校）
12. 4 第31回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都北区立西浮間小学校）
平成8. 1. 26 第27回 全国小中学校環境教育研究大会（福岡県福岡市、福岡市博物館）
会報「碧い空」33号、研究紀要27号発刊
文部省、第2回全国環境フェアへの参加協力（10. 30～11. 1福岡県）
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊

平成8. 5. 30 平成8年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）
4. 5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
12. 6 第32回 東京都小中学校環境教育研究発表会
第28回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都渋谷区立神宮前小学校）
会報「碧い空」34号、研究紀要28号発刊
文部省 第3回全国環境フェアへの参加協力（11. 14仙台市）
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長・会長、副委員長：副会長）

平成9. 3. 31 環境教育研究集録 第7集発刊

平成9. 5. 23 平成9年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）
第29回 全国小中学校環境教育研究大会（高知県民文化ホール）

平成9. 8. 28～29 東京都小中学校環境教育研究会研究部夏季宿泊研修
(東京都杉並区立教職員研修所)

11. 18 第33回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区小松川第二小学校）
会報「碧い空」35号、研究紀要29号発刊
全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
文部省 第4回全国環境フェア参加（松江市）
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

平成10. 3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊

平成10. 5. 22 平成10年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）

第十五代会長 中庭 武雄 就任

8. 2～3 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）

平成11. 1. 22 第30回 全国小中学校環境教育研究大会

第34回 東京都小中学校環境教育研究発表会

（東京都杉並区立杉並第十小学校、セッション杉並）

会報「碧い空」36号、研究紀要30号発刊

第2回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力

東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：一代会長、副委員長：副会長）

3. 31 環境教育研究集録 第9集発刊

平成11. 5. 21 平成11年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都渋谷区立笹塚小学校）

8. 22～23 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）

9. 25～26 自然観察会実施（新潟県・当間観光リゾート）

12. 7 第35回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都渋谷区立笹塚小学校）

平成12. 1. 21 第31回 全国小中学校環境教育研究大会（岐阜大学教育学部附属心・中学校）

会報「碧い空」37号、研究紀要31号発刊

第3回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

文部省全国環境フェア参加（広島市）

環境パートナーシップ東京会議への参加

中央環境審議会企画政策部会と各種団体との意見交換会出席（経済社会のグリーン化）

3. 31 環境教育研究集録 第10集発刊

平成12. 6. 9 平成12年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）

平成12. 6. 9 第十六代会長 平部 武彦 就任

平成12. 8. 17～18 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区富士学園）

平成13. 1. 26 第32回 全国小中学校環境教育研究大会

第36回 東京都小中学校環境教育研究発表会

（東京都渋谷区立猿楽小学校・渋谷区立鉢山中学校）

会報「碧い空」38号、研究紀要32号発刊

第4回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

第2回 自然観察会（新潟県・十日町市）実施

東京都環境週間行事運営委員会に参加

第3回 文部省全国環境学習フェア（三重）参加

- 平成13. 3. 31 環境教育研究集録 第11集発刊
- 平成13. 6. 8 平成13年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）
8. 16～17 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 8～9 第3回 自然観察会実施（新潟県刈羽村、当間リゾート）
- 平成14. 1. 25 第33回 全国小中学校環境教育研究大会
第37回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立大杉小学校）
会報「碧い空」39号、研究紀要33号発刊
第5回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第4回 文部科学省全国環境学習フェア（滋賀）参加
環境パートナーシップ東京会議への出席
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成14. 3. 31 環境教育研究集録 第12集発刊
-
- 平成14. 6. 7 平成14年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）
第十七代会長 佐々木 定治 就任
8. 15～16 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 8～9 第4回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）
11. 15 第38回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立二之江中学校）
- 平成15. 1. 24 第34回 全国小中学校環境教育研究大会（千葉県成田市立吾妻小学校・吾妻中学校）
会報「碧い空」40号、研究紀要34号発刊
第6回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第5回 文部科学省全国環境学習フェア（金沢市）参加
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成15. 3. 31 環境教育研究集録 第13集発刊
- 平成15. 6. 16 平成15年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）
8. 14～15 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 6～7 第5回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）
- 平成16. 1. 23 第35回 全国小中学校環境教育研究大会
第39回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都新宿区立大久保小学校）
会報「碧い空」41号、研究紀要35号発刊
第7回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第6回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（群馬県片品村）
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成16. 3. 31 環境教育研究集録 第14集発刊
- 平成16. 6. 14 平成16年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

- 全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
8. 28～29 環境教育研修会（福島県Jビレッジ）
9. 4～5 環境教育研修会（新潟県当開高原）
- 平成17. 1. 20 全国理事会
1. 21 第36回 全国小中学校環境教育研究大会
第40回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立東葛西小学校）
会報「碧い空」42号、研究紀要36号発刊
第8回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第7回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（愛媛県松山市）
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成17. 3. 31 環境教育研究集録 第15集発刊

-
- 平成17. 6. 14 平成17年度 全国理事会
平成17年度 東京都小中学校環境教育研究会総会（東京都杉並区立泉南中学校）
第十八代会長 高橋 康夫 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 3～4 環境教育研究会 自然観察会 新潟県 当開高原
12. 1 全国理事会
12. 2 第37回 全国小中学校環境教育研究大会（愛知県小坂井町立小坂井西小学校）
- 平成18. 2. 10 第41回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都調布市立布田小学校）
会報「碧い空」43号、研究紀要37号発刊
第9回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール
第8回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（鳥取県）
- 平成18. 6. 6 平成18年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
8. 11～12 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（杉並区立教職員研修所）
8. 25 第10回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
9. 2～3 自然観察会（新潟県塗当開高原）
11. 9 全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
11. 10 第38回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都杉並区立泉南中学校）
第42回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第44号 研究紀要第38号発行
第9回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（つくば市）

-
- 平成19. 6. 12 平成19年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
第十九代会長 岸 栄子 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）

- 、
- 8. 24 第11回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
 - 9. 1～2 自然観察会（新潟県当開高原）
 - 10. 11 全国理事会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
 - 10. 12 第39回 全国小中学校環境教育研究大会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
 - 平成20. 2. 15 第43回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）
会報「碧い空」第45号 研究紀要第39号
第10回文部科学省 全国環境学習フェア参加（岡山市）
-

- 平成20. 6. 17 平成20年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（杉並区立泉南中学校）
第二十代会長 綿貫 沢 就任
 - 8. 4～5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）
 - 8. 8. 22 第12回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
 - 9. 6～7 自然観察会（新潟県当開高原）
 - 12. 4 全国理事会（板橋区立金沢小学校）
 - 12. 5 第40回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都板橋区立金沢小学校）
第44回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第46号 研究紀要第40号
第11回文部科学省 全国環境学習フェア（福島市）
-

- 平成21. 6. 15 平成21年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（杉並区立和泉小学校）
第二十一代会長 末吉 潤一 就任
- 6. 27～28 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
- 8. 21 第13回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 9. 5～6 自然観察会（新潟県当開高原）
- 11. 26 全国理事会（広島県海田町立海田東小学校）
- 11. 27 第41回 全国小中学校環境教育研究大会（広島県海田町立海田東小学校）
会報「碧い空」第47号 研究紀要第41号

- 平成22. 6. 28 平成22年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立杉並第四小学校）
- 6. 26～27 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
- 8. 20 第14回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 9. 4～5 自然観察会（新潟県当開高原）
- 12. 2 全国理事会（多摩市立南鶴牧小学校）
- 12. 3 第42回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）
会報「碧い空」第48号 研究紀要第42号

- 平成23. 6. 16 平成23年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）
8. 19 第15回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
11. 24 全国理事会（宮城県気仙沼市立大谷小学校）
11. 25 第43回 全国小中学校環境教育研究大会
（宮城県気仙沼市立大谷小学校・大谷中学校）
会報「碧い空」第49号 研究紀要第43号
-

- 平成24. 6. 26 平成24年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）
第二十二代会長 棚橋 乾 就任
8・20 第16回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
平成25. 1・2月 文部科学省・環境省
平成24年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者に向けた研修（協力）
2月 文部科学省 全国環境学習フェア（協力）
2. 14 全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）
2・15 第44回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都新宿区立東戸山小学校）
第48回 東京大会（東京都新宿区立東戸山小学校）
会報「碧い空」第50号 研究紀要第44号

- 平成25. 6. 18 平成25年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）
6. 27 東京都小中学校環境教育研究会 研究員発足
8. 22 第17回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
11. 28 全国理事会（秋田県大仙市大曲市民会館）
11. 29 第45回 全国小中学校環境教育研究大会（秋田大会 秋田県大仏市）
会報「碧い空」第51号 研究紀要第45号
平成26. 1. 24 第49回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立連光寺小学校）
1・2月 文部科学省・環境省
平成25年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者にむけた研修（協力）

- 平成26. 6. 17 平成26年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな～あに見学）
11. 20 全国理事会（神奈川県横浜市立永田台小学校）
11. 21 第46回 全国小中学校環境教育研究大会（神奈川大会 横浜市立永田台小学校）
研究紀要第46号
12. 13 第18回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
平成27. 1. 30 第50回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都板橋区立板橋第二小学校）
1・2月 文部科学省・環境省

平成26年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者にむけた研修（協力）

- 平成27. 6. 16 平成27年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）
第二十三代会長 国分 重隆 就任
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな〜に見学）
11. 19 全国理事会（東京都多摩市立多摩第一小学校）
11. 20 第47回 全国小中学校環境教育研究大会
（東京大会 多摩市立多摩第一小学校）
第51回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第52号 研究紀要第47号
12. 12 第19回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
12. 23 文部科学省・環境省
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン フォローアップ研修（協力）
- 平成28. 1・2月 文部科学省・環境省
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
-

- 平成28. 6. 13 平成28年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
第二十四代会長 小山 成志 就任
7. 22 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、田町スマエネパーク見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
11. 17 全国理事会（須賀川市内ホテル）
11. 18 第48回 全国小中学校環境教育研究大会（福島大会 須賀川市立白方小学校）
会報「碧い空」第53号 研究紀要第48号
12. 10 第20回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 平成29. 1・2月 文部科学省・環境省
平成28年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
2. 10 第52回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都品川区立第三日野小学校）
-

- 平成29. 6. 12 平成29年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
第二十五代会長 野澤 由美 就任
7. 28 エネルギー研修会（東京ガス根岸工場、田町スマエネパーク見学）
7. 31 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
- 7・8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
- 8・11月 文部科学省・環境省
平成29年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
12. 7 全国理事会（掛川市内ホテル）

12. 8 第49回 全国小中学校環境教育研究大会（静岡大会 菊川市立菊川西中学校）
会報「碧い空」第54号 研究紀要第49号
12. 9 第21回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 平成30. 2. 13 第53回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中野区立鷺宮小学校）
- 平成30. 6. 14 平成30年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
7. 27 エネルギー研修会（東京ガス新宿地域冷暖房センター見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（TKP新宿カンファレンスセンター）
- 8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
10. 27～28 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2018（協力）
11. 29 全国理事会（府中市内）
11. 30 第50回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会 府中市立武蔵台小学校）
第54回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第55号 研究紀要第50号
12. 8 第22回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 12・1月 環境省 平成30年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
- 平成31. 2. 23 平成30年度 水産多面的機能発揮対策シンポジウム（協力）
（全国漁業協同組合連合会、全国内水面漁業協同組合連合会）

- 令和元. 6. 7 平成31年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立浜田山小学校）
第二十六代会長 藤森 克彦 就任
7. 26 エネルギー研修会（東京ガス豊洲スマートエネルギーセンター見学）
- 8～2月 環境省 平成31年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
8. 8 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2019火力編（協力）
10. 26～27 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2019水力編（協力）
11. 21 全国理事会（富里市内ホテル）
11. 22 第51回 全国小中学校環境教育研究大会（千葉大会 富里市立根木名小学校）
会報「碧い空」第56号 研究紀要第51号
12. 7 第23回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 令和2. 2. 7 第55回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都町田市立南成瀬小学校）
- 令和2. 6月 令和2年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会
（新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催）
- 6月 第24回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール 中止
- 7月 エネルギー研修会 中止
- 9～3月 環境省 令和2年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
- 令和3. 2. 26 全国理事会（書面開催）
第52回 全国小中学校環境教育研究大会
第56回 東京都小中学校環境教育研究発表会

オンライン開催（録画配信・期間限定録画配信）
会報「碧い空」第57号 研究紀要第52号

令和3. 6月 令和3年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会
（新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催）

9～3月 環境省 令和2年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）

10. 30 高尾山自然観察会（東京都八王子市高尾山）

11. 19 全国理事会（書面開催）

第53回 全国小中学校環境教育研究大会

第57回 東京都小中学校環境教育研究発表会

オンライン開催（録画配信・期間限定録画配信）
会報「碧い空」第58号 研究紀要第53号

11. 20 リサイクル研修会（協力）

（主催：スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・日本缶詰びん詰レトルト食品協会・教育家庭新聞社）

大会宣言

環境教育は、人類を含めた地球上の生物全体にかかわる課題である。近年の地球温暖化等の環境問題は、自然の生態系に変化を与えるほど深刻な事態となっている。個人や社会全体がこれらの課題解決に早急に取り組むことで、持続可能な社会づくりを図らなくてはならない。環境教育はこの課題解決を図るための重要な学びであり、この地球上に生物が生存・繁栄を続けるために必要な教育である。

ここに、第53回全国小中学校環境教育研究大会、第57回東京都小中学校環境教育研究発表会を開催し、次世代を担う児童・生徒の環境にかかわる教育の在り方を追求するとともに、本大会に結集された総意をもって次の決意を表明し、その実現を期す。

- 一 環境教育は、地球的視野に立ち、地域に根ざした活動を通して生涯にわたる学びとして推進する。
- 一 環境教育は、自然を愛護すると共に、環境保全意識や環境倫理観、豊かな人間性を育む。
- 一 環境教育は、環境に対する正しい知識や、課題解決に取り組む能力を育成し、持続可能な社会づくりのための人材を育成する。
- 一 環境教育の小中学校での指導は、各教科や総合的な学習の時間、特別活動などすべての学びを通して実践し、指導を充実させる。

以上、宣言する。

令和3年11月19日

第53回全国小中学校環境教育研究大会

第57回東京都小中学校環境教育研究発表会

21世紀「環境の世紀」への提言

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

—環境教育で育む学力と環境保全意識—

令和3年度

第53回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会）

第57回 東京都小中学校環境教育研究発表会

研究紀要

令和3年11月19日 発行

発行 全国小中学校環境教育研究会

会長 藤森克彦

編集 研究部長 關口寿也

事務局 東京都調布市立北ノ台小学校

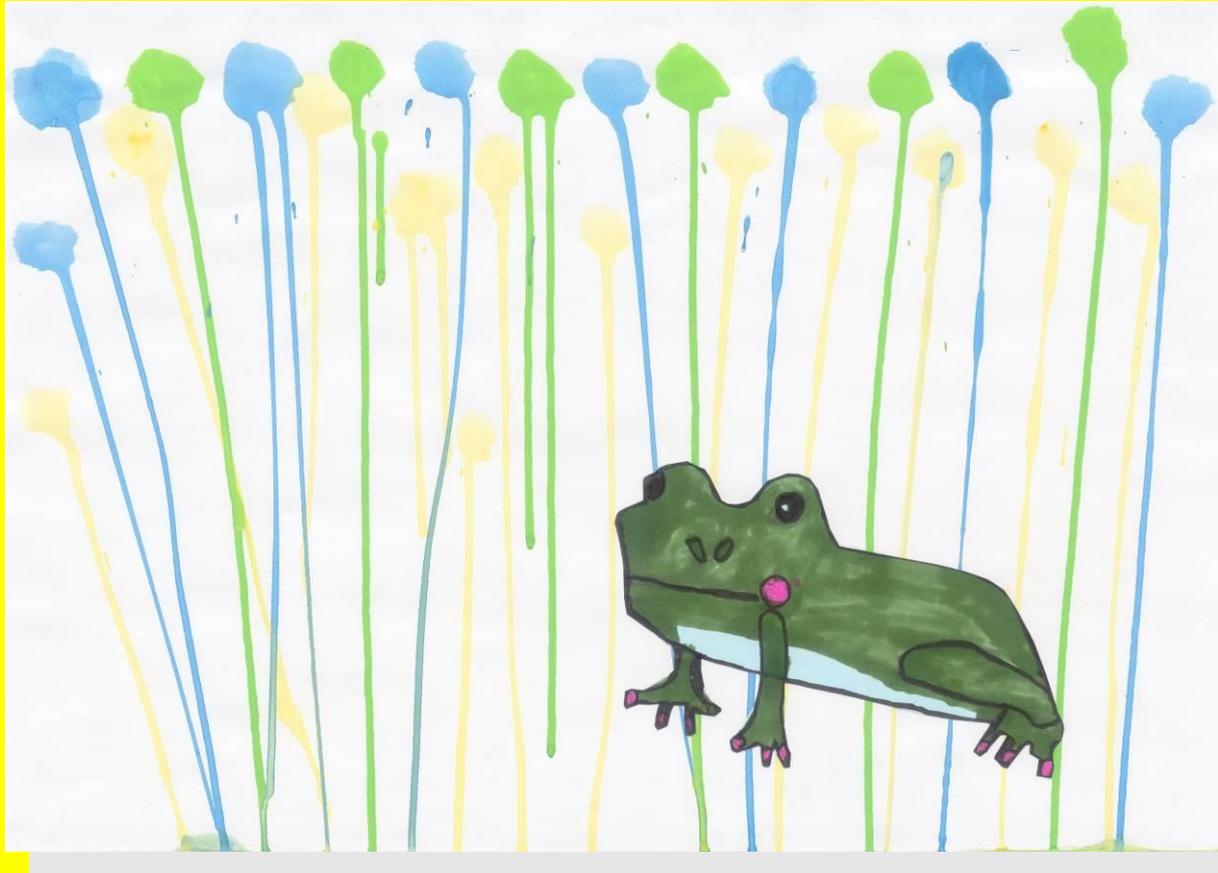
校長 箱崎高之

東京都調布市深大寺北町2-41-1

TEL 042-485-1291

印刷所 (株)東京巧版社

TEL 03-3881-4173



全国小中学校環境教育研究会
東京都小中学校環境教育研究会